○眞言一百八名讃之を用ふ、薩埵の軌にあり。

○印　二金剛拳にして箭を放つ勢にすと文り。

○引　欲金剛　金剛弓箭に住す　○印　二金剛拳にして箭を放つ勢にすと文り。

理趣經に云く欲箭。　義述に云く意生。　金剛薩埵の軌に云く欲金剛。　普賢金剛薩埵の軌に云く、大聖前に於て欲金剛を想へ、形服は赤衣、冠鬘瓔珞をもて種種嚴飾す、目に大聖を瞻、金剛弓箭の印に住す、欲金剛の密語に曰く　弱一縛曰羅、二合濕哩二合瑟知、二合娑去引也計二合麼吒三牛音

義述に云く、意生金剛は大悲欲箭を以て二乘の心を害す、所以に手に是の箭を持し、而も其の慾離俱幻平等智身を現ずと文り。五祕密軌に云く、欲金剛とは名けて般若波羅蜜となす、能く一切諸佛の法に通達し、無滯無碍なること猶し金剛の如し、能く諸佛を出生すと文り。

○弓　計里計羅金剛。　經に云く、觸。　義述に云く、醬利吉羅。　金剛薩埵の軌に云く、計里計羅。　薩埵軌に云く、次に大聖に於て右に計里計羅箭を想へ、色白うして、二金剛拳を以て臂を交へ抱印に住せよ、密語に云く　吽一嚩曰羅、二合計里引吉麼吽二義述に云く、中國の言に於ては觸と名く、衆生を捨てずして必ず解脫せしむるを以て

の故に、欲觸の性卽菩提と明すが故に、所以て抱持の相に住す、而も其の觸淨俱幻平等智身を現ずと文り。　五祕密軌に云く、是れ虛空藏三摩地、無邊の衆生と與に安樂と。

○引　愛金剛。　薩埵軌　經に云く、愛縛。　義述に云く、悲愍金剛。　薩埵軌に云く、大聖の後に於て愛金剛を想へ、形服みな青、右臂を竪て、摩竭幢を執り、左の金剛拳を以て其の臂を承く、密語に曰く　鑁一嚩曰里二合捉、二娑麼二合羅羅吒牛音　義述に云く、悲愍を以ての故に愛念の縛を以て普ねく衆生を縛し、未だ菩提に至らざれば終に放捨せずと文り。　五祕密軌に云く、是れ多羅菩薩大悲解脫に住し、無邊の受苦の有情を愍念して、常に拔濟せんことを懷ひ、安樂を施與す。

○引　金剛慢。　薩埵軌　經に云く、一切自在主。　義述に云く、金剛慢。　薩埵軌に云く、大聖の左邊に於て金剛慢尊を想へ、形服みな黃なり、二金剛拳を以て各の(三)膝に安し、頭を左に向へ少し俛けよ、密語に曰く　斛二嚩曰羅二合迦引冥、泮嚩一合哩怛藍義述に云く、金剛慢菩薩は、無過上智を以て一切衆生をして悉く毘盧遮那如來の體を證せしむと文り。　五祕密軌に云く、慢金剛とは是れ大精進波羅蜜、無礙解脫に住し、無邊の如來に於て廣く佛事を作し、及び衆生の利益を作すと文り。

(一) 曰里　或は曰ラ羅に作る。

(二) 膝　一本に骼に作る。

(二) 金剛 一本に金剛見に作る。

○㘕 嬉金剛東南方 經に云く、見清淨。義述に云く、(二)金剛菩薩。 金剛王軌に云く、意生金剛女。西北 薩埵軌に云く、初喜戲の印、二拳を以て心を繞らし、右に轉ぜよ卽ち成ず、密語を誦して曰く 糸羅底嚩曰羅二合尾遲賜儞二合怛羅二合吒。義述に云く、金剛見菩薩は寂照大惠の眼を以て、雜染界の妙淨土、乃至眞諦俗諦に於て唯だ一切法勝義眞實の諦を見るに不散不動なり、所以に意生の契を持し、而も其の三昧の身を現ずと文り。

○㘕 慢金剛西南の角 經に云く、適悅。 義述に云く、金剛適悅。 金剛王軌に云く計里枳梨金剛女。東北 薩埵軌に云く、西南の金剛笑菩薩、二拳を以て各の口の傍に在き、後に向へ散する勢にす云云密言に曰く 糸羅底縛曰羅二合一賀引細訶訶。義述に云く、金剛適悅菩薩、身塵に於て適悅淸淨を得、生死解脫に於て不厭不住なりと文り。

○㘕 歌金剛西北の角 經に云く、愛。 義述に云く、金剛貪菩薩。 金剛王軌に云く愛樂金剛女。東南 薩埵軌に云く、西北金剛歌菩薩は、左手を拳に作り、臂を竪て頭指を展べて身に向へ、箜篌を持し、以て印を爲る。右は絃を彈く勢に作る。密語に曰く 糸羅底縛曰羅二合一擬引諦二諦。三 義述に云く、金剛貪菩薩は卽ち愛にして淸淨なるを得、故に遂に能く貪を以て而も功德智慧を積集して疾く菩提に至ると文り。

○㘕 舞金剛東北 經に云く、慢。 義述に云く、金剛自在菩薩。 金剛王軌に云く、意氣金剛女。西南 薩埵軌に云く、東北の金剛舞菩薩、二手拳を以て旋轉して舞印を結ぶ。密語に曰く 糸羅底嚩曰羅二合儞哩二合諦吠波ㇾㇾ。三 義述に云く、金剛自在菩薩、三界に出入し自在無畏にして生死涅槃に於て而も大我の體を得と文り。

○㘕 花菩薩東南 經に云く、莊嚴。 義述に云く、金剛(二)春菩薩。 金剛王軌に云く、時春菩薩。西北 薩埵軌に云く、便ち二拳を以て上に相並べ、花を散ずる勢の如くにせよ、是れ春金剛菩薩の印なり、當さに想へ、聖者、中院の東南の隅に居す、色服俱に白、持花以て印を爲る、誦言に曰く 唵磨度嚩曰哩二合共共。 義述に云く、金剛春菩薩は、能く菩提の覺花を以て起て雲海を供養す、亦た方便を以て衆生に授與し功德の利を作す、花是れ春の事なるを以て遂に以て之に名くと文り。

○㘕 香菩薩西南 經に云く、意滋澤。 義述に云く、金剛雲菩薩。 金剛王軌に云く、時雨菩薩。東北 薩埵軌に云く、雲金剛菩薩焚香の印、二拳を以て相並べ下に擲げ、卽ち成ず、想へ此の尊、道場の內院西南隅にあり、形服みな黑、香爐を持し、以

(二) 春 或は眷屬に作る。

て印を爲る、密語に曰く　唵著伽引嚩曰里二合麼嚩ゝゝ　義述に云く、金剛雲菩薩は能く法澤の慈雲を以て含識を滋潤し、亦た方便を以て諸の身心を授く、便ち無始無明臭穢の不善を化して無量の供養香雲を成ずと文り。

○オ　燈菩薩西北　經に云く、光明。　義述に云く、金剛秋。金剛王軌に云く、時秋菩薩。東南　薩埵軌に云く、秋金剛菩薩燈燭の印、二拳を以て二大指を並べ竪てよ即ち成す、當さに想ふべし、此の尊は內院の西北隅に在り、形服みな赤、燈を持し、以て印を爲る。密語に曰く　唵舍羅娜縛曰里三合暗引暗。　義述に云く、金剛秋菩薩、智に智燈を以て諸の黑暗を破し、亦た方便を以て衆生に授與し、無量の光明を起して靈海を供養すと文り。

○塗　塗菩薩東北　經に云く、身樂。義述に云く、金剛霜雪。　金剛王軌に云く、時冬菩薩。西南　薩埵軌に云く、金剛霜雪菩薩の印、二金剛拳を並べ覆せ、其の胸を摩し、兩向へ散す、（二）若しは塗香の勢にす、內曼荼羅の東北隅に住し形服みな黃色なり。密語に曰く　唵嚩曰羅二合勢始嚩吽短吽短　義述に云く、金剛霜雪菩薩は、能く五無漏蘊香を以て衆生の心體に塗り、煩惱の熱を滅し、五分法身の香を成ずと文り。

（一）若　如の字なり。

○ゼ　鉤菩薩東門　經に云く、色。　義述に云く、金剛色。　薩埵軌に云く、金剛鉤菩薩は曼荼羅の東門の中に居し青色なり、二金剛拳を以て、二小指を反して相ひ鉤し、左の頭指を立竪て、右の頭指の上節を屈し、上下來去せよ、是れ鉤印なり、密語に曰く　嚩曰羅二合矩勢二弱　義述に云く、金剛色菩薩は、色淸淨智を以て、淨妙界に於て起ては色身を受用し、雜染界に於て起ては色身を變化し、而も攝二成の事を爲すと文り。

○索　索菩薩南門　經に云く、聲。　義述に云く、金剛聲。　薩埵軌に云く、南門の金剛索菩薩は色黃にして索を持し印を爲る、前印を解かずして、二頭指を改め、頭を以て相柱へ環の如くせよ、是れ索印なり、密語に曰く　嚩曰羅二合播引勢一吽　義述に云く、金剛聲菩薩は、聲淸淨智を以て能く六十種の梵音を二衣し、法界に普周して而も引入の事をなすが故にと文り。

○ヂ　鏁菩薩西門　經に云く、香。　義述に云く、金剛香。薩埵軌に云く、西門中の金剛鏁菩薩は赤色にして鏁を持し印を爲る、前印を以て二頭指互相ひに鉤し結び交へ其の臂を屈せよ、是れ鏁印なり。密語に曰く　縛曰囉二合餉迦施一合　義述に云く、

（二）哉　或は云ふ承の字か。

（三）衣　未詳

金剛香菩薩は、香清淨智を以て金剛界自然名稱の香を發し、一切の心に入り、以て止留の事を爲す故にと文り。

○𑖢 鈴菩薩北門　經に云く、味。　義述に云く、金剛味。　薩埵軌に云く、北門の中金剛鈴菩薩は綠色にして鈴を持し、以て印を爲る、前の鏁印の如くにし、二掌を以て背相着け動搖せよ、是れ鈴印なり。密語に曰く　縛曰囉二合(こ)健蘇一舸二　義述に云く、金剛味菩薩は、味清淨智を以て瑜伽三摩地無上法味を持し、以て歡喜の事を爲すと文り。

(一)健等　或は轂滯に作る。

(二)壇中云云　道場觀。

◎般若菩薩

(三)壇中に𑖪字あり、變じて八葉の蓮花と成る、蓮花の上に𑖪字あり、變じて淨月輪と成る、月輪の中に枳孃(ジニヤ)字あり、變じて梵夾と成る、梵夾變じて般若菩薩となる、首に五佛冠を戴き身に金剛冑を着す、形色白肉にして大光明を放つ、額の上に眼あり、六臂を具足す、左の第一手には梵夾を持して心に當て、第二手は掌を仰けて齊下に安し、第三手は風指を仰け屈して餘の四指を舒べ、右の第一手は風指を屈して四指を屈して

(三)壇中云云　道場觀。

梵夾の上に當て、第二手は施無畏にし、第三手は掌を竪て水指を屈して四指を舒べ、寶蓮花に坐す、遍ねく毛孔の中より無量の諸佛、四攝八供養乃至八方天等を流出し、恭敬し圍繞せり。

○本尊三昧耶印二手金剛合掌して二大指各の二頭指を拄し、二合(ハ)擢引(ラヽタイ)囉茗跢曳(キリナエイ)、引(オン)唵、三乞利地(キリチ)入室哩(シツリ)四枳嚕(シユロ)二合底尾惹曳(ビジヤエイ)、五娑嚩(バ)二合賀引

○梵夾印　眞言に曰く　(一)唵(オン)、地引(ナウ)室利(シツリ)二合輸嚕(シユロ)二合多(タ)、尾惹曳(ビジヤエイ)娑婆賀

○梵號　阿利也(アリヤ)波羅枳孃(ハラジニヤ)波羅蜜多(ハラミタ)　○密號　智慧金剛。

◎普賢

(二)觀想せよ、清淨法界宮の大曼荼羅の中に𑖥字あり、變じて滿月輪と成る、月輪の中に劍字あり、變じて八葉の蓮花と成る、花臺の上に𑖥字あり、五胎金剛杵　或は鈷赤は賢瓶と成る、と成る、金剛杵變じて普賢菩薩と成る、首に五佛の寶冠を戴く、身色水精の如し、右手には五胎杵を持し、左手には般若鈴を執る、白象王に乘じて大菩提心に住す、及び八金剛妃等、無量の眷屬前後に圍繞せり。

(一)唵云云　原本梵字あれども今は省略す。

(二)觀想せよ　道場觀。

根本印 二羽外縛して二中指を竪てよ。眞言に曰く 三摩耶薩埵鑁（サンマヤサトバム）

○根本印 摩訶薩埵（マカサトバ）、噜曜二合薩怛嚩（ラサトバジャクム）二合索吽（バムコクソ）鑁斛薩羅多薩怛鑁（ラタサトバム）

○梵號 阿里也三曼多跋娜羅菩地薩怛縛（ラ） ○密號 普攝金剛 亦は眞言金剛

㊎五字文殊

㈡壇の中に師子座あり、座上に梵字あり、淨月輪と成る、輪内に梵字あり、變じて蓮花臺となる、衆寶をもて莊嚴せり、其の上に梵字（或はdあり）、變じて智劒（或は忙劒）と成る、智劒變じて文殊師利菩薩と成る、身色爵金にして童眞殊妙なり、首に五髻（ケイ）冠を戴き、項背に圓光あり、右手には金剛劒を把り左手には梵夾（クウ）を持す、左に那羅延あり、四種の慓幟を持す、右に金翅鳥王あり、恐怖形を作す、及び無盡惠、善哉童子等の諸菩薩恭敬し圍繞せり云云。

○根本印 外縛して忍願を申べて劒形の如くし、身の五處を印す 眞言に曰く 阿羅跛者曩（アラハシャナウ）

○又た梵夾印 五字瑜伽儀軌に云く 次に五髻の印を結び 諸相を具足せしめ 戒惠及び檀方 忍力願進度 印形は五峰の如し 心・兩肩・喉を印す 此を五髻の印と名く

此の本眞言を誦せよ

曩莫參滿跢沒馱引南阿鉢羅二合底賀哆舍娑曩引喃怛儞也二合他唵 羅羅 薩嚩二合羅阿鉢羅二合底賀哆舍引薩曩引俱慶羅路跛駄哩捉吽引吽引薩顛二合吒薩顛二合吒娑縛二合賀引

○梵號 阿利也曼殊師利 ○密號 般若金剛 儀軌に云く 若し善男子・善女人有りて、纔かに一遍を誦すれば、一切如來の所說法藏修多羅藏を讀誦し受持するに、彼の功德等し。

又た云く 阿闍梨、此の壇に對ひて金剛劒印を結び、五字を念誦す、時に文殊師利此の阿闍梨を加持するに、卽ち無礙辯才を得しめたまふ。

又た云く 念誦の數、五十萬遍を滿せば、卽ち無盡の辯才を獲、文殊師利の如く等うして異りあることなし、虛空に飛騰して所求の世間・出世間の事、悉く成就することを得。

又た云く 念誦の數一俱胝を滿せば諸の苦惱を離れ、二俱胝遍を滿せば五無間等の一切の罪障永く盡して餘なし、三俱胝遍すれば一切の諸の三昧門を證悟す、四俱胝遍すれば大聞持を獲、五俱胝遍すれば阿耨多羅三藐三菩提を成ず。

㈡壇の中云云 已下道場觀。

又の法は、舍利塔に於て四面に周旋し右に轉じて五字陀羅尼を書し、塔を遶りて行道するに念誦して斷絶せしむることなかれ、五落及遍を滿すれば、虛空の中に於て而も其の身を現じ、乃ちために法を說かん。

◎八字文殊

(二)塊中に𑖀字あり、變じて八葉の蓮花と成る、花臺に𑖀字あり、淨月輪と成る、輪中に𑖀(ム)字あり、變じて三摩耶形と成る、三摩耶形變じて大聖文殊と成る、身色黃金にして大光明を放てり、師子王の座に乘じ右に智慧の劒を操持せり、左に靑蓮花を執る、花臺に智杵を立てたり、首髻(シュケ)に八智の尊ねます、暉(クヰ)光十方に遍して行仁目に對するが如し、第二院には童子等の八大文殊を請召して次第に之を廻る、皆な面を中尊に向へ奉敎(ブケウ)の勢の如し、蓮花の上に坐し各の師子に乘ず、圓滿の外四角の中に四大明王あり、第三院に四攝十六大天等、各の本法に住す、乃至無量の聖衆恭敬し圍繞せり。

○根本印口傳あり　眞言に曰く　唵(オム)、引阿(アク)引入(ヒ)引哩(ラム)引曜(ヤク)引佉(キャシャ)左二(ラクタン)略曇(ソワカ)。

白檀　龍腦　薰陸云云

(一)塊中云云　造揚翫。

(二)略　異本に略に作る。

儀軌に云く　是の八字最勝大威德心眞言所住の處、佛の在世の如くにして、異ることあることなしと文り。

又た云く　若し能く此の陀羅尼を念誦すること一遍すれば、即ち自ら護ることを得、兩遍すれば、即ち能く同伴を護らん、若し三遍を誦すれば即ち大いに住處を護る、十地の菩薩も逾勝すること能はず、何に況んや諸の小類の衆生をや。若し四遍を誦すれば即ち妻息を擁護することを得、若し五遍を誦すれば即ち能く一切の眷屬を擁護す、若し六遍を誦すれば即ち能く一切衆生の諸の苦難等を擁護す、若し七遍を誦すれば即ち能く一切の城邑、村坊、聚落等を擁護すと文り。

又た云く　每日の三時、法に依て道場に入るに、時特に一百八遍せば所求みな意に稱(かな)ふて圓滿し具足することを得、大富貴を得、所行自在にして臨命終の時に普門三昧を得、及び文殊師利菩薩を見上ると文り。

又た云く　若し福慶祿位吉祥の事を求めん者(ヒト)は、心中に室利二合字を書け、若し七難九橫怖畏急難天變怖畏等の難を滅除せん爲には、心中に滿字を書け、若し怨人を降伏し相好(よし)みて惡人を捨てしめんことを求めば、心中に淡字を書け、若し惡人有て降伏し難

く、屠兒・獵師・外道の佛法を信ぜざらん者を、惡心をして摧滅し或は破壞せしめんとおもはば、心中に梵文の悉置唎(シッチ)二(ニ)字字を書くべしと文り。

又た云く　行人先づ八種の心を興し、方さに法を持すべし。第一は慈悲心、二は無垢心、三は無我所心、四は無勝附(フ)心、五は有平等心、六は無怨(ウン)害心、七は有哀愍心、八は無貪利心なりと文り。

一髻文殊儀軌に云く　速かに一切の善事を成就せしめ、生死の大苦海を越度するが故に。

又た云く　若し能く此の陀羅尼を受持せば、先づ曾て毀犯せる尸羅の三業虧失し、悉く清淨なることを得、一切の破戒の罪業を消除し、永く惡道を離れ、常に人天に生れて諸根調柔に、智慧清淨にして、一切事の中悉く通利することを得。

又た云く　白緤の上或は絹素の上に於て、一髻文殊師利菩薩童子形を畫け、金色にして千葉の白蓮花上に半跏坐し、左手に青蓮花を執る、花上に如意摩尼寶(ニ)珠あり、右手に楊柳枝を執る、指掌を外に向へ五指を垂下し滿願の印を作る、熙怡微笑して種種の珠鬘・頭冠・瓔珞をもて其の身を莊嚴す、此の像を畫き已て一淨室に於て方壇を塗拭し、

(二)字　合の字か

(三)珠　珠の字か

(一)立に作る。一本に位

內より外に向へ三院に布(一)立し、十七尊を安置す、具さには五字瑜伽法の中の所說の如し、應さに上妙香・美餌・菓子を以て精誠供養すべし、此の像を壇の東面に置き、行者は面を東に向へ像に對ふと文り。

又た云く　安悉香・白檀香・蘇合香を取り、此の三種の香を常に供養に用ひよと文り。

又の法　五色の線長け一尋なるを取り、前の眞言を誦して加持すること一百八遍、結一結を作し廿一結を滿し、線結を鉢中に置いて像の前に安き、力分に隨ひて文殊を供養せよ、日日此の鉢中に於て上上の黃金廿一兩を現出す、此の金心に停貯積集するを得す、放ち用ひ、功德を修し、三寶を供養するに用ひて盡竭(ツク)することなし。若し藏貯積集せば便(スナハ)ち隱沒して更に復た出づることなし。

文殊六字法に云く。　又の法は、紫檀を以用て長さ六指、克(キザ)みて蓮花を作れ、更に此の檀を研(カガ)き末にして水に和し、之を塗りて誦すること百千遍、十五日の夜滿月の時に至て、槙前に於て蓮花葉を取り、兩手に花を案して呪を誦し槙上に至るに、光出づれば卽ち其の花を取れ、彼の人をして二八十六歲の如く成せしむ、人身相端嚴にして金色の光明千日に過ぐ、威光は天童子の如し、一切成就呪仙みな恭敬し、壽命一劫、劫盡

き已て後ち極樂世界に往生せん。

又の法は、月蝕の時に於て白菖蒲の根を取り、瞿妹耶・糞・乳・酪・蘇、此の五を和し菖蒲の根を洗ひ、洗ひ已れば寶鉢羅樹葉に裹む（下に四葉を安き上に三葉を著く）呪至れば或は煙出で、或は焱或は火焔出づ、若し焱氣の時は衆生歡喜を得、及び一切の論難みな勝つ。若し煙出づる時は安達底を得、壽一萬年なり、若し火焔出づれば阿迦舍に昇ることを得て壽命一大劫ならんと文り。

超勝三界經文殊師利品に云く　若し人幾かに一遍を誦すれば、八萬四千の十二園陀經藏を誦するが如し、若し兩遍を誦せば文殊師利・普賢隨逐し四衆圍繞し、是の慈無畏を加備せん。

心地觀經に云く

文殊師利大聖尊は　三世諸佛を以て母と爲す

十方の如來の初發心は　皆な是れ文殊の敎化力なり

一切世界の諸の有情　名を聞けば身及び光明を見

並に隨類の諸化現を見れば　皆な佛道を成ずること思議しがたし。

文殊般涅槃經に云く　若し名を聞く者は、千二億劫の生死の罪を除く、若し禮拜供養する者は恒に佛家に生ず、若し名字を稱ふること一日・七日ならんには、文殊必ず來らん。若し宿障あらば夢中に見ることを得、所求圓滿せん、若し形像を見れば百千劫の中、惡道に墮せず、若し慈心を行せば卽ち文殊を見ることを得ん。

若し名を受持し讀誦する者あらば、設ひ重障あるも阿鼻極惡極大ゝに墮せず、常に他方の淸淨佛土に至らん。

寶積經に云く　又た百千億那由他の佛、衆生を利益するに、文殊師利の、一切中に於て所化利益するに及ばざるが故に。

若し文殊師利菩薩の名を稱せば福彼の百千億の諸佛の名稱を受持するより多し、過去平等世界中の龍種上智尊王如來　現在北方常喜世界中の歡喜藏摩尼寶積如來　未來南方淸淨圓明世界中の普見如來、大斯那國淸凉山文殊師利菩薩、東方金色世界中の大聖文殊師利菩薩、西方金剛山頂入首楞嚴三昧大聖文殊師利菩薩

虛空藏

(二)妙高山云云　道場觀。

(二)妙高山の頂上に𑖦字あり、七寶の樓閣と成る、此の寶宮殿の中に師子座あり、塵の上に𑖦字あり、八葉の蓮花と成る、蓮花の上に𑖦字あり、淨月輪と成る、月輪の中に𑖦(或は𑖦或は𑖦)字大光明を放ちて遍ねく十方世界を照す、其の中の有情此の光に遇ふに罪障を消滅し、福壽を增長せざるなし、此の𑖦字變じて摩尼寶と成る、或は摩尼寶變じて虛空藏菩薩と成る、身色黃金にして容顏殊妙なり、首に五佛の寶冠を戴き、項背に圓光あり、寶蓮花上に半跏して坐す、右手は與願の勢なり、左手は左の乳に當て頭指大指は寶を捻す(或は上に如意寶珠を持す。)及び八供養四攝等の無量の聖衆前後に圍繞す、是の如く觀じ已れ云云。

○根本印　二羽金剛縛して進・力・實形にし、禪・智・並べ立てよ。眞言に曰く

○又の印相　右手の五指を仰け舒べ、其の頭指を屈し、大母指と相捻し臥ち香を捻する如し、此は虛空藏菩薩の如意寶珠成辨一切事の印なり。

唵縛日羅囉怛曩吽(七遍加持す、唵或本)

南牟、(ナウボウ)一阿迦(アキャシャ)去(シャ)引捨、(シャ)野可(カ)の反、二揭(ギャ)去(ヤ)引婆(バ)去(ヤ)引耶、余可の反、三唵(オン)四阿唎(アリ)、五迦(キャ)入摩唎(マリ)、六慕唎(ボウリ)、七娑嚩賀(ソバカ)引八

○又の印　虛合して二風中指に付け二空月に入れよ

唵、(オン)阿迦奢(アキャシャ)、三曼多(マンダ)、昷誐他(トギャタ)、尾質怛藍(ビシッタラン)、縛囉達囉(ハラタラ)、莎訶。

求聞持法に云く

薄伽梵の言く、此の陀羅尼は是れ過去・現在の一切の諸佛に同じく說き玉ふ所なり、若し能く常に此の陀羅尼を誦する者は、無始より來(このかた)の五無間等の一切の罪障悉く皆な銷滅し、常に一切の諸佛菩薩に共に護念せらるゝことを得、乃至未だ成佛せざるより來た、所生の處に、虛空藏菩薩恒に隨て守護して、諸の有情をして常に樂ふ所を見せしめ、諸の善願あるものは滿足せずといふことなし、一切の苦患皆な悉く鎖除し、常に人天に生れて惡趣に墮せず、生生の處に常に宿命を憶す、設ひ如法ならずとも但だ能く常に誦すれば、福を獲ること是の如しと文り。

又た云く　陀羅尼を誦し其の力の能(たへ)んに隨て、或は一日に一上、或は一日に兩上せよ、始めより終に至る每に、初日の遍數の多少の如し、亦は初上の如し、增減することを得ざれ、前後通計して百萬遍に滿す、其の數終りに及ぶまで亦た時限なし、然して中間に於ても間闕を容れず、復た日蝕或は月蝕の時に於て、力に隨て飮食財物を捨施して、三寶に供養し、即ち菩薩及び壇を露地の淨處に移して安置せよ、復た牛蘇一兩を取て熟銅の器の中に盛り貯へ、並に乳の有る樹葉七枚、及び枝一條を取て、左壇の邊に置け、花香等の物、常の數に加へて倍せよ、供養の法一一に前に同じ、供養し畢已りて前の樹葉を取て壇中に重ね布け、復た葉の上に於て蘇器を安置せよ、還て手印を

作りて陀羅尼三遍を誦して此の蘇を護持せよ。又た樹の枝を以て蘇を攪せて其の手を停むること勿れ、目に日月を觀、衆ねては亦た蘇を看よ、陀羅尼を誦すること遍數を限ることなし、初めて蝕するより後ち退て未だ圓ならざるより已來た、其の蘇に卽ち三種の相現することあり。一は氣、二は煙、三は火なり、此の下中上の三品の相の中に、隨て一種を得つれば、法卽ち成就し、此の相を得已りぬれば便ち神藥と成る、若し此の藥を食すれば卽ち聞持を獲て一たび耳目を經るゝに、文義俱に解す、之を心に記して永く遺忘することなくんば、諸餘の福利無量無邊なり、今具らく略して少分の功德を說く。

◎◎地藏

(一)壇上に蓮花あり、蓮花の上に𑖨字あり、變じて金剛幢（或は卽意寶珠）と成る、金剛幢變じて地藏菩薩と成る、外には聲聞形を現じて內には菩薩の行を修す、福智の二嚴之を以て莊嚴となし、恒沙の萬德之を以て眷屬となす。

○根本印 二羽拳にして二中指を開く　唵（カ）賀賀賀（カカカカ）毘三摩曳（ヒサンマエイ）莎訶（ソワカ）

○又の印 內縛して地・水・空合せ立てよ。　南、一訶訶訶（カカカ）、素怛拏（ソタト）、莎訶　○梵號　阿里也（アリヤキ）乞叉底藥婆（シヤチギヤラバ）

○密號　悲願金剛。

金剛頂地藏念誦法に云く　若し一切衆生有て此の心呪を誦持して三塗に墮せば、我誓て大日普賢たることを得じ。

又た云く　若し人あつて毎日此の心呪三百五遍を誦すれば、其の人臨命終の時、地藏菩薩を見たてまつり、安樂國に往生せん。

又た云く　若し纔かに是の心呪を誦すれば、能く無量罪を滅す、何に況んや日日に誦持する者、福德不可思(二)儀にして、末世に佛法滅する時に於て、一切速かに成就せんと文り。(二)地藏本願經に云く　若し善男子・善女人有て、是の地藏菩薩摩訶薩の名を聞かん者、或は合掌せん者、讃歎せん者、作禮せん者、戀(三)慕せん者、是の人三十劫の罪を超越して、普ねく廣く有情を利せん。若し善男子・善女人有て、或は形像を彩畫し○一瞻一禮せん者、是の人百遍三十三天に生じて、永く惡道に墮せじ。

(四)又た云く　卽ち十種の利益を得ん、何等をか十となす。一には土地豐壤、二には家宅永安、三には先亡生天、四には現存壽益、五には所求遂げ竟る、六には水・火災な

(一)壇上云云　道場觀。

(二)地藏本願經上卷。

(三)慕　意の字か

(四)又云く　同經下卷。

し、七には虚耗(ケウ)胖除、八には惡夢を杜絶す、九には出入神護、十には多く聖因に遇ふ云云。

十輪經に云く　此の大菩薩は是れ諸の微妙功徳の伏藏、是れ諸佛脫珍寶出處、○如意珠の、衆の財寶を雨すが如く、所求する所に隨て皆な滿足せしむ。○熱渴せる者に與ふれば清冷の水と作り、飢乏する者の爲めには諸の甘菓と作り、露形の者のためには諸の衣服と作る。○貧匱の者のためには如意寶と作り、諸の穢穢のためには甘澤雨となり、濁水のためには月愛珠と作る。

本願には穢土を擇し　惡衆生を成就し　堅固正勤を起して　久しく諸の苦行を修せんと文り。

○○持世菩薩

(二)壇中に八葉の蓮花あり、蓮花臺の上に月輪あり、輪の中に駄(ダ)字あり、變じて頗羅菓(此には大石榴といふ。)頗羅菓變じて持世菩薩と成る、身色青黃にして微笑の容を現ず、右の手に頗羅菓を執り、左の手に施無畏、頭冠・環釧をもて種種に莊飾し結跏趺坐す、形ち梵天の

(二)壇中云云　道場觀。

如し、其の蓮花座の下に二龍王あり、其の形ち人身を作る、頭上に龍蛇頭あり、頂上に寶珠を帶す、兩手を以て七寶の箱を捧ぐ、一龍王寶瓶を執り、半身は水中にあり、右邊に大勝天あり、一手に蓮花を執り、一手は行者を招く勢の如くす、其の像の上兩邊に二天仙あり、七寶を雨らし空中に滿つ、乃至無量の眷屬恭敬し圍繞せり。

○根本印　無名指を以て上節の文を捻し、又た大指を以て無名指の甲上を押す、兩手亦た然り、腕を相合せ兩小指を双へて中指の中節の背に博け着け、二中指の頭相拄へ、二大指を並べ二頭指直く竪て、即ち是れ此の印は乃ち是れ一切諸佛同共に宣説す、若し印を結び並に諸大呪心呪等を法の如く誦持せば、一切の願滿し、所求の者皆成就することを得。眞言に曰く　唵、引筏素駄(バッタ)上唎上娑縛(ソバ)二合賀此を根本呪と名く。　○心眞言に曰く　唵室哩(シリ)二合筏素(ハソ)、娑嚩(ソワ)二合訶(カ)　心中心眞言に曰く　唵婆蘇(バッ)、莎二合訶

持世儀軌に云く　正月夜半の時、像の前に於て十二部經の中に、如來の説きたまふ所の喜悦偈あるを取り、即ち先づ此の偈一遍を誦し、並に呪一遍を誦せ、是の如く相間(まじ)へ各の廿遍を誦し、清淨に供養し並に鮮潔の衣服を着け、乃至六箇月を滿し竟れば、其の七寶等還た前の如く雨下し、所有の庫藏みな悉く盈滿す。如し其れ七寶を雨らさず、人中に或は識らざる者あらば、方便して錢寶等の物を送り、頻りに來て呪師に與ふるも亦た得んと文り。又た云く、白月十四日より起首(はじ)め、十五日滿に至り、或は八日に

起し十五日に滿す、將さに像を舍利塔の前に將ねて、面を西に向へて安置し、像の前に種種の香花百味の飮食を敷き設けて而も供養を爲せ、其の毘那夜迦別に一邊に在て還た種種の飮食供養を作せ、毎日白檀・沈香を以て相和し燒し、並に蘇燈一百盞、呪師像の前に於て坐し面を像に向へ瞻仰して至心に呪を誦すること一夜、明相出づる時に至らんに、一切種種の珍寶を雨らし、皆な悉く人に過ぎ、其の宅屋中の所有の庫藏、悉くみな盈滿せん。

(二)壇中云云　道場觀。

◎◎藥王

(二)壇中に蓮花あり、花臺の上に月輪あり、輪の中に𤙖字あり、字變じて蓮花と成る、蓮花變じて藥王菩薩と成る、相好圓滿して眷屬圍繞せり。

○印普通　眞言に曰く　唵(オン)𤙖逝(ハイセイ)捨羅(シャラ)惹耶(シャヤ)、莎哥(ソハカ)　又た眞言に曰く　歸命紇(キツ)反拏(ハンナ)哩(リ)　焰(エン)劒莎哥。

◎◎馬鳴

(二)壇中云云　道場觀。

(二)壇中に白蓮花あり、花臺上に月輪あり、輪の中に迦(キャ)字あり、變じて線勾と成る、線勾變じて馬鳴菩薩と成る、身相白肉色にして首に花冠を戴けり、二手合掌して白蓮花に座し淨白衣を着し瓔珞をもて身を莊(かざ)り、白馬に乘り、右足を垂る　六臂に於て各の標物を持す、別本軌に云く、其の形ち六臂又は二臂云云　及び無量の眷屬圍繞す云云。

○印左の中指・無名指を屈し、大母指を以て折て彼の二指の甲を押し、頭指及び小指を舒べて心上に安し、右手には數珠を把り眞言を念ず、此を玉環成就一切所願の印と名く。　眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南(ナウマクサンマンダボダナム)迦迦馬鳴(キャキャメイシャウ)、吃哩(キリ)、吒羅佉吃(タラキャキャ)、哩吒羅佉毘多羅儞(リタラキャビタラニ)、莎哥(ソハカ)

別本軌に云く十指を交へ絞し、右、左腕を押し相雜し、印を以て五處を印す云云　又た眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南迦、縛曰囉二合縛多(バタ)曩(ナウム)吽、馬鳴紇哩(メミヤウキリ)二合莎哥

○心中心呪　唵縛曰羅、斫迦羅(シャキャラ)吽、弱吽鑁斛。分形大千　化爲蠶(クエサム)室　口吐絲(トシ)線(シン)

巡千世界　供養感應　福祚(ソ)無邊

◎◎龍樹

(二)壇中に草座あり、座上に曩字あり、變じて梵筴と成る、梵筴變じて龍樹菩薩と成る、聲聞形像にして袈裟衣を着す。

○印金剛合掌　眞言に曰く　曩莫三曼多沒駄南、佉多吽、莎訶。　亦た說に云く　唵縛日羅、二合娑瀉縒、娑嚩訶

○龍樹甘露眞言　唵娑枳底、婆婆二娑羅底、二度多羅、那耶三娑嚩賀　已上は善無畏三藏祕法の中に之あり。

○梵號　那伽、閼剌樹那

◎普通諸佛

○種子𑖦𑖼　○三摩耶形　智印

○印金剛合掌　○眞言に曰く　曩莫三曼多沒駄南、一暗、薩嚩沒駄、冒地薩怛嚩、乞哩捺野、儞也、吠者嚕、曩莫、薩嚩尾泥、莎訶

◎諸菩薩

○種子𑖪𑖼　○三昧耶　寶形　○印合掌　○眞言に曰く　曩莫三曼多沒駄喃、一訖刀二合拏、入多羅閻欽娑嚩二合賀引

又た云く　曩莫三曼多沒駄喃、迦、薩嚩他、尾賽底、尾枳囉拏、達羅賽駄覩、涅惹多三三詞莎訶

◎緣覺

○種子𑖥𑖼　○三昧耶形　錫杖　○印內縛して火輪を竪て、二の端岡かに合せよ　○眞言に曰く　曩莫三曼多沒駄南、嚩

◎聲聞

○種子𑖨𑖼　○三昧耶形　梵夾　○印二手掌各の舒べ、左仰け右覆せ相合せよ○眞言に曰く　唵、計都、鉢羅底也野、尾誐多、羯摩、儞哩惹多、吽莎訶

國譯七卷鈔五

○不動　○降三世　○軍荼利　○大威德　○金剛藥叉　○烏樞沙摩　○金剛童子
○無能勝　○步擲金剛　○大輪金剛

◎◎不動

（一）先づ洗浴し及び出行せんと欲せば、先づ不動の明を誦し、以て其の處及び諸食等を護り、根本心明並に刀契を用ふれば一切の事業に通ず。

明に曰く　曩麼三曼多跋惹羅二合　赦怛羅二合　吒阿慕伽戰拏摩訶去嚕瀧拏娑巨二合　吒也卅怛羅二合參也卅怛羅二合　吒訶卅二合嚩卅二合　已上洗浴法。

若し便易せんと欲せば、當さに下の明七遍を誦し、杵の印を以て身の五處、額・兩肩・心・喉を護し、頂上に之を散すべし。明に曰く（杵の印、謂く不動三古印、或は通法には赤色羅字印明を用ふ、及び烏樞沙摩印明等なり。唵、阿者羅迦拏、戰荼娑駄耶吽、泮吒

洗淨し已て手を洗ひ口を嗽いで卽ち精舍に往く。　已上使利法。

（一）先づ　一本に若しに作る。

上堂觀　阿闍梨云く、初に我が身是れ不動明王と觀せよ、而して道場に往き先づ通法は、我が身是れ金剛薩埵と觀じ、次に無動明王と作ると。攝眞實經に云く、金剛薩埵は是れ毘盧遮那如來の變化身なり、不動使者は瑜伽に云く、此の不動使者は毘盧遮那佛の化身と。金剛頂瑜伽經に云く、毘盧遮那如來種種の身を現ず。一、正法輪身、轉法輪菩薩の身を現ず。二、敎令輪身、不動明王の身を現ず、大日經に金剛薩埵の印轉法輪菩薩の印とはと。故に知んぬ大日は卽ち薩埵、薩埵は卽ち法輪、法輪は卽ち不動、今は不動法を行ず、故に聖無動明王を觀ず。

○次に壇前普禮　○次に着座　○次に三部・被甲・護身　○次に加持香水　○次に加持供物　○次に金剛起　○次に四禮　○次に金剛持遍　○次に表白神分　○次に五悔　○次に發願・五大願・三力等常の如し　○次に金剛墻　○次に金剛輪　○次に地結　○次に金剛眼　○次に金剛合掌　○次に召罪　○次に擯罪　○次に火生三摩地に入る等持印に住す。

觀想せよ、我が心中に滿月輪あり、月輪とは本來自性淸淨の理なり、卽ち𤚥字本不生の理是れなり、其の月輪の中に𤚥字あり、變じて大智の火輪と成る、卽ち身中の無明

住地の惑障を燒盡す、其の火輪忽ちに法界に遍して普ねく三界五趣を焚燒す、其の中の所有の一切作障・難者尾曩也迦等、悉く大日如來の大智火衆に焚燒せられ、身心悶絶しみな三寶に歸依す、器界・衆生界・自身他身を燒淨し了り、唯だ𑖀字のみを存して皎然明白にして、自心の中にあり、卽ち薩埵不動金剛の身と成る、是の如く觀じ畢れ

火輪の印を結び火界の呪を誦す。

○道場觀（如來拳印を結ぶ。）　境中に吽字あり、變じて惡惡座と成る、座の上に憾𑖨（カンマン）字あり、變じて智劒と成る、智劒變じて不動明王と成る、身色青黑にして童子肥滿の形、頂に七結髮あり、七覺分を表す、左に一辮髮を垂る、一子慈悲を顯す、右の手に利劒を執り三毒の惑障を斷ず、左手に羂索を執り難調の者を繫縛す、遍身に迦樓羅炎を現じ、煩惱の惡龍を噉食す、寶盤山（セン）に坐するは、淨菩提心傾動なきことを表す、左右に二の童子あり、右をば矜迦羅と名く、恭敬小心の者なり、左をば制多迦と名く、難共語惡性者（シヤ）なり、乃至四大明王・十二大天・無量の眷屬、前後に圍繞せり。　唵步入欠七處加持　○次に大虛空藏　○次に小金剛輪　○次に送車輅　○次に請車輅　○次に大鉤召　○次に降三世　○次に網界　○次に火院　○次に示三昧耶　○次に開伽　○次に花塵　○次に寶山印　○次に讚　○次に四明　○次に拍掌　○次に振鈴　○次に八供養　○次に四攝　○次に事供　○次に讚　○次に普供養祈願禮佛　○次に佛母加持　○次に後供食　○次に讚　○次に普供養三力祈願禮佛　○次に持　○次に百字明　○次に佛母加持　○次に本尊加持　○次に正念誦　○次に本尊加持　○次に散念誦　○次に解界　○次に奉送　○次に三部被甲護身。

○根本印（二羽內に相叉へ、輪々各の環の如くし、二空水側に住め、火峰空の面に住め、二風和合して竪つ。）眞言に曰く　曩莫（ナウマク）、薩嚩怛他引（サラバタタ）藥帝毘藥薩嚩曰契毘藥（ボクケイビヤク）、二合薩嚩（サラ）怛他引（タ）怛羅二合吒（タラ）半音賛拏、摩訶引（マカ）路灑拏（ロシヤダ）、欠佉嚕佉嚕薩嚩尾覩南（ナム）、二合吽怛羅（ムタラ）二合吒（タ）、憾𑖨（カムマム）引

○次に三三昧耶攝召の印、謂く三三昧耶とは是れ底哩三昧耶なり、梵に底哩と云ひ、唐には三といふなり、梵には三昧耶と云ひ唐には平等といふ、今は三三摩耶攝召と云ふは大日經に准ず、初發心より乃し成佛に至るまで、位位・常に三法成就あり、一には除障相應、二には相續不斷、三には究竟成就なり、亦た證三身三寶三事初後平等の故に三平等法と名く、若し此の三平等を具足せずんば則ち障起ありて間斷して三事を成就

せず、菩提に至らず、故に此の法中に是の三三摩耶攝召の印明を以て、初發心より乃し成佛するに至るまで、明王を攝召して永く捨離せず、幾かに此の印明を結べば長く成就するを得、其の印は金剛堅固にして内に相及て、檀・惠・堅て開く、所生の印なり、此の印を名けて功德の母となす、佛・法・僧寶其の中に住す。

明に曰く　曩莫（ナウマク）、薩嚩（サラヽ）、沒駄母地薩怛嚩（ボウダボウダサトヽ）二合南（ナム）、阿引莽邏（アマラ）、尾迦羅（ビキヤラ）二合多帝禰儞（タイジニ）、阿羅逝（キヤヽ）、娑嚩（ソハ）二合訶引（カ）

善無畏の云く、此の三三昧耶は除障相應にして、相續して斷せざれば究竟して成就す、是れ大日經の三句結要するに、菩提心を因となし大悲を根となし、方便を究竟となすの義なり。

○惣攝慈悲救印明刀契　此の呪は毘盧遮那經に出づ、能く諸印を攝す、前法を作し了りて卽ち此の呪一七遍を誦し已て、心に不動尊を念せよ、亦た前の劒印を作り、額・左右の肩・心及び喉の五處を印し、此の呪一百八遍せば、自ら身を見るに俱摩羅の如し、然後に彈指して散ず。善無畏釋して云く　曩莫（ナウマク）三曼多（サマンダ）嚩日羅（バザラ）二合（タン）赦（センダ）、一歸命（ここ善）（センダ）退金剛（バザラ）二方戰（ダ）茶極惡謂く暴惡の中又（マカロシヤタ）甚しき暴惡なり。摩賀路灑像（シヤタ）二大忿怒（ソハ）娑破（タヤ）二合吒也三破壞（ムタラ）なり。吽恐怖（ムタラ）なり怛羅二合吒（タヤ）四擊住（カム）なり。悍引（カム）賜（ハラトシュ）、二字種子

（一）善　一本に普に作る。
（二）方　一本に衆に作る。

大日如來、一切の障を息めんと欲するが故に、火生三昧に住して摧大障者の眞言を說く、謂く行人の初菩提心より守護し、增長して佛果を成せしむるまで、終に退せず、非道の中に墮在せざらしむ。

○一字心眞言　二手の二小指・二無名指を內に相叉へて拳に爲り、二中指を竪て頭相拄へ、二頭指を二中指の背を屬くる勿れ、鉤の如く二頭指を竪てゝ中指の中節を押せ、卽ち成ず。眞言に曰く　曩莫三曼多嚩日羅引（ナウマクサムマンダ　バザラダン）二赦悍（センダ）

○鎭宅呪印根本　曩莫三曼多嚩日羅赦（ナウマクサムマンダ　バザラダン　センダ）、贊拏摩訶路灑拏訖及（マカロシヤダキシヤ）、麼隆嚩怛瑟吒（モウサラバタシュタ）、鉢羅都瑟吒南（ハラトシュタナム）、嚩日羅佉尾難（バザラキヤヒナン）、蘇頗吒也（ソハタヤ）、吽怛羅吒（ムタラタ）、憾斡（カムン）

○施殘食眞言　心中心呪なり、鉢印を作ふ。　曩莫（ナウマク）、三曼多縛日羅二合南（サマンダバザラタン）、怛羅二合吒（タヤ）、半音阿慕伽（ボウキヤ）、贊拏摩訶路沙拏（カロシヤタ）、娑頗二合（ソハタヤ）吒也（タヤ）、吽（ムン）、怛羅二合麼也（タラマヤ）、吽（ムン）、怛羅二合吒（タラタ）、半音憾斡（カムン）

所用の飮食を聖者に供養せば、此の尊の本願大悲をもて身を捨し、一切の持誦者に奉侍したまふこと身奴僕の如く、無一目の相を現じて此の殘食の供養を受けたまふ。行者若し每食の時心に忘れずんば、我れ當さに晝夜に常隨擁護して、諸魔毘奈夜迦をして諸の障難を作さしめず、意に隨て速かに滿し成就せしめたまふ。

○加護住處眞言に曰く　立印軌に出づ　曩莫三曼多嚩日羅二合赦（ナウマクサムマンダバザラダン　センダ）、怛羅二合吒（タラタ）、婀慕伽（アボキヤ）、贊拏摩

訶路灑拏娑頗二合吒也（ロシャダソハタヤ）、薩嚩尼覩南（サラバビキンナム）、二合麼麼娑嚩二合引娑底（センチシバムノイ）、二合扇引底始鑁茗（アシャラタウ）、婀左攞黨引矩嚕（クロ）、怛囉二合麼也（タラマヤ）怛羅二合麼也吽怛羅二合引吒半音憾斡（カムマム）

○聖無動尊療瘧病眞言に曰く　曩莫三曼多嚩曰羅二合赦戰荼摩訶嚕灑拏（ダンセンダマカロシャタ）、怛儞也（タニヤ）二合他（タ）、吽（ム）、阿窶莫具（アクマク）、怛羅具（タラク）、麼麼具欝訶斛去醯去（ママクレイカコクケイ）、未羅未囉祖祖欝布灑吽發吒（ハラハラレイボウレイ）

○梵號　阿里也（アリヤ）(一)遮囉曩謨（シャラナウマク）　○密號　常住金剛。

○略布字　𑖀頂其の色虛空の如し　𑖀眉間其の色水の如し　𑖀兩肩其の色火の如し　𑖀心上其の色乳色の如し、圓白にして眉は(二)日暉の如し。　𑖀咽喉に安く、色黃金の如し。

已上の五字を行人の身上に布す、中に於て𑖀字あり、遍く五字を含む、此の中に布し已るに遍體無動尊金剛の身と成る、觀じ布し已て卽ち一字の眞言を誦す。

○十九布字並に十四密印（先達みな用ひ來る所なり、仍て用否時に隨ふべし。）　善無畏三藏云く　不動明王は是れ毘盧遮那成辨諸事智、普ねく一切の菩提心を護らんと欲するために、遍ねく一切の大障を摧くが故に、畢竟無相の身を以て如來形を示現す、卽ち是れ淨菩提心大日心王、彼の眞言は所謂る𑖀字如來自在力、𑖀風ノ(三)火空三昧と和合す、彼の密印の相は所謂る如來大智惠力、此の三事の因緣を以て能く種種の法界門に於て、遍ねく一切の諸障を摧く云云。底哩三昧耶經に云く、不動とは是れ菩提心大寂定の義なり、我が薄伽梵大日世尊、

(一) 或はいふ、𑖀の字脫せるか。
(二) 日　或本には月の字に作る。
(三) 火　或は大に作る。

最初の正覺より寂滅道場に坐するまで、大願を以て三世諸佛應正等覺を證するに、皆な四祕密三菩提より起て三身を應現し等正覺を成ず、如來成道したまふ時、先づ寶菩提樹に坐し降魔し成道したまふは、卽ち大寂定不動菩提の本(一)用、因事によつて立てゝ不動尊と號す、卽ち是れ大日差別の智身、大願を以ての故に無相中に於て相を現作す、一日を閉づるは極惡醜弊怖魔の義を示現す、頭上の七種の髮は七菩提分を表す、左に一髮を垂れ下に向へるは是れ慈悲を垂るるの義、下惡極苦惱の衆生を悲念するなり、右手に劒を執るは、世間の征戰の如し、防ぐに御名皆な利器を執て然して、始めて勝つことを得、菩提も亦た爾なり、左手に索を執るは是れ繫縛の義なり。又た世間密かに一人を(二)投るに違するあれば難伏の者は卽ち繩を以て繫縛し(三)投持する如く、諸佛祕密を將て四魔を降伏するも亦た復た是の如し。盤石上に坐するは是れ不動の義を示す、世の山岳の如し亦た石を以て鎭押するに、方さに始めて不動なり、又た大海の如し、亦た須彌山を以て鎭押するに、然して始めて常安なることを得、湛然圓滿なり、不動も亦た爾り、其の大石の性、能く一切の寶物を出し動することなし、大盤石に坐するは亦た能く佛の功德の寶を出生し、亦た是れ四魔を降伏するの義なり。又た自身

(一) 用　異本には因の字に作る。
(二) (三) 投　捉の字か。

より遍ねく光焔を出すは卽ち是れ本尊の自性火生三昧なり。又た光を明すに四義あり、二種世間、二種出世間なり、出世間の火とは一には是れ內火、三毒の煩惱之を名けて火と爲す、能く諸の衆生の諸善功德を燒くが故に。二には外火、能く衆生を成就し萬物を長養す。出世間の火とは大智火なり、九十五種の外道法の中の如きは、事火を最と爲す、大火龍の如きは能く出世の火を變じて衆生を燒損し、亦た能く衆物を焚燒す、此の無動の智火は先づ能く火龍を降伏し諸の異道を制し、上は等覺に至り下も衆生に至るまで、皆な能く諸の煩惱乃至菩提の大智習氣を燒き、一切衆生の無明煩惱黑闇の障を燒く故に、又た本尊の眞言の句は自ら火生の義あり、卽ち摩賀盧沙の句は是れは此れ智火、阿字一切智門に住す。重重の義とは諸の菩薩の廣大習氣の煩惱を燒いて盡く餘なからしむ、故に火生三昧と名く。無動の義とは利劒を執持して能く生死の業、愛煩惱を斷壞する故に。三には現在世の貪嗔癡我慢の煩惱を降すが故に。殘食を喫ふとは、一切衆生の惡業煩惱の重障を啜ひて盡く餘なからしめ、無生の法を證するが故に。四には未來世の無明煩惱の習氣見障を降す故に、金剛索を執て引いて大涅槃の路に至り、佛の解脫の門に住して三寶を紹隆し種位斷ぜざる故に、降三世の義と名くる

なり、是の故に本尊の四密門に住す、所謂る阿路唅賮重重なるは是れ怖魔の義亦た是れ種子の義なり、世間の良田善種を下すに堪ふるが如し、諸佛の智種も亦た復た是の如し、能く大悲曼荼羅を成就し、一切陀羅尼門三摩地門を出生すと云云。十九種の觀念は別にあり。已上不動明王の成身なり。

底哩上に云く　無動明王は此れは是れ如來の法身、大願を以ての故に無相の中に而も是の相を現じて一切の眞言行者を護る、若し能く常に念すれば一切の障を離るるなり、所謂る無動とは卽ち眞淨菩提の心なり、是の義を表さんがための故に事に因て名を立てたり。此の明王一目を閉づることは亦た深意あり云云。又た云く、火生三昧に住して一切衆生の無明の煩惱黑闇の障を燒くが故にと云云。

儀軌に云く　時に金剛手菩薩、復た文殊師利に告げて言く、善男子諦かに聽け、無邊の功力勇健にして無邊の如來に奉事するは是れ不動尊大威怒王、復た六十萬億恒河沙俱胝の如來あつて、皆な敎示を蒙り無上正等菩提を成することを得と文り。

又た云く　若し纔かに是の威怒王を憶念すれば、能く一切の作障難者をして、皆な悉く斷壞せしめ、一切の障者敢て親近せず、常に當さに遠離すべし、是れ修行者の所

住の處にして魔事及び諸の鬼神等あることなしと云云。

又た云く　一百由旬内の所有る調御しがたき鬼神所持の者皆な悉く能く散壊す、又た正報盡の者は能く六月を延べて住す云云。

又た云く　若し能く毎日に於て誦すること一百八遍すれば、無動尊常に修眞言菩薩に遂ふと文り。

使者法に云く　是の如く無量力の不動聖者は毘盧遮那の使者なり、心に一切利益成就法を受持せんと欲はば、先づ須らく四種の精進の行を行ずべし、自ら約め身心に念念に散せず、一志(二)堅なるが故に速かに證驗を得て、一切の所願を滿さしむ。云何んが四種の自約なる。一には斷食、二には服氣、三には食菜、四には節食なり、力の所辨に隨て自ら身に約め已て、專ら根本の眞言陀羅尼一洛叉乃至三洛叉を誦し已て、即ち一日一夜、水も亦た食せず、廣大に供養し道場を莊嚴し、畫像の前に於て苦練木を燒け、大母指の如くにして長け十二指、兩の頭蘇蜜に搵て呪を誦すること一遍、一枝木を燒け、一千八遍を滿し燒き了り、即ち少々の世事を止むれば便ち願滿ずることを得。

(二) 堅の下。一本に固の字あり。

又た云く　復た次に呪を誦し數滿し已て河江海深の、頸に至る處に入り、面を東に向へて立ちて、毎日念誦し滿して三洛叉に至り已らば、心中所愛の福田みな滿願するを得、其の水には當さに蛟龍龍惡狩無からしむべきの處、呪力未だ成せずば他のために損せられんを恐る、當さに須らく結界すべし、若し常に加持功誦せば、不動使者身力を現じて、能く一切の鬼神を嚼し、亦た能く一切の樹木を摧折せむ、亦た空中の飛鳥をして念に隨て墮せしめ、亦た能く龍の湫を乾し竭す、若し論議せんと欲はば、及び外道等みな能く降伏せん。

又た云く　復た次に護摩法に依て杓子に牛の乳を盛りて、一たび呪し一たび燒いて一千遍を滿せば、能く國の中の大疫癘を除くなり。○西國の疫癘或は一家一村遞に相ひ染着して皆な死盡す、今吳蜀嶺南に此の事あり、是の法能く除く。

安鎭の法に云く

一切有情に於て　三惡道の業を斷じ　能く諸の八難を離れて　三界をして安きことを獲せしめむ。

(二)須彌山上云云　道場觀。

○降三世

(二)須彌山の頂に五峯樓閣あり、樓閣の中に八葉の白蓮花あり、蓮花の上に𑖀字(或は𑖀𑖽𑖿或は𑖀𑖽𑖿𑖼𑖿𑖽)あり、五胎金剛杵(或は索)となる、變じて降三世明王となる、四面(正は青色、右は黃、左は綠、後は紅)八臂(二羽印を結ん)で心に當て、惠手に五胎箭鉞を持し、定上に鈴、次に弓、次に索)身色青黑にして火光體に遍す、左の足に大自在天を踏み、右の足に烏摩后を踏む、乃至金剛部の諸尊、無量の眷屬圍繞せり。

○根本印(常の如し)　眞言に曰く　唵(オム)、蘇婆儞(ソバニ)、蘇婆吽(ソバム)、欝哩(ウツリ)二合訶拏(カンダ)、二合欝哩(ウツリ)二合訶拏(カンダ)、二合吽欝里(ウツリ)二合訶拏(カンダ)、阿引曩野斛(アナウヤコタ)、引婆誐嘰(バギヤギヤム)、嚩曰羅(バザラ)、二合吽發吒(ハツタ)半音呼

忿怒王儀軌に云く　普賢大士等、此の眞言を說くの時、三千大千世界六種に震動し所有の天魔鬼界、衆生に於て損害を生ずる者、みな悉く恐怖して安樂を得ること非し、各の走り集り忿怒尊に白して言さく、唯願くは我を愍念して恐懼すること無からんことをと。爾の時忿怒王皆な安隱なるを得せしむ、則ち尙ほ右足下に大自在魔王を踏み、左足下に魔婦人を踏み、國土の有情に於て皆な快樂を得せしむ、此の眞言一遍を誦すれば、則ち無量無邊の魔界、各の熱病に苦惱すと文り。

○又た同じき眞言に云く　歸命縛曰羅曇怛鬱嚕迦毘惹夜斛　○心眞言に曰く　唵、

(二)欝　取るなり

遜婆嚩(ソンバニ)、遜婆吽(ソンバム)、嚩曰羅(バザラ)、吽泮吒(ハツタ)

極深密門に云く　○降三世印(合掌して二羽外縛して二風を舒べ散して相著けず、二空を二風の側に著けて少しく到らず、四古の印なり、吽迦羅印といふ。)　○梵號　阿里也怛鬱嚕迦嚩曰羅夜。　○密號　最勝金剛

又た云く、若し國王・大臣を敬愛せんと欲はば、敬愛壇の爐を作りて菊の根百八枚を燒き、一呪一燒すれば則ち敬愛自ら來らんと文り。

又た云く、若し重病の人を濟助せんと欲はば、像前に對ひ香水を呪すること百八遍して、忿(二)欝して病者の腹懷内に入るれば則ち醒め起たん、若し癲症を留めんと欲はば、龍水を取て一百八遍を呪し、二眼・口舌等を洗へば、自然に消滅して他病あることなしと文り。

又た云く、行者此の法を修する時、七七日の間寘らく五穀の味鹽を斷じ一心に餘境なく、眞言十萬遍を滿さんに、爾の時必ず本尊形を現じて大惡怖魔の體と作り、行者の心を試諫せん、是の時愼んで散發を生ずる勿れ、則ち法成就せんと文り。

又た深密門に云く　三世の有の毒を摧いて　卽ち菩提を證せしめん。

又た云く　定を以て彼の頂に按し　惠を以て彼の王妃　烏摩の乳房の上を踐め

り　彼の我慢を摧くが故に
足を以て頂に加ふ　害を被りて此に(一)殞し已て　灰嚴界にして成佛す云云。

○○軍荼利

(二)壇上に寶樓閣あり、寶樓閣の中に𑖀字あり、兩邊に𑖁字あり、變じて三胎杵(或は𑖀𑖁)成る、變じて軍荼利明王と成る、大悲方便を以て大(三)悲忿怒形を現ず、四面四臂にして右手に金剛杵を執り、左手は滿願の印、二手は羯磨印を作り、身に威光焔鬘を佩び、て淨月輪の中に住す、青蓮花色にして惡惡盤石に坐す、正面は慈、右面は忿怒、左面は大咲の容を作す、後面は微怒し、口を開く云云　東方に𑖀字を觀ぜよ、是れ降三世法身の種子、南方に𑖁字を觀ぜよ、是れ忿怒金剛藏法身の種子、西方に𑖂字を觀ぜよ、是れ金剛軍童子法身の種子、北方に𑖃字を觀ぜよ、是れ金剛羯抳法身の種子、皆な無量の眷屬を具し恭敬し圍繞せり。

○根本印智は惠度の甲を押し、餘は三胎形の如くす、惠手は赤た之の如し、右、左を押し臂を交ふ、密言に曰く　唵、娑密哩帝、吽發吒。
又た云く檀・惠・忍願の初節の後に住め、三胎金剛杵の形の如くし、禪・智・並べ申べて戒・方・の背を押し、並べ申べて掌に入れ、戒方を並べ屈して双へる間を押し、忍・願・並べ申べ、進・力・屈して鉤の如くし、忍願の間に處す、此の密言を誦して曰く　曩謨、羅怛曩、怛羅夜也、曩莫室戰拏摩訶嚩曰羅、俱路馱野、唵、虎

(一)殞に作る。一本に損
(二)壇上云云　已下道場觀。
(三)悲　或はなし

嚕虎嚕、底瑟吒、底瑟吒、滿馱、滿馱、訶曩、訶曩、阿密哩帝吽發吒、娑婆賀
○梵號　阿里也縛曰羅車荼利　○密號　甘露金剛軌に云く　甘露軍荼利は　能く
當さに七遍を誦するに了了分明に本尊を觀じ、及び自身本所尊と爲る、此の印密言に由るが故に、聖者本誓を越えずして悉地を授與す。
諸の魔障を摧き　悲惠の方便を以て　大忿怒形を現じ玉ふとを歸命し上る　大威日輪と成りて　無邊界の　修行者の暗瞑を照曜して　速かに悉地を得しむるが故に　甘露の水を流し洗いで　藏識中の　薰習の雜種子を洗滌し　速かに福智聚を集めて　圓淨の法身を獲しむ　云く　即ち本尊　軍荼利を思惟せよ　身色瑩くこと碧頗梨の如し　威光劫焰に逾えて　赫奕として日輪を佩ぶ　眉を嚬かめ笑怒の容なり　虎牙上下に現せり　千目あり視て瞬がず　晃曜盛なること日の如し　千手に各の　金剛の諸の器仗を操持し　首べに金剛寶を冠り　龍の瓔虎皮の裙あり　無量の忿怒の衆
金剛及び諸天　圍繞して侍衞を作す。
又た云く　壽命神通等、聖者に同じ云云。

軌に云く　自の頂上に於て唵字を想へ、赤色にして大光明を具し十方を照暉す、次に婀字を觀じて心に當て、色珂雪の如し、內外に照曜して大月輪の如し、又た密哩字を兩の肩の上に觀ぜよ、色紅(グ)(グイ)覓の如し、遍ねく一切の世界を照せり。又た帝字を齊輪に觀せよ、色皓素の如し、光明潤澤にして無邊の世界の一切惡趣を照す、次に吽字を兩の膝(モ)に觀ぜよ、其の色黃金の如し、光明は無間の惡趣を照觸す。次に頗(ハ)字を觀じて兩の脛(ハギ)に安け、其の色玄雲の如し、諸の修羅を照觸して速かに正道を悟らしむ、次に吒(タ)字を觀じて二足の掌に安け、素色にして其の形半月の如し、光明を流出して諸の外道を照觸して、邪見の網を捨てゝ三寶に歸信せしむ、此の布字の三摩地に由て、自身變じて本尊と成る。

又た云く　金剛縛の定印を結び、本尊の密言の字輪實相三摩地に入れ、即ち兩の目の瞳人の上に於て囉字を觀せよ、色燈焰の如し、微しく頸を屈し目を閉ぢて、心の惠眼を以て心道を照了せよ、胸臆內に當て圓滿の菩提心月輪を觀想して、炳現して身器に在り、了了分明にして、外の散動を離る、智惠の定水澄淨なるに由て、菩提心月の影、中に於て現ずることを得、良(や)久しく心を一緣に專住して、即ち圓明の上に於て、心密

言を以て右に旋つて一一の字を布列して、意に誦して乃至三五遍す、即ち觀せよ初の唵字は、一切の法本來無所得なり、義と相應する時、但だし心に理を緣じて、字を緣ざれ、二道清淨にして法界に遍周す、即ち第二の娑字門に入り即ち觀せよ、一切の法不生なりと、既に觀じ已て即ち第三の密哩字門に入れ、一切の法我不可得なり、即ち平等眞如の自性成就の恒沙の功德を成ず。次に應さに第四の帝字門に入るべし、一切の法眞如不可得なり、諦かに觀じ已るに內に微細の能緣所緣の法義あり、即ち第五の吽字門に入れ、一切の法因不可得なり、因無所得なるが故に、果も亦た所獲なし、次に第六頗字門に入れ、一切の法果不可得なり、果無所得なるに由るが故に、即ち究竟圓滿の法身を成ず、一切の無漏の諸法の依止する所なり、卽ち第七の吒字門を觀せよ、一切の法本淨不可得なり、一切法無淨に由るが故に、一切の法本不可得なり、一切法無我なるに由るが故に、一切の法本不生なり、一切法無生なるに由るが故に、一切の法我不可得なり、一切法無我なるに由るが故に、一切法眞如不可得なり、一切法眞如無所得なるに由るが故に、一切の法因不可得なり、一切法因無所得なるに由るが故に、一切の法果不可得なり、一切法果に所得なきに由るが故に、卽ち一切法諍を離る、一

切の法無諍なるに由るが故に、清淨無戲論の實相三摩地を獲得す、周つて復た始めよ一念清淨の心相應するに由るが故に、無碍の般若波羅蜜を獲得す、無始の時より來、一切の業障・報障・煩惱障・一時に頓に滅す、十方一切の諸佛及び本尊現前して、久しからずして當さに隨意所樂の世間出世間の悉地成就することを獲得し、現生に初歡喜地の菩薩を證し、後の十六大生に、無上正等菩提を證すべし、則ち定より出でて、二手金剛合掌して運心して本尊及び聖衆を觀じ、微妙の讃歎の聲調を以て功德を讃揚すべし。又た五種の供養を以て前の如く運心して之を献せよ。

(二)寶樓閣云云 已下道場觀。

◎◎大威德

(二)寶樓閣の中に大曼荼羅壇あり、壇の中に𑖀字あり、變じて如意棒と成る、或は獨胡杵(亦た劒輪)獨胡杵變じて焰曼德迦明王の身と成る、六首・六臂・六足を具す、六趣を淨め六度を滿し六通を成ず、青水牛に乘りて種種の器杖を持す、髑髏を以て瓔珞頭冠と爲し、虎皮を裙と爲り、其の身長大にして無量由旬なり、遍身に火焰ありて洞然たること劫燒の如し、四方を顧視し師子奮迅の如し、乃至無量の忿怒の眷屬前後に圍繞す云云

(二)曩莫三曼多沒馱南、引阿鉢羅二合底、賀多、舍娑曩引南、二唵、羯羅羯羅、三矩嚕矩嚕、四麼麼迦哩剃二合半惹半惹、五薩嚩尾覩南六、二合諾賀諾賀、七薩嚩、嚩曰羅、二合尾曩引也欠、引八冒羅馱、二合吒迦、爾慈以の反尾、旦多迦羅、九摩賀引尾訖哩二合多、路比停、十鉢佐鉢佐十一薩嚩訶瑟鵄、二合十二摩賀引誐拏鉢底、十三爾慈以の反尾旦多羯羅、十四滿馱滿馱、薩嚩藥囉二合憾、引十五刹目佉刹部惹、十六刹者羅引拏嚕捺羅二合麼引曩也、引十七沒羅二合羯麼二合撚引泥嚩那引曩也、十八摩尾覽嚩、十九摩尾覽嚩、二十羅護攞護、曼拏引攞末弟、二十一鉢羅二合吠捨也、廿三三摩也摩拏娑摩二合羅、廿三吽吽、吽吽、吽吽、廿四娑發二合吒娑發吒、娑嚩二合賀引

○根本印内縛して二火を竪て合す。　○勝根本眞言に曰く

(二)曩莫三曼多沒馱南、引阿鉢羅二合底、賀多、舍娑曩引南、二唵、羯羅羯羅、三矩嚕矩嚕、四麼麼迦哩剃二合半惹半惹、五薩嚩尾覩南六、二合諾賀諾賀、七薩嚩、嚩曰羅、二合尾曩引也欠、引八冒羅馱、二合吒迦、爾慈以の反尾、旦多迦羅、九摩賀引尾訖哩二合多、路比停、十鉢佐鉢佐十一薩嚩訶瑟鵄、二合十二摩賀引誐拏鉢底、十三爾慈以の反尾旦多羯羅、十四滿馱滿馱、薩嚩藥囉二合憾、引十五刹目佉刹部惹、十六刹者羅引拏嚕捺羅二合麼引曩也、引十七沒羅二合羯麼二合撚引泥嚩那引曩也、十八摩尾覽嚩、十九摩尾覽嚩、二十羅護攞護、曼拏引攞末弟、二十一鉢羅二合吠捨也、廿三三摩也摩拏娑摩二合羅、廿三吽吽、吽吽、吽吽、廿四娑發二合吒娑發吒、娑嚩二合賀引

(二)曩莫云云 原本に梵字を添ふるも今は略す。

彼の人形を書き、或は姓名を書す、像の面を北に向へ、持誦する者は身に黒衣を着し、面を南に向つて坐し鋤印を結び、忿怒吠聲して日に三時、念誦すること一七日すれば、其の惡人或は惡疾を患ひ或は惡瘡を患ひ、或は身衰滅す。

○印二手内に相叉へて拳に作り、二中指を直く竪て、頭合せよ、又た二頭指を舒べ屈して三戟叉の如し、即ち成ず。○大心眞言に曰く　唵（オム）、紇哩（キリ）、二合惡室曜（ヂリ）二合尾紇哩（ヒキリ）、二合多引娜曩（タナウム）、二吽（ハウム）、薩嚩（サラバ）二合設咄嚕（シヤトロ）、二合娜捨（シヤヤ）也、薩撦（サダ）二合婆（ハヤ）也、四娑發（ソハツタ）二合吒娑發二合吒娑嚩（ソハツタ）二合吒、娑嚩二合賀。

大聖の像前に對ひて三角壇を作り、此の眞言一萬遍を誦す、功行即ち成ず。

○心中心印前の心印の如し、直く二頭指を竪てよ、即ち成ず、惡夢の時之を誦す。○眞言に曰く　唵悉地（オムシユヂリ）唎、迦攞（キヤラ）、嚕跛（ロハ）、吽欠（ムクン）、娑縛二合賀。

若し能く毎日一千遍を誦すれば、一切の惡人其の便を得ず、惡法成ぜず、呪咀厭禱悉くみな破壞す、若し惡夢を見れば、一七遍を誦し、惡夢應せず、三字明を誦し隨處に一一に唵惡吽（オムアクム）を布す。

頂に㘝字、口に𑖦字、心に𑖀字、初に印を結び念誦し、先づ三字を想へ、青色にして卽ち本尊を成ず、是れ六足・六首・六臂なり、所以に六趣を淨め六度を滿し六通を

（二）壇中云云　已下道場觀。

成ず。

○根本印を結べ先勝根本印の如し。　此の印大威力あり、大神驗あり、纔かに此の印を結び、眞言を誦するに、其の人大威德忿怒明王の身に等同にして異りあることなし。

軌に云く　若し惡夢あるも、加持の力に由て皆悉く現せず、究竟して銷滅すと文り。

或は云く　眞言の境界は不思議なり、眞言の所行は不思議なり、眞言の神通は不思議なり。　行者の成就は不思議なり、所作事業は不思議なり、所獲の果報は不思議なりと。　○梵號　阿里也縛曰羅炎曼德迦　○密號　大威德金剛　或は持明金剛ィ

◎◎金剛藥叉

（二）壇中に蓮花あり、花臺上に𑖀字（或はあり變じて金剛牙と成る或は羯磨輪、或は五鈷或は鈴）金剛牙變じて金剛藥叉と成る、五眼忿怒形にして三面六臂あり、左の第一手には鈴を執り、次に弓、次に輪、右の第一手には五鈷を執り、次に箭、次に劒なり、三首に馬王の髮（カミ）あり、瓔珞をもて其の身を莊（カザ）る、威猛暴惡（イカウ）火燄熾盛なり、乃至金剛部の眷屬前後に圍繞せ

り云云。

○根本印戒・方・忍・願・の指、内に相叉へ齒と爲し、擅・惠・曲げて鉤の如し、進・力・及び禪・智・は出し笑眼の形の如し、是を根本印と名く文、又た口傳あり。○眞言に曰く（一）唵（オム）摩賀藥叉（マカヤキシャ）、嚩曰羅薩怛嚩（バザラサトバ）、弱吽鑁斛（ジャクムバムコク）、跛羅吠捨吽（ハラベイシャム）

經に云く　誦此一千（二）遍、隨順而攝伏、三千世界中、上至有頂類

又た云く　移大海蘇彌、及取三界天、開惡趣放罪、所作皆稱遂、若欲得仙藥、及往極樂界、知足天王宮、隨所意便得

本軌に云く　即ち有情を憐愍するが故に、妙形像を示現す、二世の菩提何んぞ成就せざらん、或は龍索或は棒と成る、龍索變じて八葉の蓮花と成る、花臺の上に𑖀字（ア字）あり、變じて烏芻沙摩明王と成る、髮髻に白蛇を遶せり、身相長大にして青色、金剛寶をもて瓔珞とせり、甚大忿怒形なり、左の定は羂索を執り、左の理實數珠（ゼユズ）なり、右の惠に三鈷を執り、左の智は滿願の印なり、惠の方願を以て智力を屈し、非んや、○此の神驗三十里外に圍繞して、諸の障礙なからしめむ云云。

○○烏樞沙摩

（三）須彌山の頂に𑖀字あり、變じて龍索或は棒と成る、龍索變じて烏芻沙摩明王と成る、髮髻に白蛇を遶せり、身相長大にして青色、金剛寶をもて瓔珞とせり、甚大忿怒形なり、左の定は羂索を執り、左の理實數珠なり、右の惠に三鈷を執り、左の智は滿願の印なり、惠の方願を以て智力を屈し、

（一）唵云云　原本梵字を添ふるも今は略す。

（二）遍　一本に入の字に作る。

（三）須彌山云云　已下道場觀なり。

直に（一）加へ哺して獸皮を以て衣と爲す、左右の肩に兩の赤蛇蟠絞して胸臆に垂れたり、本尊の面を瞻らしむ、其の色甚だ青白なり、亦た四臂あり、兩脇に一の蛇ありて之を遶り、寶池の蓮上に住す、二大龍王乃至阿修羅王等前後に圍繞せり。

○印　右手の無名・小指を以て左手の無名指の背後より中指・無名指の叉間に入れ、右の大指を以て右の無名・小指の甲上を押し、環に作り相鉤し、各の竪て兩の頭指及び中指の頭相拄へ頭指來去せよ。左の無名指の甲上を押し、方の無名・小指を握る、次に左の無名・小指を屈し、復た左の大指を以て左の無名・小指の甲

○眞言に曰く　唵（オム）一跋折羅（バザラ）、二俱嚕馱（クロタ）、三摩訶婆羅（マカハラ）、四訶那馱訶（ナウタカ）、五跛者毘枳羅（シャヒキラム）、六毘馱崩二合（トトボウ）寫夜（サヤ）、七（一）閣置羅（アチラ）、八藍蒲陀羅（ラムホタラ）、九烏樞沙摩（ウシュサマ）二合十俱嚕馱（クロタ）一烏餅泮泮（ハツハツ）、十二莎訶（ソワカ）十三

○又の印　右手の四指を以て拳に作り、禪智を直く竪つ　○眞言に曰く　唵俱路引馱曩吽弱（クロダナウムジヤク）

軍荼利儀軌に云く　部母の印にて密言を以て自身の五處を加持し、便易及び諸の穢處には烏芻瑟摩金剛心密言印を用て五處を加持するに、諸魔其の便を得ず、速かに成就することを得。

一字軌に云く　唵特勒二合迦（タラカ）　此の眞言を以て先印を用ふ。

陁羅尼集經に云く　明王の身相青色にして四臂を具す、右手は脾に向へて跛折羅を把り、左手は肩に向へて而も赤索を把る、其の索盤屈して狀蛇（カタチ）に似たり、右手は舒べて

（一）加哺　海如云く、二字讀む可らず、西院八結の中を按するに當尊の二字に作る、是れ威儀形法、如劈の經文に依ると

（一）閣　一本に閻に作る。

下に仰け大指を博げ、頭指直く下に舒べ、其の餘の三指繞かに屈して上に向ふ、左手は臂を屈して上に向へ、手に數珠を把れり、中指頭を用て而も其の珠を捻れよ、面貌端正にして極めて殊妙ならしむ、二龍王を畫いて左の膊上に絡ひ、其の二龍頭を相鈎し仰いて視て胸前に在り、尾は背上にあり、俱に純赤色なり。又た四龍王並に青色に作り各の一臂を各絡ふ。又た二龍王亦たみな青色にして各の脚脛を絞ふ、其の像の頭上に一白龍王あつて盤に絡ひ頭を竪つ、其の像の腰下は虎皮をもて跨を縵ひ、頭髮の火焰悉くみな徒に竪つ、但に頭上のみに非ず、項背にも亦た火焰の光あり、其の頭の光上の左右に各の一蓮花座を畫け、左の蓮花の上に阿閦佛の像を作れ（一本に云く釋迦佛と）、結跏趺坐す、左手は掌を仰げ横さまにして臍下に在き、右手は掌を仰けて右膝の上に在け、指頭を總て垂れたり。右の蓮花の上に阿彌陀佛の像を作れ、結跏趺坐し、手に阿彌陀輪印を作る、謂く左手は掌を仰け、大指・無名指の兩頭相拄へ、食・中・小の三指みな之を舒べ展ぶ、右手は前に同じく作れ、但し此の手を以て左手の上に覆せ、二手の大指・無名指甲之を疊んで相拄ふ、其の佛像の上に諸天散花の像を畫作せよ、其の上に雲を作れ電光の色の如し、其の金剛像底に海水を作れ、中に蓮花あり、其の花の上に於て金剛

を立て、海中に着いて八阿修羅王を畫作せよ、左邊に四箇、右邊に四箇なり、其の八王の形は皆な俱頭禮拜の形に作れ。其の金剛の底の右邊に復た呪師の形像を畫け、手に香爐を把り、蹈跪し供養す、此の像を作り已て、呪師日日に安悉香を燒き金剛を供養し發露懺悔し、水壇中に於て先づ呪を誦すること十萬遍を滿し已らば、所願みな隨ふ。若し意に阿修羅王の宮殿の中に入らんと欲はば、即ち呪を誦すること廿萬遍を滿せば卽ち能く入ることを得、以後卽ち色壇供養を作せ。

◎◎金剛童子

（一）大海の中に寶山あり、寶山の上に梵字あり、變じて三胡杵と成る、杵變じて聖迦捉忿怒金剛童子と成る、身は吠瑠璃色にして六臂を具足す、面に三目あり、其の目は赤色なり、首に寶冠を戴き狗牙上みさまに出でたり、口は下の唇を咬へたり、眉を顰め威怒す、右第一の手には底里商倶金剛杵を持し擲勢に作る、右第二の手には母婆羅棒を持てり、謂く棒の一の頭鐵杵の如し、右第三の手には鉞斧を執る、左第一の手には棒を把る、左第二の手は擬ぎる勢の如くし、金剛拳を作りて頭指を舒べたり、左第三の

（一）大海云云　道場觀。

手には劒を持す、一大蛇を以て身上に於て角絡結繫せり、又た一切の毒蛇を以て臍劒・臂釧・腰條・瓔珞と作し、及び耳の璫髮を繫く。又一大蛇を以て腰を繞へ、三迊す、背に圓光あり、火焰圍繞し、火焰の外に於て其の雲電あり、以て相輔す、左足を以て寶山を踏む、山の上に妙蓮花あり、以て其の足を承けたり、右の足は海水の中に在て立ち、其の半膝を沒たり、乃至無量の眷屬前後に圍繞せり云云。

○根本印 虛合して二羽に於て水交へ、虎口に入れ、風鉤して空下を捻し、地輪竪てゝ牙の如し。○眞言に曰く(一)吽嚩曰羅、二合俱摩鼻羅、迦尼引羅、度尼吽吽泮

○又た根本眞言軌本　曩謨曬囉怛曩、二合怛囉二合野引夜、曩莫室戰二合拏、嚩曰羅二合跛引拏上曳、摩賀藥乞灑、二合細曩引鉢多上曳、怛儞野他、唵迦抳、度顚吽發吒半聲

○心眞言に曰く　唵引一迦顚、吽引發吒娑嚩二合訶

儀軌上に云く　像既に成し已らば、當さに像前に於て種種供養し安悉香を燒き、無間に念誦せよ、乃至成就の相現ずること有らば、室空中に聲を聞き、及び鈴聲を聞かん、復た光現ずることあり、光流星の如く境内に墜下し聲は(二)電震の如し、卽ち其處に於て先きに置く所の寶瓶の香水を用て閼伽を獻するに、其の像或は動し或は復た光を放たん、當さに知るべし持誦の者卽ち功効あり、已後此の像前に對ひて念誦せば、所樂に隨て事悉く皆な成就せん。

○又の法。空中に花を雨すことを得んと欲はば、虛空を觀じて眞言二十一遍を誦せよ、卽ち空中に於て種種の華を雨さん。

○又の法。菖蒲を持し二十一遍口中に含んで、人と共に論議せば、卽ち皆な勝つことを得ん。

○又の法。殊勝の果を成就することを求めんと欲はば、神通月の白分(神通月とは三長齊の月、是れ二日より十五日に至る是を白分と爲す)に於て海河の側に就趣し、或は沙を印し、泥を印して塔を爲り、塔の中に緣起偈(卽ち法身舍利の偈なり。)を置け、像を塔の前に置いて念誦し、行者水を以て麨(ムギコ)に和して之を食し、遏迦木柴を取り(資府潘、隅に醞蘇を火に投し讀摩し、眞言を誦し十萬遍滿し已るに、地動すれば卽ち身を轉じて飛騰して忉利天王と爲る、若し遍地に火炬あらば則ち四天王と爲らん、若し大雲あつて雨を注がば、大地の所有る伏藏一時に踊出せん、若し金色の光遍ねく現せば、則ち轉依して菩薩と爲り、壽命一劫にして、一切に大威力有りて能く阻壞するものなし、若し一切有情を見ば、身より火焰を出し、卽ち一切の三

(一) 吽云云　此の下の眞言原本梵字今は略す。

(二) 電　或はいふ雷の字か。

乘佛法を證悟し、菩提心成就す。若し像及び塔光を放たば則ち一切時明仙の中に王たることを得、若し十方に遍して火焔あらば、卽ち普賢菩薩を見、所求の世間若しは出世間の一切の勝願、悉く昔な滿足せん。此の像成就の法は、小人無智惠の者、小悲愍の者、福資糧を積集するもの、師長を敬せず此の法を誘毀する者、諂誑妄語して口過多き者、掉舉散亂心あて平等ならざる者、事務多き者、漫荼羅に入らず灌頂を受けざる者に應せず、是の如く等の人、念誦すれば顚狂を招き夭壽せん。金剛手菩薩の誠言、是の如くの說を作し給へり。

又た云く　我今、復た說かん、先の行法を作し舍利塔の前に於て本尊の像を安し、三月十五日に於て壇を塗りて、力に隨て供養し、沈香・楓・蘇・蜜・酪を取て晝夜に火中に擲げ護摩し、一たび眞言を誦して一たび爐に擲げよ、若し道場中の幡花搖動せば、持誦者當さに知るべし卽ち効驗あらん、卽ち晨朝に於て三實に供養せば、七日の內に財寶を獲得すること豐饒にして、所求の榮官皆な意に稱ふを得、及び金銀・珠玉の七寶等を得ん。

又の法。若し災難及び恐怖の處あらば、眞言八千遍を誦せよ、則ち灾滅して怖畏を離るゝことを得ん。

○又の法。若し財寶を求めば、新淨の衣を着し、像前に對ひて香泥を一小壇に塗り、安悉香を燒き、眞言一萬遍を誦すれば、則ち財寶を得ること意の如くならん。

○又の法。孔雀の尾一莖を取り、眞言を誦し加持すること一百八遍せよ、若し人、毒を被て中てらるれば、孔雀の尾を以て彼の身上を拂へ、皆な除差するを得ん。

○又の法。若し毘那夜迦來て相逼惱し障難を作さば、纔かに眞言を憶念せよ、一切皆な消滅するを得。若し常に念誦して間あらずば、意に任せて彼の障者並に親族眷屬に於てみな自ら滅壞せん。

○又の法。黑月一日より起首（はじめ）て、此の像の前に對ひ每日三時眞言を誦し、時別に一千八遍して安悉香丸を燒いて護摩し、月盡に至らば所求みな得ん。

○○無能勝

○種子　㘕 或は 𑖀𑖽𑖨𑖿

○三昧形　鈴　○印（內縛して二頭指を竪て、頭相ひ註へよ。）○眞言に曰く　唵（オン）、𠰥嚕嚕（ロロ）、羯擎引里摩（センタリマ）引跢傑（トウセ）而幾反、去娑嚩賀（ソハカ）

○形色　青色にして三面四臂、右手は拳に作り頭指を舒べて高く擧ぐ、次の手は獨古杵を持し、左の一手には錍を持し、次手には三股戟を持し天衣を着す。後本赤色。
○梵號　阿波羅爾多夜摩訶　○密號　勝妙金剛

(一) 步擲　又ばフチヤクとも讀む。

(二) 面　圖の字か

○步擲金剛（ホテー）
○種子　ぁ　○三昧耶形　劍或は弓箭　○印普通　○形像　右手には三胡金剛を執り外に向へ、左の手は拳に作りて肘を擧ぐ、是れなり。
眞言に曰く　唵二縶臨二合（キリン）屈臨二合（クロン）三部臨二合（ボロン）引四素臨二合（ソロン）五儒臨二合（シュロン）六虐二合（キャク）
本軌に云く　本尊を(二)面畫せよ、遍身青色にして右顧して右足を舒べ左膝を屈し、右上手垂下し、大指を屈して掌に入れ、中名指之を握る、餘の二指を舒べて、手背を外に向へよ、次の手は桃を捧げ垂下し、次手は掌を舒べて下に向ふ、掌中に火焔あり、次手は鉞斧、次は玉環、次は指を竪擬して指の上に輪あり、次は拳にして大指頭指の側を押す、次は羂索、次の手は五指を舒て掌を仰て弓を持す、左の上手は三胡杵、臂を舒べて上に向ふ、次は劍、次は圓石を握り、次は短柄の槌、槌は重輪の如し、次は兩箟

(二) 梳　捩の字か

箟、次は杖、次は獨胡杵、次は掌を舒べたり、掌を仰けて頭指・大指相捻するの契、次は賓棒、棒の上麁近、把る處漸く細末なり、掌を舒べて下に向ふ、掌に焔髮あり、背に散し堅つ赤色なり、龍を以て鬘瓔珞、手足の釧、及び要物等と爲す、眉を嚬め猛視し利牙出現す、赤色の方裙、赤色の傘蓋あり、魔王波旬の府地に伏在す、而して四臂あり、通身乃ち青色にして面を廻らして上に向へ、哀を求め命を請ふ、右手の五指を舒べ額に側近し、歸命の勢に作る、左手は手拓けて地に下す、二手に一龍あり、肘後より之を縛へり、髮は赤色にして散す、大恐怖の狀あるが如し、頭を大聖の左足に近く。本尊の左右に一金剛童子あり、並に通身赤色、形體光碩なり、右の傍の者は右手に桃を持し、左に劍を執り下に向て魔王を斫る勢にす、髮は後に向て垂れ而も赤色に作れ、左の傍の者は左に弓を(二)挽いて魔王の頭を射る勢にす、髮は赤沙に似たり、色右の字は却て是れ左爲り、左の字は却て是れ右を證と爲す。沙とは練絹なり。
本軌に云く　諸の有情を拯救して　凡より佛地に入り　現世に皆な成就す　今念誦の義を演べん。
又た云く　永く三途を離れて普賢の行を具し、傍生餓鬼此の一形に盡きて復た更に受

けず。又た想へ、諸の地獄を焚いて壞滅し餘すことなく、罪人解脫して菩提心を發すに、諸の惡魔等の、過る者を摧伏し辟除退散す。

◎◎大輪金剛

大輪金剛印法に云く　脚を起立して丁の字に作り、左手は下に向へて五指を忿し、想へ、其の手の中に器仗ありと。右手を出して上に向へ、想へ手中に杵あり、一切の諸魔神を降伏すと。其の人嗔威を作り齒は下唇を咬へたり、目を努し眉を動す、其の杵をもて四指を挙りて盬(カン)文を印す、其の大母指は節を屈して頭指の中節を捻し、心中に想へ、頂上に輪あり、一切の惡鬼・精魅・惡獸・飛鳴夜叉を摧破するに、一時に俱に死すと文り。

○印定・惠・の手各の金剛拳に作り、進力・檀・惠・相鉤す、即ち是れなり。眞言に曰く　唵、嚩曰羅(バザラ)、斫訖羅(シャキラ)二合吽

○種子　瑟致利夜(シュチリヤ)　○三昧耶形　輪

國譯七卷鈔五　終

國譯七卷鈔六

○十二天　○聖天　○持國天　○增長天　○廣目天　○多聞天　○吉祥天　○龍王　○餓鬼　○童子經　○訶利帝母　○辨財天　○迦樓羅天　○摩訶迦羅　○大黑天神　○氷迦羅天　○曩嚫利

◎◎十二天供略作法

上堂儀式常の如し　○次に壇前普禮　○次に着座護身等常の如し　○次に承事を喚んで供物を檢挍す。　○次に加持香水　○次に加持供物　○次に啓白事由　○次に五悔　○次に發願三力等　○次に大金剛輪　○次に地結界　○次に壇界

○道場觀如來拳を結ぶ　觀想せよ、壇上に卍字あり、變じて七寶の宮殿と成る、其の中に曼荼羅あり、中央に憾(カン)字あり、變じて獨胡杵と成る、杵變じて四臂不動と成る、青肉色にして前の二手は牙(ク)印を作る、次の二手には劒索を持す、各の本位に荷葉座あり、東北方の葉上に伊字あり三戟及と成る、變じて大自在天と成る、東方の葉上に伊字あり、

獨朏杵と成る、變じて帝釋天と成る、東南方に阿字あり、賢瓶と成る、變じて火天と成る、東方に焰字あり、壇茶印と成る、變じて炎魔天と成る、西南方に地哩(ヂリ)字あり、劍と成る、變じて羅刹天と成る、西方に縛字あり、龍索と成る、變じて水天と成る、西北方に縛字あり、風幢と成る、變じて風天となる、北方に吠(ベイ)字あり、寶棒と成る、變じて毘沙門天と成る、內の艮(うしとら)(ウシトラ)の隅に沒羅(ボラ)字あり、蓮花と成る、變じて梵天と成る、內の乾の隅に畢哩(ヒリ)字あり、鉢と成る、變じて日天と成る、內の坤(ひつじさる)(ヒツジサル)の隅に戰(シャ)字あり、月輪と成る、變じて月天と成る、各の無量の眷屬と與(ともに)に前後に圍繞せり。唵僕入欠。

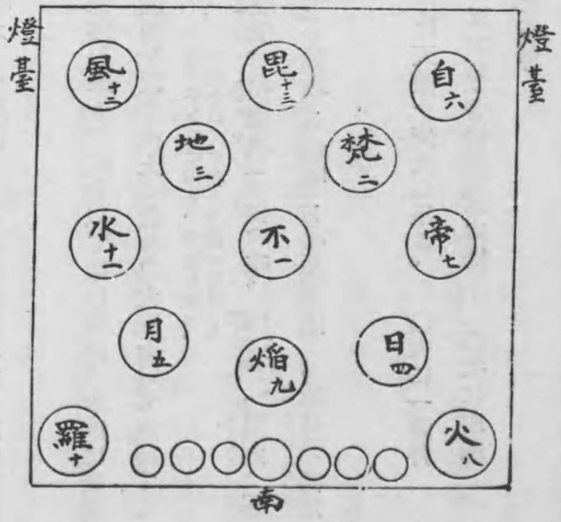
○次に大虛空藏　○次に小金剛輪　○次に大釣召　○次に網界　○次に火院

○次に大三昧耶　○次に閼伽　○次に寶山座　○次に荷葉座(印明は例の如し。)　○次に立蠟燭　○次に不動尊(井に十二天各の印明)　○次に五供(印明は常の如し)　○次に事供　○次に讃　○次に三力祈願　○次に禮佛(大日、不動十二天等云云)　○次に佛母加持　○次に加持念珠　○次に正念誦　○次に散念誦常の如し(但し吉祥天の眞言、佛慈護の眞言之を加へ用ふべし。)　○次に後供養　○次に普供養三力祈願　○次に禮佛　○次に廻向　○次に解界(例に依て之を行ずべし)　○次に發遣　○次に三部被甲護身等(常の如し)

○五味の粥とは　粳米、菉豆、油麻、牛乳、蘇。

石山內供記に云く　精米五合、胡麻二合、菉豆二合を取て淨洗し、煮て粥に作り、更に蘇一勺蜜一勺を加へて弥美ならしむ。但し粥を作る時、燈火を以てし口にて吹かず、扇にて之を扇ぐ。

◎聖天



上堂儀式常の如し　○次に壇前普禮　○次に着座　○次に塗香　○次に淨三業・三部・被甲・護身等常の如し　○次に加持香水・灑淨常の如し　○次に浴像眞言　唵阿拏婆折唎跋縛爍拏莎訶

此の呪を以て水湯を加持して尊像を沐浴し奉り、紙を以て像を拭ひ、本座に安置し畢る。○次に多羅油を取て火上に置き、大呪と以て加持すること一百八遍せよ、寒温を知る眞言に曰く　惠の手を拳に作り、中指を申べ、頭指を以て中指の上節に附けよ。

曇謨、尾那翼迦二合母佉瀉、怛儞也二合他、唵、娜去聲、下翼迦二合那翼迦二合尾娜翼迦二合怛羅二合翼迦二合鉢哩二合怛羅翼迦二合鉢佉賀悉底二合賀

○次に多羅を取て壇中に置き、油の中に天像を安置し畢る。○次に一禮拜　○次に啓白・略神分　○次に五悔・發願・五大願・普供養・三力偈　○次に勝願　○次に大金剛輪　○次に地結　○次に壇界

○次に如來拳印を結んで觀想せよ、壇中に悉字あり、變じて瑠璃寶地と成る、其の上に羯字あり、變じて七寶の宮殿と成る、殿中に白圓壇あり、上に七寶の多羅あり、上

妙の香油を湛ふ、油の中に白蓮花の寶座あり、上に虐虐の二字あり、變じて三摩耶形と成る、三摩耶形變じて大聖毘那夜迦王の雙身と成る、象頭人身なり、其の形肉色にして、無量の眷屬隨從し圍繞せり。

○次に大虛空藏　○次に小金剛輪　○次に迎請眞言内縛三貼、大指を以て來去す。　唵簸迦羅二合主拏禰嚩哆野、翳醯枳莎哥

○次に降三世辟除結界印明は常の如し、用否は任意　○次に虛空網　○次に火院　○次に示三昧耶　○次に閼伽　○次に花座

師說に云く、八供養印を作れ、若しは五供養印を作れ云云。

○次に塗香等一一次の如く供し畢る。　○次に天本印明　唵儗上聲里虐吽娑縛賀

○次に讃に曰く　唵誐娜簸波上聲底扇上聲底、娑縛二合悉底、摩賀誐娜簸底娑嚩賀

○次に普供養三力等常の如し　○次に禮佛天名金剛界に付て天の名號等を加ふべし　○次に天印を結んで四處を加持す。眞言に曰く　唵儗上哩虐、娑嚩賀

○次に正念誦　○次に本尊印明に曰く半印、心印、心呪　唵虐々吽、娑嚩賀　○次に杓を取て油を酌み二頭身に浴す。一杓一呪數百遍

下油の時慇懃に祈願し、百遍の終に讃一度す、次に摩尼等なり、是の如く四百遍を滿し(一)日午三百遍、二時を合して七百遍なり、但し平曉初の二遍は心呪を用ひ、後の二遍は心中心呪を用ふ、日午の初二遍は心呪を用ひ、後の一遍は心中心呪を用ひ、一たび灌ぎ一たび呪すること右の如し。

(一) 傍の朱註に云く、平旦四百遍か

○次に天像を本座に歸す、油の中より天像を請出して、拭淨し、本座に安置す、但し結願せんと欲する此の時浴像す。

○次に本尊加持

○次に後供養 作法常の如し。

○次に讃

○次に普供養三力 常の如し

○次に禮佛

○次に廻向

○次に解界

○次に發遣

○次に護身等

○次に出

東

堂

壇一面 半疊若しは圓壇を加ふ　脇机一前　燈臺二本　閼伽器一前　花瓶一口　香水一器　塗香一器

多羅一口　杓一枚　火爐一口　名香少々　蘇蜜少々　紙少々　炭少々　浴油　燈炷

少々　淨水一桶 初夜に之を用ふ　淨酒　蘿蔔根　歡喜團　粥 後夜の時用ふ。　餅　羹　飯　菓子

已上承任之を辨じ備ふ。

○持國天

○種子　地哩(チリ)　○三摩耶形　刀(タウ)　○印 定拳、風を叙べ屈して鉤の如くし、空指之を叙べ空風の間相ひ著けず、右手是の如くす、左腕側を以て左腕上に置く ○眞言に曰く　唵、地哩多羅(チリタラ)、主怛羅(シユタラ)、羅羅(ララ)、鉢羅(ハラ)、噜駄那(ハタナウ)、莎訶

赤色忿怒形にして左に劒を持し、右は股(モ)の上を押す。

○增長天

○種子　毘(ヒ)　○三摩耶形　劒 或は刀　○印(二)二手背を合せ二中指曜け相ひ鉤し召く　○眞言に曰く　唵尾嚕茶迦藥叉(ヒロタキヤヤキ)乃地婆多曳(シヤチタタエイ)、莎訶

(二) 二手云云　朱書に云く、又た云く二手合背し、二火を鉤し結べ。又た合掌しての說、火入れ索の如し、地水空鉤の如くすの上に乞、(二)双の字あるか。

赤色にして右手に劒を持し、左の手は拳に作りて腰に安き甲冑を着く。

㊇廣目天

○種子　毘　○三摩耶形　三戟　○印(一)二手背を合せ、二風を鉤し結び、二空之を招け　眞言に曰く　唵、尾嚕博乞叉那伽、地波多曳、　曷

赤色にして冑を着す、右の手には三古戟を持し、左の手は股上に安く或は腰を押すあり。

㊇多聞天

(二)壇中に鬼座あり、座に吠字あり、變じて寶棒と成る、寶棒變じて毘沙門天王と成る、七寶莊嚴の甲冑を着す、左の手には塔を持し、右の手には如意棒を執る、吉祥天女、五部太子、八大藥叉將、二十八使者及び無量の藥叉衆等の諸大眷屬、前後に圍繞せり。

○根本印(三)十指を內に相叉へ、二水を竪て、頭相拄へ、二風を竪て、微しく屈し、左の空を右の掌中に入れ右の火甲を(四)指し、右の空は左の空の背を越え、左の掌中に入れ右の火甲を押す。○眞言に曰く　唵吠室羅(ヘイシラ)嚩拏(ダヤ)野、莎訶

(一)二手云云　朱書に云く、又た云ふ、二手拳にして背を相合し空を以て火指の甲を押して、二風を索の如くせよ。

(二)壇中云云　道場觀。

(三)十指云云　朱註に、又た云く虛合して二地掌に入れ交へ、二風舒べて火背に着くる勿れ。

(四)指　押か。

○又の印虛合して地を屈し双へ風を火の背に屈す、八藥叉あり。　師說は此の印を用ふ云云　○又の印內縛一股にして中指を契するなり　眞言に曰く　唵縛曰羅昧(イ)羅縛　此の印眞言は金剛界次第に出づ。

○形像　別行軌に云く　我れ諸天善神を領し空中に於(し)て是の人を擁護せしむ、若し我が名を聞く者、我ありと知る者をば、我れ當さに是の人邊の左右に於て眼精を護るが如く、己が命を護るが如くして諸惡者をして惱亂すること無からしむ。又た云く、若し人ありて能く我が形像を受持し供養し陁羅尼を誦し、及び印法を結べば、所有る行用我れ一切に於て汝が所求に隨ひ、之に應じて汝が願を滿足せしめむ、若し出家の人ありて受持せば、我れ童子と爲りて之を助けん、若し國王・君臣等にありて我を受持し供養せば、我れ當さに富貴・兵甲・王位の恒願、之に應じ誓て相背くことなかるべし。又た云く、先づ四肘の壇を作り淨室の中に於(し)て惡土を掘り去けんこと深さ一尺、遠處より淨黃土を取り壇(チヤ)を填め築いて平正ならしめ、勒しる階道を成じ高さ一擦手、上層の方廣三尺高さ一擦手、四門を開け、水瓶を用ひて香水を盛れ、(一)杕箭四(二)俟、刀四口、鏡四面、供養の飯食十二盤を用ふ、煎餠乳酪、蘇燈四(三)戔四、散花は春夏は雜花を採れ、秋冬には綵花を散せよ、其の壇下の層は山石を(四)盡し、上の層は大蓮花を畫

(一)杕に作る。一本に炉。
(二)俟　枚なり。
(三)戔四　一本に盞に作る。
(四)盡　盡の字か

き、四角には海水を盡き、像は中心の蓮花上に安す、上に幡十六口を懸けたり、皆な神の形像を作す、其の像の面南、持法の人は面北に向ひ、像に對して坐して念誦す。天王大身陀羅尼に曰く　曩謨(ナウボウ)引羅怛曩(アラタンナウタラヤ)怛羅夜引也、曩謨(ナウボウ)引失戰茶縛曰羅(シセンダバヂラ)、播拏曳(ハンダエイ)曩謨(ナウボウ)引阿陁(アタコ)劫路(ロ)引步引跢羅也一地入捨也二吠室羅摩拏縛左曩引薩也三摩賀引羅引惹(アラン)薩也四夜乞叉地婆二合多薩也五嚩摩多薩也六薩覩哆薩也七婆捨娜八鉢羅(二)沙夜引旃縛賀娜薩也九四摩駄吒十吒尼鉢羅沙夜引旃十一怛儞也二合他俱曬旃十二(三)俱沙十三尾捨擇摩娜薩也十四摩賀引羅惹十五嚩晡伽十六寧哆羅摩蹉覩十七薩縛賀引十八

若し受持する者ありて、清淨にして卅萬遍を念誦せば、天王加備し、所作の事業心を起し念を動するに一切を降伏す、乃至榮祿官職(ショク)我れ汝が心願に隨はん。又た云く、若し我が心眞言を受持し念誦する有て、諸の供養を作さば、唯し我が身(三)心意を汝が身上に在(な)き、汝を愛念することなし、若し人有りて財を求め官を求め、一切外の諸の心事を求めんに、自ら汝が願をして滿足せしめ、惡人をして汝を害せしめず、能く汝等をして我が法を受持せしめ、即ち富貴安樂なることを得、男女端政ならむ、奴婢・車乘・五穀・豆麥・田莊・妻妾を必ず決定して汝等に與へ、一切の樂具を成就し、汝

(一)朱書に云く、此の三字異本分なり。
(二)俱曬旃の三字一本にあり。
(三)心　一本に口に作る。

の意願に隨て滿足す、乃至命終して身所生の處を得んに、汝が意願に隨て所生相違背せじ、若し不實ならば我れ名けて護法天王と爲さず、我れ必ず汝に替りて阿鼻地獄に墮せん、汝等受持し讀誦する者我が法中に於て少き疑心を生じ、誹謗輕罵する者、是れ汝等苦業地獄の因緣の未だ盡きざるなり、即ち知んぬ此の人、出期あることなしと。又た云く　如法に供養し、音樂を作し歌讚し、梵音をもて讚嘆す、是の如く日々毎月十五日、白月一日正月七日、像の前に對ひて念誦行道するに、我れ身を現じて示現し或は壇中に於て諸の寶物を施し、汝をして滿足を與へん。

又た云く　金銀の合子を用て盛れ、如し金銀の合子無くんば瑠璃の合子を用ひよ、若し瑠璃の合子無くんば瓦の合子を用ひよ、香は度(はから)へ、麝香・欝金・龍惱・丁香なり。

(一)觀想云云　道場觀。

○○吉祥天

(二)觀想せよ、前に㘁字あり、大光明を放ち、大地に遍して瑠璃寶地と成る、周迴して流泉浴池あり、其の中に更に㘁字あり、寶宮殿と成る、殿中に壇場あり、其の上に蓮花臺あり、花臺上に滿月輪あり、其の中に室里(シリ)字あり、變じて如意寶珠と成る、寶珠

變じて吉祥天女と成る、首に摩尼冠を戴く、面貌端正にして莊嚴微妙なり、左手に如意寶を持し、右手は與願の印を作る、背後に圓光あり、紅蓮花に坐す、梵王、帝釋、四大天王、及以び無量の眷屬圍繞せり。

○根本印八葉眞言に曰く　唵、摩訶室利二合耶、曳、莎哥

○散念誦の時、大吉祥經を轉讀すべし、若しは十二名號經卷數。云云　○又た眞言に曰く(内錄三貼なり)　怛儞也他、室哩泥室哩泥、薩嚩迦哩也、娑駄儞、悉儞悉儞儞儞儞儞阿落瑟吒曩捨也娑婆賀　○又た眞言に曰く　唵室哩二合泥嚩禰怛囉二合寫扇底俱嚕娑嚩二合賀

陀羅尼集經に云く　若し自住の處、若しは阿蘭若の處にして、香泥を以て地に塗り、微妙の香を燒き、淨好の座を敷き、種種の花香を以て其の地に布散して、以て我を待て、我れ爾の時に於て一念の頃の如きに、其の室宅に入りて卽ち其の座に坐せん、此れより日夜に此の居家若しは村邑、若しは僧房、若しは露處をして乏少する所なからしめ、若しは錢、若しは金、若しは珍寶、若しは牛羊、若しは穀米、一切の所須卽ち具足することを得て、悉く快樂を受けしめん、若し能く己が所作の善根の最勝の分を以て

我に廻らし與へば、我當さに終身其の人を遠ざからず、所住の處に於て至心に護念し、心の所求に隨て成就することを得しむべし、云云未だ嫁せざる女の年十五なる者を取て、絹を織らしむること一丈四尺にして、功德天の大身呪を用て黃牛の尿を呪すること一千八遍し、尿を以て其の絹の面上に灑ぎ、月の八日より十四日に至るまで淨好に地を泥つて四肘の水壇を作り、釋迦の像一體を取て壇中に安置し、種種の香・花・飯食を供養し五盞を燃燈し、一の畫師の上好手の者を喚んで日日に八戒齋を與受し、淸淨に洗浴せしめ、亦た畫師の與に護身の印を作せ、先づ畫師と共に、其の功力を斷めよ、須むる所の者に隨て、呪師價を還すことを得ざれ、其の像は身の長一肘、一尺三寸五分、其の光と座とを除く、更に高大を須ひば亦彌〻精好なり、薰陸香・沈水香・白檀香・乳汁を用て彩色に和せよ、諸の皮膠を用ふるを得ざれ。功德天の花身の呪を以て其の彩色を呪せよ、五水の罐を取て壇の中心及び四角に着け、壇の門の前に於て三七人の齋を作せ、若し無くんば七人乃至三人も亦た得。其の功德天像の身は端身正して赤白色、二臂なり、種種の瓔珞・環釧・耳璫・天衣・寶冠を畫作す、天女の左の手には如意珠を持し右の手は施無畏なり、臺上

に坐する、左邊に當て梵摩天を畫け、手に寶鏡を執る、右邊に帝釋天を畫け、花を散して天女を供養するが如し、背後に各の一の七寶山を畫け、天像の上に於て五色の雲を作せ、雲の上に六牙の白象を安せよ、象の鼻は馬惱の瓶を絞(もつ)へり、瓶の中より種種の寶物を傾け出して功德天の頂上に灌ぐ、天神の背後に百寶の花林を畫け、頭上に千葉の寶蓋を畫作せよ、蓋の上に諸天伎樂し散花供養することを作せ、其の像の底下の右邊に復た呪師の形を畫作せよ、鮮白の衣を着し手に香爐を把て蹲跪して供養す、白素の紬の上に於て坐せり。以上功德天の像法竟る。

供養四天王食陀羅尼に曰く　唵嚕迦波哩帝惹野惹野吽。

毎喫食の前後に一坏を取り、淨水を一分に和し加持すること七遍して、淨處或は石上に於て之を寫せ、若しは毎日常に一遍施せば、其の四天王並に其の眷屬、一切の厄難の處に於て常に此の人を護り一切吉祥なり。

○施餓鬼

○先づ點淨處掃地(二)排楊木の下を用ふる莫れ(朱)水泡の樹逢吉所。　○次に一器の淨食を儲け水を和して東に向へ

(二)排楊　註に柘榴といふ。

(二)普集　朱に云く、獄を開いて諸餓鬼を招集す。
(二)開云云　地獄を破し及び開喉す

(三)次に云云　傍註に、摩伽陀國所有の斛を將ひ、七斛の食を以て食し已、皆天に生じ或は淨土に生る。

居う或は立つ○三部護身　○先づ淨地　○次に淨土唵步欠、如來拳　○次に(二)普集右手の空火和捻し風を招く三反　七反　唵補保里、迦里怛里、怛怛誐多耶　(二)開咽喉前印、風を招かず。　唵補保帝里、迦怛里怛他蘖多耶　○次に食器を取り手に居えて偈を誦す。

至心奉上　一器淨食　普施十方　盡虛空界　一切餓鬼　先亡久遠　山川地主　乃至廣野　諸鬼神等　皆來至此　受我此食　依我呪食　離苦得樂往生淨土　發菩提心　行菩薩道　晝夜恒常　擁護於我　一切善願皆令滿足

○五大願(朱)多く川意あり　○次に前印を結んで食器に當て眞言を誦して曰く　唵三婆羅三婆羅吽　○次に甘露施無畏。(朱)次に彈指し發聲し、一呪一彈す三反　唵蘇嚕婆耶怛他蘖多耶、唵蘇嚕、蘇嚕、鉢羅蘇嚕、鉢羅蘇嚕莎訶　○次に鑁字加持すること七遍(朱甘露乳海を流出するに一切の鬼皆飽滿することを得て乏少あることなし。　○次に地所に寫し置き了る　○次に五如來名號　南無過去寶勝如來除堅貪業福智圓滿、南無妙色身如來破醜陋形圓滿相好、南無甘露王如來灌法身心令受快樂、南無廣博身如來咽喉廣大飲食受用、南無離怖畏如來恐怖悉除離餓鬼趣　○次に發菩提心胃地悉多云云　○次に三昧耶薩怛鑁

○次に光明眞言七反　○次に心經・祈願(一朱)多く意あるべし。　○次に發遣(前の普集を以て外に向へ擲し眞言の末に隴車隴車の句を加ふ。

◎童子經供養作法次第

○先づ白月八日・十五日(白月を用ふるは多分の說なり。)晨朝に花水を酌んで則ち加持す(除垢明)　供料等を用ふ。　○次に洗手、澡口して法衣を着し、三部・護身す等　○次に東方に向ひて立ち(二)栴檀乾闥婆の名字を唱ふ(百反)　○次に十五鬼神の名(各の七反)　○次に新筆等を以て經を書寫す、(但し水を硯に入るゝに除垢明を用ふ、次に筆を取て覺・鑁・の二字を誦す。)　寫經の間、燒香一杯を盛り儲く、臺上に置いて煙(名香等)を絕さず。　○次に經を書寫し畢て閼伽等一前を備ふ(常の如し)　洗米(大二杯、小十五杯)乳(ニウ)の粥(カユ)一杯(大(朱)大鬼王料　菓子一杯(若は黑の大豆)　供を辨じ畢る　供師合掌して心中に一方佛を禮す(普禮明)　○次に加持供物(常の如し)　○次に三禮・(二)唄等　○次に表白　○次に經題名　○次に發願・五大願等　○次に三力偈　○次に大鈎召　○次に獻供(運心)　○次に讃に曰く　唵比(ヒ)旨比旨、南無(ナウボ)畢都帝莎哥　○次に普供養・三力・祈願・禮佛　南無摩訶毘盧遮那佛　南無釋迦牟尼佛　南無栴檀大鬼

(一)栴檀云云　南無栴檀乾闥婆王と唱ふ。

(二)唄　如來唄

神王　南無一切三寶

言を以て誦し線を結ぶ百八遍(誦する毎に一結す)　大鬼王名號をもて一結するは傳なり。

○次に十五鬼の名字を誦し線を結ぶ(各の一結し、汝今疾く去行して速かなること風の如くならんを加ふ云云)　○次に經を封ず(或る說に、芥子を取て經の眞言を以て加持し母授經を頂戴す。)　○次に藥師散花　○次に廻向　○次に發遣

△童子經法　白黑の八日・十五日に、先づ晨朝に花水を酌み、則ち加持す(垢を去る覽・鑁の二字等は例の如し。　○次に燒香一盃(煙を絕さず、名香)經を書寫し畢て母をして、之に八齋戒を受持せしむ。　○次に大小十六盃の供物(洗米乳粥一杯　蘇蜜　若しは菓子等　○次に加持供物は例の如し。　○次に三禮、如來唄、事由、神分等　○次に經題名　○次に發願(至心發願云云五大願三力普供)　○次に讀經　○次に勸請印　○次に燒・閼・塗・花・次第に之を供す。　○次に眞言百八遍を誦す(五色の糸)　○次に十五鬼神を呼ぶ(十五結)　○次に大鬼王を禮す。　○次に後供養　○次に廻向　○次に經を封じ畢る。

佛說護諸童子陀羅尼經

爾の時、如來初めて正覺を成じたまふに、一大梵天王あり、佛の所に來り詣し佛足を

敬禮して而も是の言を作さく。南無佛陀耶　南無達摩耶　南無僧伽耶　我れ兩足尊を禮したてまつる、照世大法王、閻浮提に於て最初に神呪を說く。

彌酬迦（ミシュツキャ）　彌迦王（ミキャ）　寫陀（コンタ）　阿波悉摩羅（アハシマラ）　牟致迦（ムチキャ）　摩致迦（マチキャ）　閻彌迦（エンミキャ）　迦彌尼（カミニ）　梨波埿（レイハチ）　富多那（タナ）　曼多難提（マンタナンタイ）　舍究尼（シャックニ）　犍吒婆尼（クンタハニ）　目佉曼荼藍婆（ホキャマンタランハ）

佛陀に敵無したてまつる、此の呪を成就して諸の童子を護り、惡鬼神のために嬈害せられず、一切の恐怖悉く皆な遠離せんことを、蘇婆号。

時に梵天王、此の呪を聞き已て歡喜し奉行しき。

佛說護諸童子陀羅尼經

三藏法師、菩提流支譯す。

爾の時に、如來初めて正覺を成じたまふに、一大梵天王有りて、佛の所に來り詣し、佛足を敬禮して、而も是の言を作さく

南無佛陀耶　南無達摩耶　南無僧伽耶　我れ佛足尊を禮したてまつる、照世の大法王、閻浮提に於て最初に神呪甘露淨勝の法を說く、及び無着僧を禮し已て　牟尼の足を禮して卽時に偈を說いて言く

世尊諸の如來　聲聞及び辟支　諸仙護世王　大力龍天神

是の如く等の諸衆　皆な人中に於て生ず　藥叉羅刹あり　常に喜で人胎を噉ふ

人王の境界に非れば　强力も制せられざる所　能く人をして子なからしめ　胞胎を傷害す

男女交會の時　其の意をして迷亂せしめ　懷姙することを成就せず　或は歌羅安浮して

無子以て胎を傷り　及び生るゝ時命を奪ふは　皆な是の諸鬼神の　其の嬈害を作すが爲なり

我れ今彼の名を說かん　願はくは佛、我が說を聽きたまへ。

第一を彌酬迦と名く、第二を彌迦王と名く、第三を(一)奢陁と名く、第四を阿波悉魔羅と名く、第五を牟致迦と名く、第六を魔致迦と名く、第七を閻彌迦と名く、第八を迦彌尼と名く、第九を梨婆埿と名く、第十を富多那と名く、第十一を曼多難提と名く、第十二を舍究尼と名く、第十三を魃吒波尼と名く、第十四を目佉曼荼と名く、第十五を藍婆と名く、此の十五鬼神常に世間に遊行して、嬰孩小兒のために而も恐怖を作す我今當さに此の諸の鬼神の恐怖の形相を說くべし。彌酬迦とは其の形ち牛の如し、彌迦王とは其の形ち師子の如し、奢陁とは其の形ち鳩魔羅天の如し、阿波悉魔羅とは其の形ち野狐の如し、牟致迦とは其の形ち獼猴の如し、魔致迦とは其の形ち羅刹女の如し、閻彌迦とは其の形ち馬の如し、迦彌尼とは其の形ち婦女の如し、利婆埿とは其の形ち狗の如し、富多那とは其の形ち猪の如し、曼多難提とは其の形ち雉の如し、目佉曼荼とは其の形ち(二)薰狐の如し、舍究尼とは其の形ち鳥の如し、魃吒波尼とは其の形ち蛇の如し、藍婆とは其の形ち(三)麻葉赤花黑賁と。の十五鬼神、諸の小兒に着し其をして驚怖せしむ、我れ今當さに復た諸の小兒怖畏の相を說くべし。彌酬迦鬼は小兒に着かば 眼精廻轉す、彌迦王鬼は 小兒に着かば 數〻欷

(一) 奢　朱註に云く、丘捨の反、馬腹の熱なり。

(二) 薰　朱註に云く、呼運の反、草

(三) 麻葉赤花黑賁と。

し數ゝ吐く、鶩陀鬼は小兒に着かば兩眉動く、阿婆悉魔羅鬼は小兒に着かば口中より沫出づ、牟致迦鬼は小兒に着かば棒を把て展べず、魔致迦鬼は小兒に着かば其の舌を嚙む、閻彌迦鬼は小兒に着かば喜啼し喜唉す、迦彌尼鬼は小兒に着かば樂喜し女人に着く、梨波堀鬼は小兒に着かば種種の雜相を見る、富多那鬼は小兒に着かば腹中に驚怖し啼唉す、曼多難提鬼は、小兒に着かば喜啼喜唉す、舍究尼鬼は小兒に着かば飲乳を肯はず、犍吒波尼鬼は小兒に着かば咽喉の聲塞ぐ、目佉曼荼鬼は小兒に着かば時氣熱病し下痢す、藍婆鬼は小兒に着かば數ゝ噫し數ゝ噦す。此の十五鬼神、是の如く等の形を以て諸の小兒を怖す、及び其の小兒驚怖するの相、我れみな已に說く。復た大鬼神王あり、栴檀乾闥婆と名く、諸の鬼神に於て最も上首たり、當さに五色の縷を以て此の陀羅尼一遍を誦して一たび結し、一百八結す、並に其の鬼神の名字を書し、人をして此の書縷を賫し彼の使に語て言く、汝今疾く去行して速かなること風の如く四方に致し、彼の十五鬼神の所在の處に隨て栴檀乾闥婆の大鬼神王と與に五縛を以て彼の鬼神を縛せしめ、兼ねては種種の美味の飲食・香花・燈明及以び乳粥をもて神王を供養せよ。爾の時に大梵天王復た佛に白す、佛に白して言さく、世尊、若し女人ありて男子

を生せず、或は胎中に在て失壞墮落し、或は生じ已て命を奪ふ、此の諸の女等、子息の保命長壽ならんことを欲求せば、當さに常に念を繫けて善法を修行し、月の八日・十五日に於て八戒を受持し、清淨洗浴して新淨の衣を着し、十方の佛を禮し、中夜に至て少芥子を取て己が頂上に置き、我が所說の陀羅尼呪を誦すれば、此の女人をして卽ち願の如くなることを得しめ、所生の童子安穩にして患なく其の形を盡し壽終るまで中天せず。若し鬼神有て我が呪に順はずんば、我れ當さに其の頭をして破て七分に作し、阿梨樹枝の如くならしめん。卽ち陀羅尼呪を說く、哆姪他、阿伽羅伽寧 那伽伽寧婆漏殿、祇殿伽婆殿、婆殿不殿、羅收彌、修羅俾、遮羅俾、婆陀尼、婆羅呿(二)冒利沙尼、那易彌那易、蘇婆呿。

世尊、我れ今此の陀羅尼を說くに、諸の童子を護りて安穩なることを得、其の長壽を獲しむるが故に。爾の時に世尊、一切種智をもて卽ち呪を說いて曰く 多姪他、菩陁、菩陁、菩陁、菩提、菩提摩殿、或叉夜、婆舍利婆多彌、婆羅陁、頭殿頭殿、婆蘭、多頭殿、舍摩膩收鞞求殿、婆蘭帝、收藍舍彌帝、波翅婆呿膩、陁膩祇摩膩蘇婆呿、蘇婆呿。

(二) 冒利 或本になし。

此の十五鬼神、常に血肉を食ふに、此の陀羅尼呪力を以ての故に悉くみな遠離して惡心を生ぜず、諸の童子をして恐怖を離れしめ、安穩にして患ふる處なく、胎初生するに諸の患難なし、此の呪を誦すれば、或は城邑・聚落に於て住處あるに隨て、亦た能く彼の嬰孩小兒をして長じて安穩なるを得、終に年壽を保たしむ、佛陀に南無す、此の呪を成就して諸の童子を護り、諸の惡鬼神の嬈害せらるる所と爲らす、一切の諸難、一切の恐怖悉く皆な遠離せんことを。蘇婆哥。

時に此の梵天此の呪を說くを聞いて歡喜奉行しき。　護諸童子陀羅尼經

大麥　小麥　大豆　米　麻油　用紙少少　土器少少　相向方面　安布神座　布烈供物

親有稟承　東面供之　備物後書寫經

童子經供養作法

月の八日、若しは十五日、若しは他の吉日を以て、中夜先づ子母洗浴して新淨の衣を着し十方の佛を禮す。　○次に梵天座を定む（莞薦を用ふべし。）　○次に大鬼王座を定む（机の類を用ふべし。）　○次に座ごとに鬼名を書し之を立つ。　○次に供物を備ふ。洗米二杯、燈明二杯、閼伽一前、香一杯、種種の味美、菓子、飮食、先づ梵天に供し、次に大鬼王に供し、中に就て十五小鬼神の爲に乳を供し、若しは五穀の粥の堅きを板に盛り杓子もて散じ供ず、每板手もて各座に宛て定む、先づ幣二棒を梵天に奉じ、散供少少を以て諸の鬼神に供すること宛も財施の如し。

○次に三禮　唄　散花　　○次に表白　　○次に祈願　　○次に梵天の奉爲に心經を誦す。　○次に童子經一遍を訓讀す。　○次に少芥子を取て導師頂上に捧げ、拜して後ち壇上に置く。　○次に五色の糸を以て師の左手の糸に付け、糸の末を他の清淨の人に持たしめ一呪一結す、一百八遍に盈ちて後ち種種の寶號等を唱ふ、祈る詞は任意なり。　○次に供養真言　○次に六種頌　○次に若しは呪願。　○次に清桶を以て梵天の供物少少諸鬼神の供に併せて桶の內に入れ儲け、子の生氣養を尋ぬれば、方さに穴を堀りて件の物を深く入れ、鳥・犬のために之を食はしむべからず、但し（二）天一太白の方を避くべし、卽ち鬼神遠離の大呪を頌す。　○次に廻向　○次に件の經、百八の結糸、並に芥子等を生れたる子の枕の方に持せしめば、大安樂にして更に病患なし、世俗此の旨を知らず、只大底に書して持するも殊驗なきのみ。栴檀乾達婆神王の形は冥官の如し、甲冑形なり、石上に坐して右足を垂れ、右手を以て膝を押

（二）天に作る。一本に太

し、左手に[illegible]載を持す、利毛形なり、頂上に牛頭あり、耆年宿徳の形なり、王相なり云云。鴦陁は形ち忿怒利毛形なり、裸形なり、天衣を着け石上に坐し、左手に三古戟を持し、右手は劍印にして半跏坐せり。

魔[illegible]迦は文の如し、右手に長刀を持し、左手は心前に横たへ、首に雲冠あり。

迦彌尼は文の如し、首に王鬘あり。目佉曼荼は文の如し。

支度。名香　蘇蜜　五色糸（若しは白色の綵糸）　經料紙（芥子少々）　畢[illegible]筆　小刀　紙一帖（護摩形料）　五穀（各二升、用否は隨意。）　白米一斗　時菓子少少　柏葉百枚（用否は隨意）　土器（大五口小七十）　鷹二枚（一枚は壇敷料一枚は阿闍梨座の料）　油五合　折敷二枚　閼伽桶二口（杓を加ふ）　淨衣一領（白色）

○○訶利帝母

（一）樓閣の中に宣臺の座あり、座の上に嚩字（或はあ[illegible]）あり、變じて吉祥菓と成る、菓變じて訶利帝母と成る、形像金色にして妙天衣を着け、頭冠・瓔珞をもて身を莊り、宣臺上に坐して右足を垂下す、兩邊に二孩子を畫け、宣臺に傍ふて二つの膝の上に立つ、各一孩子を坐せしむ、左の懷の中に一の孩子を抱く　畢哩朶と名く、右の手の中に於て吉祥菓を持し、眷屬圍繞せり。

（一）樓閣云云　道場觀。

○根本印（右手の指を以て左手に於て背より双へ入れ、左手の掌を把る、左の手を身に向へて三たび招げ、其の印卽ち成ず）　○眞言に曰く　唵、聲聲、麼（鼻引）里、迦引（キヤ　キ）哩（ライ）帝、娑婆賀。　○讃諸天　○愛子印（二手を以て合掌して二大指を並べ屈して掌中に入れよ。）　○眞言に曰く　唵致（チヒ）尼致顙（ナニ）、莎哥。

愛子成就法に云く　若し難產の者あらば牛蘇を加持すること一百八遍或は廿一遍し、產婦に與へて喫し、及び產門に塗れば、必ず易產するを得ん。若し持誦の者一心に專ら此の眞言を誦して更に雜修せずば、歡喜母常に隨て擁護し左右を離れず、久しからすして必ず其の身を現ぜん、若し此の歡喜母の法を修行して速驗ならしめんと欲せば、當さに別して淨室に置き、極めて嚴密なる須し、佛堂・精舍の中に於て法を作すを得ず、恐くは成就しがたし。又た人をして此の像を見せしめ及び作法を知らしむるを得ず、必ず效驗を失はん。

或る說に云く　供する時、遙かに堂處を去り、闇室に於て燈明を用ひずして之を供す。（燈明を用ひて堂に於て修すれば、悪の鬼神怖を成ずるが故なり云云）　童子經を供する時は必ず柘榴の菓を用ふるなり。

(二)樓閣云云　道場觀なり。

(三)樓閣云云　道場觀なり。

○○辯財天

(二)樓閣の中に荷葉座あり、座上に薩字(或は薩羅)あり、字變じて琵琶と成る、琵琶變じて辯財天と成る、首に天冠を戴いて莊嚴微妙なり、身相は白肉色にして青色の野蠶の衣を着け、琵琶を持して右の膝を立てたり(經に云く、常に八臂を以て自ら莊嚴す。無量の眷屬圍繞せり。

○根本印　定の五輪を叙べ仰けて心上に横たへ置き、琵琶の如くす、惠の空・風と相捻して三指直く竪て定の掌に當て、摩琴の勢の如し、乾闥婆の類なり、文に云く發撃の印とは琵琶なり。　○眞言に曰く　曩莫三曼茶沒多南、薩上羅娑嚩二合帶曳、莎哥。

○○迦樓羅天

(三)樓閣の中に荷葉の座あり、座の上に哦字あり、字變じて篳篥と成る、篳篥變じて迦樓羅天と成る、身肉色にして天人の如し、面は迦樓羅に似たり、二手に篳篥を持して之を吹く、又た一の繪圖あり、形ち迦陵頻鳥の如し、而も背あり横さまに三股杵を含む、左右の手に各の蛇を執り、左右の足蛇を踏む云云眷屬圍繞せり。

○根本印　定の空を以て惠の空を抱へ、左右に鳥の羽の如くす、印を結んで之を動すこと三反して飛ぶ勢の如くせよ　○眞言に曰く　曩莫三曼茶沒多南、阿鉢羅底二賀多、三捨薩那南、引四怛儞也他、五唵、捨句娜、六摩訶引捨句娜、七

(二)壇中云云　道場觀、(三)焰　一本に燄に作る)

尾旦多、八跛乞叉、二合九薩嚩跛曇、十佉佉十一佉嘔佉嘔、十二摩野、十二摩奴薩摩二合羅、十四吽、底瑟吒、二合十五冒地薩怛舞、十六袟鑞二合跛野底十七娑嚩二合賀引。　○又た眞言に曰く　歸命唵袟悉婆莎哥。

○○摩訶迦羅

(二)壇中に荷葉座あり、座の上に(三)焰字あり、變じて刀と成る、刀變じて摩訶迦羅神と成る、身青黒色にして火髪上さまに竪ちて、極忿怒の形なり、三面六臂あり、前の左右の手は横に劒を執り、次の右手は人髪を執る、其の形裸にして合掌し長跪す、次の左手には羊角を執る、次の左右の手には象皮を執り背後に張る、髑髏を以て瓔珞となし、蛇を以て耳璫臂釧となす、乃至眷屬圍繞せり。

○印相普印　○眞言に曰く　唵、摩訶迦羅耶、娑縛賀。　○又た云く　唵密止密止、舍婆幾、二合多羅羯帝娑縛賀。　○又た云く

○大黒天神

壇中に荷葉座あり、座の上に摩字あり、變じて袋形と成る、袋形變じて大黒天と成る、

膚色純黒にして、頭に烏幀(ウボウ)を冠らしめ、袴着、駈り褰(カラ)げて垂れざれ、狩衣(カリギヌ)を着し裙短(モスソ)く袖細くせよ、右の手を拳に作して、右の腰に收めしめ、左の手に大なる袋を持たしめ、背より肩の上に懸けしめよ、其の袋鼠毛の色を爲す、其の袋垂れ下りて臀の上に餘れり。

胎圖は六臂云云　○印言前の如し

㊇氷迦羅天

(二)樓閣の中に荷葉の座あり、座の上に揭(チ)字あり、字變じて菓と成る、變じて氷迦羅(ウヒヤツ)天と成る、童子の形の狀を作す、左の手に菓を把り、右の手は垂れて滿願を作して掌を外に向ふ云云。眷屬圍繞せり。

○印二手虛心合掌す、若し召請の時は○眞言に曰く　唵、揭蒂(チビ部必チニの反)揭儞、莎哥訶・智を以て三度來去せよ云云

道場には種種の飮食・乳粥・香花を供養せよ、赤色の花を取て、花ごとに一たび誦し一たび童子の身上に擲げ、十萬遍を滿せば、其の童必ず來て身を現じ、則ち一切の願を滿すことを得て、日〻に千人の上妙衣食を施すに闕くる所なけん。(朱)又の本に云く、唵揭(チ)

(二)樓閣云云　道場觀。

(二)壇の上云云　道場觀。

若擲儞(シヤチニ)莎哥。

㊇襄糶梨(ジヤウクリ)

(二)壇の上に雪山あり、山の上の蓮花座の上に吽字あり、變じて黒蛇と成る、黒蛇轉じて常瞿梨(ジヤウクリ)童女と成る、身綠色にして龍女の如し、七頭を具足し項背(クビセ)に圓光あり、相好端嚴にして鹿皮を衣と爲す、右の第一の手に三戟叉を持し、第二の手に三五蓋の孔雀の尾を執る、左第一の手に一の黒蛇を把り、第二手は施無畏なり、七寶を以て瓔珞と爲し、諸蛇を以て身を莊(カザ)り、一一の毛孔より火焰を流出す、怨鳥王等を降し、及び虎狼・師子・蚖蛇蝮蝎蜈蚣(クワンシヤソクカツコク)の類、毒龍等兩邊に周迊せり。(朱)或る說に、七面四臂にして蛇を以て莊嚴となすと云云

毒女法に云く　二臂像右の手に毒劍を執り、左手に菩薩木の印を把る。襄糶梨童子眞言に曰く　唵、阿梨(アシ辛以の反)爾賀吠(イ)二合(シユラ)引一戍擺(シカ)爾賀吠(イ)、二合(バザラ)引二嚩曰羅、二合迦(キヤ)引曳(エイ)、引三佉囉(キヤラ)二合娑(サ)、四入嚩(ジムバ)二合羅(ラ)入嚩二合羅、五摩賀(マカ)引迦(キヤ)引里(リ)、引曳(エイ)、引六摩賀(マカ)引喩祇(ユキ)、覽爽(ゼンバ)の反、濕嚩二合里(リ)曳(エイ)、引七莎訶(ソハカ)十一

○小呪　撲娑嚩賀(朱)或る說に正念誦に此の明を用ふ　○隨心呪　吽發吒娑縛賀。

毒女法に云く　此の呪を說き已るに、其の雪山の中に五千の惡毒蛇あり、四散して毒蛇牙落ち、頭破れて星の如くに散ず云云。

又た云く　此の常瞿利、女身を現ずと雖も實に女に非るなり、善男子、諸佛菩薩の智惠神通は、能く衆生のために種種を現じて、諸の不善を攝化して諸の毒龍蛇をして、衆生を侵害せしめず。

又た云く　諸の惡毒虫而も伴戲と爲て飢えて毒藥を食ひ、渴して毒藥を飲む云云。

又た云く　○印鉢印の如し、掌を仰け開いて水を掬ふ如くせよ、而も二手、水・火・風・空の八指曲め屈して八葉印の勢の如くす、是れ師子の爪の相なり、印は掌を仰け開いて八指を屈するなり。

○同じく心印右の手施無畏の勢の如くにし、掌を外に向けて之を立て、而も五指を散し開いて之を屈して八葉の印の勢の如くせよ、是れ即ち前の根本印の半印なり。

○又た云く　○根本印二手を以て相ひ據げて物を掬ふ勢の如くせよ、二小指を以て相並べ餘の八指各の脇言七反を誦して五處を加持せよ　し開いて微しく屈して師子の爪の形の如くせよ、即ち成ず。此の印を結び隨心の眞

折死毒蛇氣分呪經の最初の呪　蛇氣蘇生呪印契眞言經の次の呪。

國譯七卷鈔六　終

國譯七卷鈔七

○摩利支天　○水天　○地天　○瑛魔天　○大山府君　○拳吉關　○星宿供　○妙見菩薩　○本命星供

○○摩利支天

(二)樓閣の中に荷葉座あり、座上に刁字あり、變じて扇形と成る、扇形變じて摩利支天と成る、天女形に似たり、左手は臂を屈して上に向へ、手腕を左の乳の前に當て拳に作れ、拳の中に天扇を把る、扇は維摩詰の前の天女の把れる天扇の如し、扇に於て中に當て、西國の萬字を作る、字は佛の胸上の萬字の如し、字の四曲内に各の四箇の日形を作る、一一に之を着く、其の天扇の上に光焰の形を作す、右手は臂を申べて、五指を並べ申べ、指の頭垂れ下す、眷屬圍繞せり云云。

○根本印二手、地水を内に相ひ合せて風空を並べて竪て合せよ、火を以て風を縛ひ、大金剛輪の印の如し、身の五處か印せよ。○眞言に曰く　唵引阿遲底也、二合摩利支曳、莎訶。

(二)樓閣云云　道場觀。

○次に摩利支安怛但那の印を結べ　唐には隱形といふ、左手を以て掌を虛にして拳に作り、大指を微し屈し頭指の甲を捻して環の如くせよ、巳下の三指を拳に握りて合せて密しく又た合す、掌中に孔を作りて自心の前に安き、想へ自身此の印の孔の中に入ると。右の手を以て掌を平めて右に旋して此の印を摩り、便ち孔の上に蓋ふ。○眞言に曰く　曩莫三曼多沒多南摩利支、莎哥。

佛說摩利支天經

大興善寺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す。

是の如く我れ聞きき、一と時、薄伽梵、室羅筏(二)誓多林給孤獨園に在り。爾の時に世尊、諸の苾芻に告ぐ、天女あり摩利支と名く、大神通自在の力あり、常に日月天の前を行くに日天・月天も彼を見る能はず、彼れ能く日を見るも、人能く見ること能ふことなく、人能く捉ふることなく、人能く害することなく、人能く欺誑することなく、人能く其の財物を債むることなく、人能く罰を責むることなく、怨家に能く其の便りを得るところと爲らず。佛、諸の苾芻に告げたまはく、若し彼の摩利支の名を知り、常に憶念することあらんものは、彼の人も亦た見るべからず、亦た知るべからず、亦た捉ふべからず、亦た縛すべからず、亦た害すべからず、亦た欺誑すべからず、亦た人、其の(三)物を債むるところと爲らず、亦た人の責罰する所と爲らず、亦た怨家の能く其の便りを得るところと爲らず。若し善男子・善女人ありて、彼の摩利支天の名を知り、加護を求むる者は應さに是の言を作すべし、我れ菜甲摩利支天の(二)母に大神力あるを知る、我今歸命す、願くは我が身を護て、人能く我を見ることなく、人能く我を捉ふることなく、人能く我を縛することなく、人能く我を害することなく、人能く我れを欺誑することなく、人能く我が財物を債むることなく、人能く我れを怨家能く其の便を得るところと爲らざらしめよと。爾の時に世尊、陀羅尼を說いて曰く　曩謨引囉怛曩二合怛羅二合夜引野、一怛儞也二合他、去引二遏迦麼鼻音、巳下同じ。泉星以の反、三沫迦麼泉四阿上度引麼泉五紫精以の反、引鉢囉麼泉六摩賀紫鉢羅摩泉七頻怛駄引曩麼泉八麼鼻引哩引紫引野摩泉九曩謨引娑覩二合帝十囉韈舌乞灑二合羅乞灑二合賀十一薩嚩引二合難上左十二薩嚩婆去喻引十四鉢捺羅二合吠引毘藥二合娑嚩二合賀引心眞言に曰く　娜莫三去滿多沒駄引南、一唵麼鼻引哩引制引涉哥爾の時に世尊、此の陀羅尼を說き已りて、諸の苾芻に告げたまはく、若し經法を受持する者あらば、是の願を作すべし、王難の中に我を護り、賊難の中に我を護り、行路の中に我を護り、道を失へる曠野の中に於て我を護り、水火難の中に我を護り、刀兵

(一)筏の下、一本に城の字あり。

(二)母　他本には名に作る。

(三)物　一本に財物に作る。

軍陣の中に我を護り、鬼難の中に我を護り、毒藥の難の中に我を護り、毒虫の難の中に我を護り、一切の怨家惡人の難の中に我を護り、佛の(二)實語をもて我を護り、法の實語をもて我を護り、僧の實語をもて我を護り、天の實語をもて我を護り、仙人の實語をもて我を護り、一切の處・一切の時に於て願くは常に我が弟子を護りたまへ、娑縛二合賀引。佛、諸の菴藥に告げたまはく、若し善男子・善女人・菴藥・菴藥尼・鄔婆素迦・鄔婆斯迦・國王・大臣・一切人等、諸の難あらん時、但だ當さに至心に此の摩利支天陀羅尼を誦すべし、功を加ふることを待たずして、誦するに隨て速かに諸難を遠離することを成ず、至心ならざることを除く、持誦するの時並に本印を結び、香を以て手に塗り、先づ三部心印を結び、二手内に相叉へ拳に爲り二大母指を並べ竪てよ、是れ一切如來心印なり、眞言に曰く　唵爾惹以反曬爾迦半音

○次に蓮花部心印を結べ。即ち前印にして、左の大母指を以て屈して掌に入れ、右の大母指を直く竪つ、眞言に曰く　唵阿去引噜引力迦半音

○次に金剛部心印を結べ。即ち前印にして、右の大母指を以て屈して掌に入れ、左の大母指を直く竪つ、眞言に曰く　唵縛日羅二合地力二合迦半音

○次に護身如來拳印を結べ。右の手を以て、大母指を屈して掌中に横たへ、便ち四指を以て大母指を握つて拳に爲る、此の拳印を以て自在の五處を加持す、先づ額・右肩・左肩・心・喉なり、處ごとに各の眞言一遍を誦す、眞言に曰く　唵僕引入縛二合羅吽引

○次に摩利支菩薩根本印を結べ。小指・二無名指を以て右、左を押し内に相叉へ、二頭指を直く竪てゝ頭相捻し、二中指を以て各の頭指の背を繳て前に向へ、頭相拄へ、二大指並べ竪てよ即ち成ず、印を結んで心に當て、前の摩利支身陀羅尼及び心を誦すること各の七遍し、遍ごとに二大母指を屈して之を招げ、亦た迎請印と名く、衆ねて此の印を以て身の五處を加持し、頂上に印を散ず。

○次に大三摩耶の印を結んで辟除結界す。右手の大指を以て小指の甲上を捻し、餘の三指は直く竪てゝ三胝杵の形の如くす、左手は金剛拳に作りて心上に按し、眞言を誦するに隨て右手を以て頂上を印し左轉すること三遍して一切の障難を作す者を辟除す、便ち右に旋すこと三遍し並に上下に揮ふ即ち十方界を結することを成ず、一切の天龍・人・非人等附近すること能はず、眞言に曰く　唵儞迦隷舌摩賀引三去麼鼻琰娑嚩二合賀引。

○次に摩利支天安怛祖那の印を結ぶ此に隱形といふ。左手を以て掌を虚にして拳に作り、大指

(二)實語　一本に寶語に作る。

は微しく屈して頭指の甲を捻し環の如くせよ、已下の三指拳に握つて合せて密(ひそ)くならしめ、又た掌中に孔を作さしめ自の心前に安け、想へ自身此の印の孔中に入て藏ると。右手を以て掌を平(ひら)め右に旋し摩つて此の印を便ち孔の上に蓋へ、想へ此の印即ち是れ摩利支天菩薩の身なり、我れ自身摩利支菩薩の心中に隱藏すと、一心に專注して間斷せず、前の根本及び心眞言を誦して遍數を限らず、但し虔誠至心にせよ、必ず菩薩の威神加護を獲て、一切の怨家惡人悉く見ること能はず、一切の災難皆な解脫することを得ん。若し摩利支菩薩を供養せんと欲はば、應さに金或は銀、或は赤銅或は白檀香木、或は紫檀木等を用ひて摩利支菩薩の像を刻み作るべし、天女の形の如くにして、長け半すばかり、或は一寸・二寸已下なるべし、蓮花の上に於て或は立ち或は坐す、頭冠・瓔珞を以て種種に莊嚴し、極めて端正ならしむ、左の手に天扇を把る、其の扇は維摩詰前の天女の扇の如し、右の手は垂れ下し掌を揚げて外に向へて五指を展べ、與願の勢に作せ、二の天女あり、各の白拂を執て左右に侍立す、此の像を作りて或は頂上に戴き、或は臂上に戴き、或は衣中に置くに、菩薩の威神の力を以て災難に逢はず、怨家の處に於て決定して勝つことを得、鬼神・惡人も能く便りを得ることなし。若し驗を成じ、

摩利支天の眞身を見、勝願を求めんと願はゝ、此の陀羅尼を誦すること十萬遍を滿し、法に依て曼荼羅を建立して、摩利支菩薩の像を畫いて壇に安置し、種種に供養し並に護摩火壇を作らば、摩利支天女必ず其の身を現じ、所求の勝願決定して成就し、心の至らざるを除かん。佛、諸の苾芻に告げたまはく、我れ當來惡世の、苦難恐怖の有情の爲めに、略して摩利支天の法を說く、此の菩薩には大悲願ありて、常に苦難恐怖の處に於て諸の有情を護り、天龍・鬼神・人及び非人・怨家・惡獸の、能く害をなす所あらしめず、汝當さに受持して廣宣し流布して有情を饒益すべし。諸の苾芻等及び天龍八部一切の大衆、佛の所說を聞いて皆な大いに歡喜し、信受奉行しき。

佛說摩利支天女經

㊇水天

(二)壇中に鑁(バン)字あり、變じて甘露水と成る、其の水の上に波羅(バラ)字あり、龜と成る、其の上に縛(バク)字あり、變じて龍索となる、龍索變じて水天と成る、其の身淺綠色なり、右の手に刀(タウ)を執り、左の手に龍索を持す、頭冠(ヅクワン)の上に五龍あり、后妃天女諸大龍王等、悉

(二)壇中云云　道場觀。

く圍繞せり云云。

○召請印明大鈎召　○種子　烏駄迦　或は縛　○三昧耶形　龍索或は如意寶珠　○印内縛して二風を立て餌に拄へよ、索印と名く云云之を用ふ。

○又た云く、右の手は拳に作りて腰に安き、左の手は拳に握り空は掌中に入るること勿れ、風は直く竪て中節を少しく屈すと文り。　眞言に曰く　唵縛嚕拏野娑嚩二合賀　○又た云く　唵阿(アン)播鉢多曳(バタエイ)莎訶

護摩軌に云く　西方の水天は水中に住して龜に乘る、淺綠色なり、右の手には刀を執り、左の手には龍索を持す、頭冠の上に五龍あり、四りの天女妙花を持せりと文り。

供養十二天軌に云く不空　水天喜ぶ時二の利益あり。一には人身渴せず、二には雨澤時に順ふ。此の天嘆る時に亦た二損あり。一には人身乾渴し、二には器界旱魃して萬物乾き盡すと文り。

傳に云く、此の天を供せんと欲はば、青の布を以て壇敷となし、綠色の糸を以し壇の中に置いて之を修す、最も秘說なり。

陀羅尼集經に云く　白檀を以て水天を刻作せよ、其の像身高さ五寸なり、天女の形に似たり、面に三眼あり、頭に天冠を着し、身に天衣を着し、瓔珞をもて莊嚴し、兩の手を以て如意寶珠を捧ぐ、身の高さ二寸半に作ることも亦た得、此の像を作り已て木函の內に安き、錦囊に盛れ、右の臂に繫けよ、諸願悉く隨はん。次に身印を作れと文り。

身印に曰く　起立して脚を並べ合掌して眉間に當て、二頭指を屈して二大指の頭を押す、此の印を作れば水天の身現せん秘に云く、後の眞言を用ふべきか。

同じき經に云く　當さに從廣四肘の水壇を作り、壇に四門を開け、其の壇の北面に水天の座を安き、十六盤の飲食を安して供養し薰陸香を燒く。呪師は洗浴して新淨衣を着け面を北に向けて坐し、呪を誦すること一千八遍を滿足せば祈雨先づ得ん。若し水中に入て此の印法を作すに、水を履むに地の如くならん。

○印　兩手の小指を以て頭側相ひ博げ、二無名指は小指の後に在き指心相捻す、二中指また然り、二頭指は拽して二中指の背の第一の節の上を捺せ、掌を仰けて狀水を掬する法の如くし、二大母指を以て各の食指の側に附け、大母指來去せよ、呪に曰く　水天野名　跢姪他(タニヤタ)二鳥駄去迦(キヤテイハナム)、提婆那二瑾醯瑾醯三莎訶四

支度　先づ供物を辨備せよ、所謂る青色の幡二流を壇の左右に之を立て、青色の糸を

壇の中心に之を置く、五穀の飲食十六盤並に汁・菓子等例の如し、壇の四面に之を備ふ、燒・閼・塗・花・燈・例の如し（但し薫陸香を以て燒香となす）尊像は南に向け、行者は北に面す、其の壇は四肘若しは三肘なり（青色の壇敷の布あり。）

或る說　形像は赤色又は紅葉色、左の手には花を持し上に星を安き、右の手には劍を持す。

形像は肉色にして左に索を持し首に七龍あり、右の手は腰を押す、形像は肉色白黃色亦たは赤色といふ、右の手に索を持し首に九頭の龍を安く。

㊈地天供作法

○先づ供物加持　小三古印を作り眞言は枳哩枳哩（キリキリ）廿一反　○次に同印を以て寺字を加へて誦す廿一反　○次に地天印眞言　○次に驚發地神偈、三股を取て抽擲す。○次に地神勸請頌（金剛合掌）唵沒馱（ボ）、每底（ヂ）里縛曰羅、羅乞叉（アラカム）三七反　○次に如來拳印　唵僕欠三反　當年月日姓丸居住の由祈願す。　○次に表白　○次に發願　○次に四弘　○次に心經三反　○次に祈願　○次に有爲法（誦すべし）空觀に入るべし。　○次に地天眞言百反　○次に如來慈護眞言百反　唵母駄摩訶妹奈羅（マイタラ）阿乞灑（アンキシャウム）吽　○次に大日寶號百反　○次に觀音寶號　○次に地天寶號　○次に祈願　○次に三力　○次に廻向　○次に發遣　唵縛曰羅保乞叉穆。　○汝天親護者　於諸佛導師　修行殊勝行　淨地波羅蜜　如破魔軍衆　釋師子救世　我盡曼荼羅。

已上土公供作法、貞觀寺僧正御傳。

㊈瑜魔王供次第（師說に云く、亥の處を以て之を供すべし。）

○供物を辨備せよ、所謂る五穀の粥（堅く調ふるを以て吉となす、但し蘇蜜に粥を加へ入る、粥に香花水を加ふべし、又た傍に菓子を挿む。）壇の上に壇敷並に散花（例の如し）尊像は南に向ふ、其の壇は四肘若しは三肘（處の便宜に隨ふべし。）又た閼伽一前を儲けよ、並に飯（アツモノ）・羹・菓子・燈明、各の二坏、五穀の粥の上に鴈燭を插んで位に隨て次第に之を立てよ。（前の供養の時之を行ず。）　○次に着座　○次に三部・被甲護身（常の如し）　○次に加持香水等（常の如し）　○次に表白・神分等（常の如し）　○次に三部心印・護身等（常の如し）　○次に地界　○次に墻界

○道場觀　壇中に𤙖字あり、七寶莊嚴の宮殿と成る、殿の內に曼荼羅壇あり、其の中央に焰字あり、變じて壇荼の印と成る、印變じて焰魔法王と成る、身相肉色にして左の手には人頭幢を持し、右の手は與願なり、黃豐牛に乘る、左右前後に后妃婇女、太山府君、五道冥官等眷屬圍繞せり。此の觀を作し已て、穆欠の眞言を誦して七處を加持す。

○次に小金剛輪　○次に送車(二)路　○次に請車輅　○次に大釵召但し眞言の末に發摩耶醯醯哂の句を加ふ。　○次に虛空網　○次に火院　○次に閼伽　○次に獻座但し二の意あり。一には水牛座、二には荷葉座。

○印　虛合して地・風を內に入れ、背相着け空を屈して風の上より大指を越ゆ。　○眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南、縛矢皆縛娑嚩二合多野莎哥

○次に后印普印　眞言に曰く　歸命沒哩二合底野二合吠娑婆二合賀引　○次に妃印憙の手の五輪を垂れて健吒の相にせよ、同じく鈴印、左は腰に安け。　歸命、摩哩怛野吠莎哥　○次に太山府君印普印　明に曰く　歸命、質怛羅二合矩跛多二合野莎哥　○次に五道大神普印明に曰く　唵閻摩囉閣二合鳴揭囉鼻利耶二阿揭車、娑縛二合賀。　○次に司命普印明に曰く　伺命伺命多覩多覩、唵多本尼耶、莎哥　○次に司祿普印明に曰く　已者已者毘迦良、莎哥　○次に擊吉尼

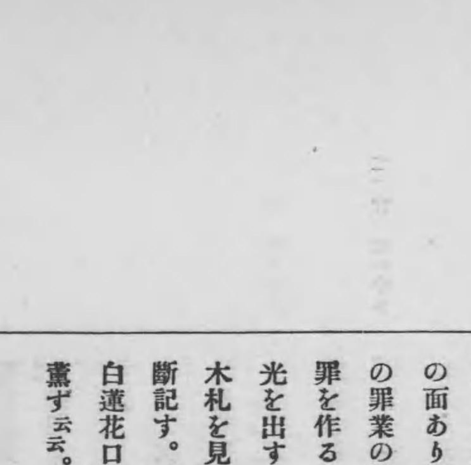
左の手を舒べて面門をして舌を出して掌に附けしむ、人の血を食する勢の如し。眞言に曰く　歸命頡唎二合訶、莎哥　○次に遮文荼印定の印を仰けて拘に作れ、胸の上に當てゝ想へ、髑髏を承くるの形の如しと、惡の拳は膝に安け。　歸命護嚕護嚕左門擊莎哥　○次に成就仙普印明に曰く　歸命、質怛羅二合矩跛多二合毘那夜迦二小・二無名指を以て鉤して內に向へ、二中指を以て竪て相柱へ、又た二風を以て各の中指に附け、二大を以て頭指の側りに附け近づけて五處を加持せよ。明に曰く　唵摩訶誐擊波多曳莎哥　○次に若し諸神呪を用ふれば、右の手拳にして風を舒べ、頭少し屈して之を召け。明に曰く　唵、嚕迦嚕迦、莎哥　○次に五供養印明常の如し　○次に事供但し粥の上に薦燭に火を燃けたり、位に隨て次第す、位ごとに各の眞言を誦して之を供するのみ。　○次に讃　○次に普供養印眞言但し觀念は口傳にあり　○次に三力・祈願・禮佛別にあり

○次に焰摩天印をもて四處を加持す　○次に念誦　○次に般若心經三卷

○次に後供養　○次に讃・普供養・已下の作法は例の如し。　○次に發遣　唵嚩曰羅二合穆乞叉莎哥を彈指せよ。

或る抄に云く　行者若し是の法を修せんと欲はば、先づ是の王の五變の身並に其の本(二)官一一の緣起を知るべし。其の五變とは、一には焰羅法王、是れ卽ち本號なり、二には死王、三には黃泉國善賀羅王、四には斷罪忿怒王、五には檀拏少忿怒王。本宮は鐵圍山の北地中にあり、是れ卽ち冥道宮なり、五萬の眷屬而して圍繞を爲す、宮の中

庭に墳拏憧あり、其の頭に一少忿怒の面あり、王常に其の面を見て人間の罪業の輕重善惡を知る、人間に重罪を作るの者あらば、其の口より火光を出す、光中黑繩踊出して驚覺し木札を見るに其の姓名を知り、之を斷記す。又た善を作すの者あらば、白蓮花口より開敷し、其の香普ねく薰ず云云。



◇大山府君

○種子 ㊀ ○三昧耶形 人頭仗 ○道場觀 ○印金剛合掌 眞言に曰く 唵、只怛羅、矩哞拏(ハンダヤ)野莎訶。

◇拏吉儞(ダキニ)

○種子 ㊀ ○三昧耶形 血器 ○道場觀 ○印左掌を少し張らせ、舌頭をもて之に觸れよ。眞言に曰く 唵、頡唎(キリカ)訶、入莎訶

◇星宿供

上堂の儀式常の如し ○次に着座 ○次に普禮 ○次に塗香常の如し ○次に淨三業・三部・被甲・常の如し ○次に加持香水 ○次に加持供物三古印、吉里吉里眞言 ○次に施甘露印明常の如し ○次に覽字觀 ○次に淨地 ○次に淨身 ○次に金剛起 ○次に表白・神分 ○次に祭文用否は時に隨ふべし ○次に勝願 ○次に金剛力常の如く金を打つ ○次に發願 ○次に五大願・三昧耶 ○次に道場觀如來拳印を結ぶ。 ○次に大金剛輪 ○次に地結 ○次に四方結

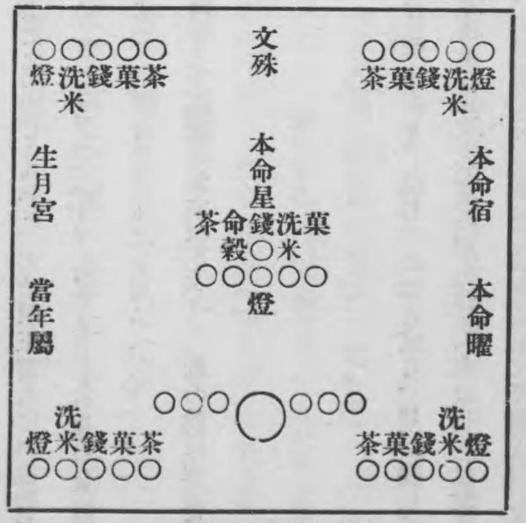
法界宮の中に大曼荼羅壇あり、壇の中に師子座あり、座上に欝字あり、變じて八葉の蓮花と成る、花臺に引字あり淨月輪と成る、月輪中に引字あり、智劒と成る、智劒變じて大聖文殊と成る、首に八髻を戴き身は鬱金色なり、右の手には智劒を執り、左の手には青蓮花を執る、上に智杵を立て大光明を放ちて十方世界を

照す、此の光の中に無量の星宿悉く顯現す、卽ち文殊變じて妙見尊と成る、其の前に七の荷葉座あり、上に嚩字あり、變じて北斗七星と成る、東南の角に荷葉座あり、上に嚩字あり、變じて本命曜と成る、東南の角に荷葉座あり、上に嚩字あり變じて當年の屬星と成る、西北の角に荷葉座あり、上に嚩字あり、變じて生月宮と成る、東北の角に荷葉座あり、上に嚩字あり、變じて本命宿と成る、各の身相具足し光明映徹して、無量の星宿前後に圍繞せり、七處加持せよ。唵僕入欠。

○次に大虛空藏　○次に金剛輪　○次に請車輅　○次に大鈎召　○次に馬頭印明は常の如し。若しは無能勝　○次に網界　○次に火院　○次に大三摩耶　○次に閼伽　○次に荷葉の座左手は拳に作りて腰を押し、右手は五指を申べて肩上に掌を仰けよ。眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南惡　○次に文殊印明常の如し　○次に諸曜印明　○次に諸宿印　○次に五供養　○次に事供　○次に讃　○次に普供養　○次に三力並びに祈願　○次に禮佛　南無摩訶毘盧遮那佛　南無釋迦牟尼佛　南無曼殊師利菩薩　南無妙見菩薩　南無北斗七星　南無七曜九執　南無十二宮神　南無廿八宿　南無本命元神三反　南無諸宿曜等　南無金剛界一切諸佛

南無大悲胎藏界一切諸佛菩薩摩訶薩　○次に佛眼・佛母常の如し　○次に本尊加持　○次に加持念珠　○次に正念誦　○次に散念誦　○次に佛母加持　○次に後供養　○次に讃　○次に普供養三力祈願　○次に禮佛　○次に廻向　○次に解界　○次に奉送　○次に三部・被甲・護身等常の如し　○次に銀錢等を燒く法身の偈、若しは心經等を誦す云云

北斗道場觀　壇の中に噁字あり、變じて七寶莊嚴の宮殿と成る、其の中に訖里字あり、變じて寶蓮花臺と成る、臺の上に勃嚩吽字あり轉じて金輪佛頂と作る、其の後邊の左右に七の荷葉座あり、座上に各の嚩字あり、卽ち北斗七星と成る、前に荷葉の上に土星あり、次に日・月・火・水・木・金・羅・計の十



二宮神、廿八宿並に諸の眷屬等、重重に周迊せり、云云　馬頭明王若しは無能勝を以て辟除結界となし、振鈴の次に蠟燭供の事を行ず（承仕の行ふ事なり。）燭を立て了て先づ金輪佛頂印、八供養印を結び、次に召北斗印並に諸曜宿等の印之を用ふべし。

○次に獻事供　○正念誦（先づ金輪次に北斗分限畢りて護摩を爲すべし云云　此の說は本說に非るのみ。

○○妙見菩薩

（一）樓閣の中に（二）荷葉座あり、座の上に蘇字あり、變じて星形と成る、星形變じて妙見菩薩と成る、左の手に蓮花を持す、花の上に北斗七星の形を作る、右の手には說法の印を作り、五指は並べ舒べて上に向へ、大母指を以て頭指の側を捻して手掌を外に向へ、天衣・瓔珞・珥璫・環・釧をもて其の身を莊嚴せり、五色の雲の中に結跏趺坐し、眷屬圍繞せり云云。

○印　右の手は施無畏に作り、大指を屈して身に向へ之を招け三度、左の手は金剛拳に作りて臍に安け。眞言に曰く　唵目佷帝、屠蘇吒阿惹密吒烏都吒、具耆吒、波賴帝吒耶彌若吒、烏都吒、拘羅帝吒、耆摩吒、莎訶

（一）樓閣云云　道揚親。（二）荷葉座　朱書に、蓮花座に作る

○奇妙心眞言に曰く　唵、蘇涅里二合瑟多、娑嚩二合賀

○尊星王心呪　心譽僧正傳云云　唵、摩訶室利拽、涅吠、娑婆賀

○白衣觀音　二手內縛して二風を合せ立て、少しく開き、二大を並べ立てよ云云　唵涅吠帝涅吠帝牟尼羅縛悉儞莎訶。　又た云く　○印（二手內縛して合せ、二頭指四かに屈せよ。）眞言に曰く　曩莫羅怛曩、怛羅夜野、二曩莫素摩、薩羅嚩、諾訖舍怛羅、羅惹耶、者覩地波、阿路迦羅野怛姪他、唵弩摩底跛怒摩底、薩賓儞佉上細、莎訶。　○又た云く　唵嚩路枳多羯嚕馱摩耶羅羅吽莎訶。

○葉衣の印（左は繩索印、右は施願なり）眞言に曰く　唵波羅馱、捨波哩吽發吒

○虛空藏の印（合掌して水指を縛し、風指は實形の如し。）眞言に曰く　唵、阿伽沙一迦羅伴野、二唵阿哩三伽糜哩四母梨、五娑婆賀。

若し人、福智を求めんと欲はば、當さに此の菩薩に歸依すべし、日・月・星宿は皆な虛空藏の所變なり。

○文殊印　虛心合掌して、二火指を以て各の二水の甲を押し、二風を屈して空の端を捻せよ。眞言に曰く　唵、引阿（引入惡摩）昧引囉吽佉左洛。

○破宿曜障印（堅固内縛して、二空を並べ立てよ。）眞言に曰く　唵薩羅嚩諾乞刹怛羅、二合三麼曳、室哩曳、扇底迦倶嚕、娑嚩二合賀

○本命星供作法（淳祐内供次第）

○先づ供物を辨じ備へて壇上に安置し了る。　○次に香水を加持して供具上に灑ぐ。　○次に供具を加持して定印を作り、觀に入る。地に𑖨字あり、熱中極熱、赤中極赤なり、此の字は、赤色の火光を放ちて一切の不淨を燒いて淸淨ならしむ、此の淸淨瑠璃地の上に𑖦字あり、黃色の光を放ち、一の方壇を成ず、壇の上に三の荷葉座あり、座の上に𑖤字あり、此の字變じて三摩耶身と成る。三摩耶身とは星形なり、此の三摩耶形變じて所請の星體と成る、星體とは天象に似たり、天象とは菩薩に似たり、壇の周圍に、寶樹・寶憧・幡等の莊嚴あり、是の如く觀念し了る。

○次に大鈎召印　眞言を以て本宮星を請來し、眞言の末に星の名を呼ぶ、江伊二合計伊二合曳支娑嚩賀。　○次に四明。　○次に立ちて三度禮敬す。　○次に祭文を讀み、重ねて奉讀し了り禮し畢るといふべし。　○次に祭文、銀錢等を燒き了る。　○次に星

息災眞言に曰く　薩嚩奈句薩三摩曳師里曳剪知迦羅娑嚩賀百遍を誦す。　○次に六種眞言

誐誐曩云云　○次に三力偈　○次に施主祈願の詞　○次に必經一遍　○次に廻向　○次に發遣　○次に法身偈を誦し了る。

○星位次第　中北斗星　左方本命宿　右方當年所屬星　羅睺星一歳十百　鎭星二歳　辰星三歳　六伯星四歳　日曜五歳　熒惑星六歳　計都星七歳　月曜八歳　歳星九歳

○本命供祭文（法身偈）　諸法は緣より起り　諸法は緣に從て滅す　如來是の因を說きたまふ　是れ大沙門の說と。

紙錢の數は人の歳に隨ふべきなり。

謹請北斗貪狼星　某星　謹請生日直本命　某宿　謹請當年所屬　某星

維に　謹んで仙菓・香茶・燈燭・銀錢・龕(二)差の奠を以て、敬て本命元神北斗某星本命某宿、及以び當年所屬の某神星を祭し、一拜し恭敬して供す。伏して惟るに人の本命は主に元神を以てす、命の窮め通ずるに、屬に星宿を以てす、天道の福善神の靈誠に感ずる故に、盡く潔齋し、以て薄奠を致す。伏て願くは元神を以て我を加護し、伏て願くは命宿必ず福壽を增したまはんことを。肅み敬て白し、深く伏して惟みて尙饗す。

國譯七卷鈔七

(二)差に作る。一本に龕

或る本に。仰ぎ願くは護念を垂れ、而も災天を攘除したまへ、仰ぎ願くは護念を垂れ、而も禮壽を增長したまへ、肅み敬て白し、深く伏て惟み尙饗す。一拜し恭敬し供すと。

本命供次第　元杲僧都次第　二本命宿

○先づ浴手嗽口、淨三業・三部・被甲等。　○次に辨供、

花	茶	菓
香	明	菓
塗	米	菓

謂く閼伽・塗香・花・燒香・銀錢　一本命元神（北斗星）　錢年數に隨ふ。

年に隨ふ時菓・命穀年に隨ふ茶煎等三前、

北斗・本命・當年屬の料　○

次に着座し懺悔普禮す。　○　三當年屬星

次に塗香　○次に淨三業・三部・被甲。　○次に加持香水（軍荼利の心呪を用ひて廿一遍之を加持す。三結印。）

鍐字各の廿一遍　○次に自身並びに供物、及び四方四隅等を灑淨す。　○次に加持供

物（吉里吉里の呪を用ふ。）　○次に甘露眞言を以て之を加持す。　○次に三禮

○次に事由を表白す。　○次に祭文を讀む。

謹んで　諸星宿曜宮等に啓す。夫れ以れば人偏へに乾坤の間に生れ、群品（グンヒン）陰陽の氣を受く。尊卑貧富は是れ業因の償ふ（つぐの）所なりと雖、禍福榮衰は猶ほ是れ宿曜の宰（つかさど）りたまふ所なり、是を以て陽陰五緯（井ノヘニ）暗隱雨將は二六宮（キウ）の都に至（いた）り、四七舍の驛（ウマヤ）に轉ず、或は雲上の變化を示し具さに塵下（カ）の災祥を告ぐ、天道一圖なれども普ねく萬類に被らしめ給ひ、而も生日行年誰か好惡なからむ、好宮好曜に生るゝ者は、自ら福祐あり、惡宮惡曜に屬する者は自ら禍殃を招く、然るを凡夫識ることなくして妄りに憂喜を爲す、幸ある者は偏に自然の榮（サカエ）を謂ひ、不運の者は唯だ薄命の歎（ナゲキ）を致す、設ひ惡宮に生るゝと雖も好曜ありて我を助く、何ぞ愼まざる。吉宮なれども凶曜あるものは己を害するをや、某甲宿因多幸にして適（たま）〻人間に生ずれども、自性愚暗にして愆失（ケン）多きことを恐る、天に跼（せく）まり地に踧（ぬきあし）して常に天地の正理を念ふ、朝に懼れ暮に惶れて、遙かに日月の眞を仰ぐ、眞然として物怪を屢〻示し夢想紛紜す、卜筮の告ぐる所、愼まざる可からず、加以らず今年の遊年其の方（四方四隅）に周到し、曜宿巡りて其の曜（九曜）に當る、榮衰禍福盡んぞ禱て來去せん哉。伏て惟るに曜宿は皆な悉く大日如來界會の分身、迹を萬邦に垂れ、化を六道に施す、古人の所傳須らく歸敬を致すべし、然れば則ち禍厄を未然の外に攘（はら）ん

が爲めに、福祐を意樂（クウ）の內に保たんが爲めに、本命の日を待迎して、謹んで煎茶・香花・銀錢の禮奠を備へ、恭くも事由を執曜等に啓請す、伏て願くは玄かに鑒みて必ず降臨を垂れたまへ某甲誠に惶れ誠に恐れ謹んで啓す。

○次に神分　○次に五悔　○次に五大願　○次に勝願　○次に大金剛輪

○次に地結　○次に四方結　○次に如來拳　唵僕欠　○次に大鉤召　○次に虛空網

○次に火院　○次に閼伽　○次に荷葉座（右手は五輪を舒べ開き輪端を垂下す）歸命惡

○次に塗香　唵伊舍那也賢淡莎哥　○次に花　唵伊舍那也普須含莎哥　○次に燒香　唵伊舍那也都普含莎哥　○次に燈明　唵伊舍那也旭普含莎哥　○次に飮食（例の如し）

○次に飽滿　歸命鑁莎哥　○次に祭文を讀む。

年月日某甲此の淸淨地に於て寶座を莊嚴し、謹んで禮奠を儲け、尊星等を供し奉る。抑〻人に二厄あり、定業と中夭となり。定業とは佛力の拘はる所に非す、禱て而も處りなし、中夭とは法驗の資する所、愼んで以て攘ふべし、而も世俗は辨（わきまへ）ず、愚者は混思して定業に禱て則ち其の驗なきを貶し、中夭を愼んで則ち其の効あるを褒む、某甲具縛の凡夫にして而も其の理を識らず、曾に曜宿を恃んで、而も聊か禮奠を獻ず、仰ぎ願くは北斗大神、本命屬星、諸の執曜等、殊に慈愍垂れて所設の供具を納受したまひ、行年三十九を加へて衰を未然に解脫し、本命七十(一)三に臨んで厄を速疾に消除し、死籍を削り北宮に於て生名を南簡に錄し、四道開通して百殃消滅し、久しく壽命を保ち永く星宮を奉じ、常に榮耀を蒙りて彌〻神恩を謝せん某甲再拜す。

○次に普供養　○次に讃　阿引演都引泥嚩左誐素羅一緊那羅那、羅乞灑迦羅二合那野、二鉢羅二合嚩羅二合達磨二合糞里二合多、地伽羅二合尾達磨左鉢羅二合捨摩、操企也四儞銘二合多、部多銘多婆羅二合迦捨夜、五怛儞、賀室羅二合摩拏也駄引斡八字、

○次に三力偈　○祈願　○次に禮佛大日、文殊、觀音、大勢至、虛空藏、北斗大神、本命元神、當年屬星、○次に念誦大日、文殊、

○次に葉衣觀音の眞言に曰く　唵婆羅駄捨波哩吽發吒莎哥　○北斗眞言に曰く　唵颯駄（タシ）齒曇耶、幡惹（ハンジヤビ）毗惹（ジヤヤ）耶、染（センボ）菩駄摩（タマ）、素波二合旭曇（ヒナウ）、某甲羅訖（ラキ）山二合波嚩（ハハト）都、娑婆賀

○次に本命眞言七星等　○次に當年所屬九曜等　○次に破宿曜障眞言　唵、薩嚩（サラバ）二駄枳捨陀羅（シヤタラ）三摩曳（サムマエイ）、室哩曳（シリエイ）、扇底迦（タカ）矩嚕（クロ）、莎哥。　○次に佛眼呪　○次に後供養（燒香、花、燒香、飮食、茶、燈明）　○次に供養眞言上の如し　○次に讃上の如し　○次に三力　○次に禮佛　○次

(一) 三に作る。一本に二

(二) 駄枳捨　曩乞叉に作る。又は

に心經　○次に佛眼眞言　○次に閼伽水　○次に祭文。謹んで

座上の北斗大神、本命元神、當年屬星に啓す。某甲諸の執曜等、上府は政繁く下土は

事多し、降臨良く久くして夜更稍く深し、洪恩を弟子の處に留め福壽を施主の情に任せ

む、見聞觸知所屬の因緣、擧首平然として各の圓滿せんことを願ふ、仰ぎ願くは諸の

星宿等、各の本宮に還り、本命日毎に請に隨ひて降赴したまひ、神魂爲めに安く元辰

自在ならしめたまひ、長生不死にして劫石に競はしめ、一切の善願、意の如く滿足せ

んことを。再拜再拜。

○次に撥遣眞言印　右手を以て拳に作り頭指を彈せよ三反　眞言に曰く　唵縛日羅母乞叉穆　○次に三部・被甲等。

○諸尊形色印契眞言

○一字頂輪王並に召北斗七星印　虛心合掌して二大指を以て二無名指の甲を捻し、二中指・二小指蓮葉の如くし、二頭指は少し開き屈して來去せよ。

○頂輪王眞言に曰く　曩謨三曼多怛羅怛羅鉢左羅吽。

○召北斗眞言に曰く　曩謨三曼多、那羅曩嚧醯枳頗伊、賀伊、那伊、迦伊、羅伊、謨

羅多羅、迦羅舍、娑婆賀。

○又た招請北斗印　左拳腰に右拳は舒べ頭指來去す、大眞言を用ふ。　北斗七星眞言　唵、颯多、而曩野、伴惹密惹

野、染普他摩、娑嚩抳曩、羅訖山婆嚩都、娑嚩賀。　○北辰の明に曰く　唵蘇底

哩二合瑟吒二合莎哥。　○又曰く　唵沒馱莎哥引。　○又云く　唵馱羅娑縛賀。

○北斗七星印　先づ合掌して十指相ひ着け、二風と二空と極めて之を相ひ開く云云。

又內に相ひ及へて二空を相ひ及へて二水の甲を捻し、二火を立て合せて針の如くし、二

地・二風開き立てゝ五胡杵の如くす。　又た左右の火・空相ひ係けて之を捻し、二水を

合せて前面を指し、二の地風を張り立てよ、即ち成ず。

○九執總印　二手合掌して二大指を立つ。眞言　唵蘗羅醯入縛里野、鉢羅波多儒底、羅摩耶、娑縛賀。

○又た勸請九執印　虛合して二空を並べ立てゝ二風を舒べ開いて來去せよ、同じき眞言を用ふ。　○又た九執曜天印　堅固合掌して二空を相並べ、二風を直く竪て各の本を舒べ開き立て來去せよ云云　○廿八宿印　二手合掌して二大・二中指を相ひ及へよ、眞言　唵曩乞及多羅涅利儒那儞曳娑縛賀、

歸命、引唵、阿瑟吒二合尾孕二合設底南、諾乞察二合怛羅二合毗藥二合儞寧逸の反儒那顎曳摘計

吽、惹娑縛賀。

○又た二十八宿印　堅固合掌して二空を並べ、直く立て心に當て、二空を以て之を召く云云　○七星形像　北斗延命經の圖像は、皆

な女形に同じ、七星如意輪曼荼羅は或は菩薩形或は女形相を雜ゆ。　○七曜　佛眼曼

茶羅は孔雀經曼荼羅と之れ同じ、胎藏曼荼羅七曜形は不同なり。○羅計　胎藏曼荼羅は孔雀經の曼荼羅と之れ同じ。

廿八宿　胎藏の中、其の形ち一に同なり、但し持物或は左或は右なるを別と爲す、孔雀經の曼荼羅の中、其の形ち各別にして世間流布の像に似たり。

○十二宮　胎藏は孔雀經の曼荼羅と之れ同じ。○

○七星　吠　貪狼星眞言卯地金合して額に當つ。唵、陀羅尼、陀羅尼吽娑嚩哥。　又た云く、都迷都迷娑縛賀。　東方最勝世界運意通證王佛。○又た云く千手。

多羅　巨門星眞言丑地庚地面に先印を當つ。唵、俱魯陀羅吒娑婆哥。○又た云く　歸命、多羅多羅、賀尼、莎哥。東方妙寶世界光音自在佛。○又た云く馬頭。

迦　祿存星眞言辰地子地左眼に當つ同じ。　唵、波羅多伽、吽莎哥。○又た云く　伽伽佐哩哥哥耶利莎哥。　東方圓滿世界金色成就佛。○又た云く不空羂索。

鉢羅　文曲星眞言亥地申地鼻に當つ同じ。唵伊利陀羅吒、吽莎哥。○又た云く　唵婆帝那吉那盧莎哥。　東方無憂世界最勝吉祥佛。○又た云く十一面。

多嚕　廉貞星眞言亥地壬地右眼に當つ同じ。唵、吐吒羅尼、唵莎哥。○又た云く　唵那羅那羅謨羅含莎哥。　東方淨住世界廣達智辨佛。○又た云く水面觀音。

曩　武曲星眞言亥地寅地口に當つ同じ。唵、誐都魯、吽莎哥。○又た云く　唵那婆吉那莎哥。

東方法意世界法海遊戲佛。○又た云く、阿魯力迦觀音。

縛　破軍星眞言未地頭に當つ同じ。唵、婆娑陀、唅吒吽莎哥。○又た云く虛空藏。

東方瑠璃世界藥師瑠璃光佛。○又た云く

○九曜　阿　○日曜　○日天印　○破軍星　○歲德　○虛空藏　○每月廿七日降下丑寅

曩莫、羅怛曩二合怛囉野引耶娜莫素哩野、薩嚩曩乞灑二合怛羅二合羅惹野、唵引阿謨伽、寫名位設底、去莎哥。火羅圖に云く　唵阿儞底耶、莎哥。

捨　○月曜　○月天印　○白色衣　○貪狼星　○千手　○每月廿八日降下大陰戌亥

唵戰上怛羅、二合曩引乞灑二合怛羅、二合囉惹野名位設底、莎哥。圖に云く　唵、戰捺羅野、莎哥。

○印、右手は胎藏の拳に作り腰に安し、左手の五指は隱なく並べ立て、少しく屈して臂を擧げ肩を過ぐ。○又た云く　唵蘇摩曳莎哥。

刕　○火曜　○火天印　○赤色衣　○武曲星　○阿魯迦觀音　○大將軍　○每月十九日降下午

唵、引阿誐羅迦、阿魯儗野、名位莎哥。圖に云く　唵摩利多莎哥。　又た云く　阿蘗那曳莎哥。

母　○水曜　○水天印　○黒色衣　○巨門星　○水面觀音　○歳形　○毎月廿一日降下子　唵引母馱、曩乞殺二合怛羅、二合娑嚩二合引賀。○又た云く　唵、嚩嗚拏野、莎哥。　圖に云く　唵倶悉陀、他姪他、利他產、紫儞帝、莎哥。○又た云く　唵蘇涅利悉陀莎哥。二羽內縛して二頭指を竪て合せよ。○又た云く　唵部陀曳娑婆哥。

婆羅　○木曜　○鉢印地天印　○青衣　○廉貞星　○馬頭　○大歳　○毎月廿五日降下卯　唵引婆羅二合娑羅訶、薩鉢二合底、曩摩、比跢、嚩囉野、名位摩攞、嚩羅引馱寧、莎哥。　圖に云く　唵、印那羅耶、莎哥。○又た云く　唵蘇涅利悉陀莎哥。二羽內縛して二頭指を竪て合せよ。○又た云く　唵部陀曳娑婆哥。

戌　○金曜印、二羽內縛して二中指を豎へ立て、右の中指は稍〻之を屈せよ。　○禄存星　○歳殺　○白色衣　○不空羂索

○毎月十五日降下酉　唵戌羯羅二合誐駄縛二合引嚕惹野名位室哩二合迦哩莎哥。　又た云く、ゔ蘇伽伽耶莎哥。　大伯圖に云く　ゔ蘇伽伽耶莎哥。

（一）二合の下一本に羅嚩の二字あり。

（二）作に作る。一本に儞

捨　○土曜地天鉢印　○黄色衣　○文曲星　○十一面　○歳破　○毎月十九日降下申　唵引捨抳殺二合怛羅、二合跛羅二合訶、摩曩、引嚕婆野名位普瑟底二合迦哩、莎哥。　圖に云く　贊爾利嚩曳耶莎哥。○又た云く　唵、贊爾、嚩曳、莎哥。　又た云く　唵贊日利曳莎哥。

囉　○羅睺　○七曜惣印　○徴青色衣　○ゐ黄幡　○毎月八日降下。唵、囉引戸曩、阿素羅、羅二合惹野、寒麼捨覩、曩野、名位扇底迦哩、莎哥。　圖に云く　唵羅睺蝕利神莎哥。　又た云く唵遏羅虎耶莎哥。　又た云く唵、羅睺曳莎哥。

計　○計都　○印前に同じ　○豹尾　○ヲ毎月十八日降下　唵、嚩曰羅二合計都曩、引曩乞殺怛羅、二合囉惹野、名位吽、莎哥。○又た曰く唵鶏都曳莎哥。

○十二宮眞言一切執曜の印を用ふ。

彌　魚宮八月辰神木位　唵彌那、娑縛賀

毘利　牛宮十月寅神金位　唵毘利沙、娑縛賀

娑縛賀

羊　迷　羊宮九月卯神火位　唵迷沙、娑縛賀

彌　男女宮十一月丑神水位　唵彌陀那、

羯　蟹宮十二月子神月位　唵羯羅迦、吒迦、娑縛賀

縒　師子宮

迦　女宮二月戌神水位　唵迦若、娑縛賀

遮

(一)戍 或はいふ火の字か。

秤宮三月酉神金位　唵兜囉、娑縛賀

縛賀　檀　弓宮五月未神木位　毗利　蝎宮四月申神(一)戍位　唵毗利支迦、娑

摩伽羅、娑縛賀　唵檀蒐莎、娑縛賀　摩、摩竭宮六月午神土位　唵

宿曜經に云く　鳩　宮瓶宮七月巳神土位　唵鳩盤、娑縛賀

正月人馬宮　二月秤虫宮　三月秤量宮　四月小女宮　五月師子宮　六月鯨蟹宮

七月陰陽宮　八月青牛宮　九月白羊宮　十月雙魚宮　十一月寶瓶宮　十二月摩竭宮

○廿八宿　惣印

質　角　唵、質多羅、二合娑囉二合訶　薩　允　唵、薩婆二合底、娑縛二合

賀　毘　氐　唵、蘇舍佉、娑縛二合賀　阿　房　唵、阿紲羅他、

娑囉賀　逝　心　唵、逝瑟吒、娑縛賀　鉢羅　尾　唵、慕羅、

娑縛賀　阿　箕　唵、補魯縛、跛阿娑努、娑縛賀　摩　斗　唵

烏多羅、阿沙弩莎訶　阿　牛　唵、阿訖沙莎訶　失羅　女　唵

失羅縛那莎訶　陀　虛　唵、陀儞瀉莎訶　捨　危　唵、捨多、

毗娑、莎訶　發　室　唵、發羅縛、迦陀羅跛陀莎訶　多　壁

唵、鬱多羅、跛陀羅跛、莎訶　離　奎　唵、離婆底、莎訶　阿

婁　唵、阿說毗儞、莎訶　捨　胃　唵、婆羅尼、莎訶　嚕　昴

唵、基栗底莎訶　嚕　畢　唵、盧喜尼、莎訶　嚕　觜　唵

糜梨伽、尸羅、莎訶　阿　參　唵、阿陀羅、莎訶　阿　柳　唵、

唵、補捺伐蘇、莎訶　鉢羅　鬼　唵、布灑莎訶　鉢羅　井

阿失麗沙莎訶　摩　星　唵、沙伽莎訶　發　張　唵、發魯縛頗

勒窶捉莎訶　刺　翼　唵、烏多羅、頗勒窶、莎訶　訶　軫　唵

訶莎多、莎訶

○二十七宿三九祕要法

初九　畢・觜・參・井・鬼・柳・星・張・翼・

命・菜・衰・安・危・成・壞・支・親・

二九　軫・角・允・氐・房・心・尾・箕・斗・

業・菜・衰・安・危・成・壞・支・親・

三九　女・虛・危・室・壁・奎・婁・胃・昴・

胎・榮・衰・安・危・成・壞・支・親・

此みな所生の日直宿を以て命と爲す、即ち命宿を以て第一と爲す、次に榮宿又た次に衰及び安・危・成・壞・支・親・を以てす、是の如く九宿を一九法と爲す。其の次に業宿を以て首と爲す、以下は前に准ず、二九の法と爲す。其の次に又た胎宿を以て首と爲す、以下も亦た前に准ず、二九の法と爲す、廿七宿を最も祕要と爲す。注に云く、假使(たと)へ人あり、二月五日を以て生ずるをば、畢宿に屬す、卽ち畢を以て命宿と爲す、則ち次の觜を以て榮宿と爲し、參を衰宿と爲し、井を安宿と爲し、鬼を危宿と爲し、柳を成宿となし、星を壞宿と爲し、張を支宿と爲し、翼を親宿と爲し、軫を業宿となす、次次は上に准ず、女を胎宿と爲す、次次は上に准ず、是れを三九の法と爲す、之を推して知らんのみ。

凡そ命胎の兩宿直日には百事を擧ぐべからず、業宿の直日には所作並に得、衰・危・壞宿の直日には遠行すべからず、出入・遷移・買賣凶なり。六害宿とは命・事・意・衆・同・克なり、本命宿に從て數へ第十を事宿と爲し、第四を意宿と爲し、第十六を衆宿と爲し、第十二を同宿と爲し、第十三を克宿と爲す、假如し人あり婁に屬するを命宿と爲し、第四得畢を意宿と爲し、第十得星宿を事宿と爲す、他は此に准ず、之を尋ねて知るべきのみ。

日曜　太陽密　若し人本命に臨まば官を加へ祿を進め善事あり、常に貴人に接引することを得、冬至の日を以て乘黃を用ひて大吉を祭れ。

月曜　大陰漢(名く)　若し人本命に臨まば官を加へ祿を進め、所作通達して喜慶事あり、夏至の日を以て珍玉を以て之を祭れ。

南方　熒惑熒漢(名く)　若し人本命に臨まば、必ず口舌の疾病を生ず、仲夏の日を以て火を用ひて之を祭れ。

北方　辰星晨(名く)　若し人本命に臨まば、主もに口舌の疾病盜賊あり、中冬の月を以て油を以て之を祭れ。

東方　歲星唱(名く)　若し人本命に臨まば、官を加へ祿を進め吉祥萬倍す、中春の月を以て乘黃を用ひて之を祭れ。

西方　金曜太白那吉(名く)　若し人本命に臨まば、哭泣・刀兵の災あり、仲秋の月を以て生錢を用ひて之を祭れ。

中宮　鎮星鶏後と名く若し人本命に臨まば、疾病牢獄を愼め、又た季夏の月を以て菓子を用ひて之を祭れ。

羅睺　蝕神尾　若し人本命に臨まば、官を求めて遂げず、多く病を憂ふ、凶星の(二)盞形之を供せよ。

計都　蝕神星　若し人本命に臨まば疾病を憂ふ、(二)盞形之を供せよ。

但し屬星供の時は、其の曜を右に安じ、本命曜を左に安す。本命供の時は本命曜宿を右に安し、屬曜を左に安ずるなり、純一に北斗を供するの時は、本命及び屬曜に加へ供す、若しは加へ供せざるは人心に隨ふべし、其の中猶ほ加へ供するを吉と爲す、其の時は本を以て右に安すべし云云北斗は是れ文殊師利菩薩の異名なり。

○讃　阿引演都引泥嚩、左誐素囉、緊那、囉那、囉乞㘑迦囉二合那野、二囉鉢二合嚩羅二合達磨二合藥里二合多地伽囉、二合三尾達磨左鉢囉捨摩、操企也、四偏銘二合多、部多銘多婆羅二合迦捨夜、五怛儞賀室羅二合摩拏也駄引帥。

○諸天讃　南謨蘇都底沙哥。　大梵天王・帝釋天主・日天・月天・貪狼星・巨文星・祿存星・文曲星・廉貞星・武曲星・破軍星・七曜・九執・二十八宿・十二月將・三十六禽・閻魔法王・五道の冥官・大山府君・司命・司祿・天神地祇を請したてまつる、皆な來て座に就き我が禮奠を受けたまへ。

金白衣　木青衣　水黒衣　火赤衣　土黄衣

決に云く、日月木は同法、着衣は外人に知らすべからず云云

○命穀命木

貪子　大豆　梧桐　又は黍　栢　栗　杮。

巨丑亥　粟　栗　又は稻　稗　槐　(一)梢栢。

祿寅戌　小豆　楡　又は稻　朴　槐　麥。

文卯酉　大麥　桑　又は黍　小豆　赤小豆　枯楡。

廉辰申　小麥　棗　又た小豆　稻　芥　摩　栢楊。

武巳未　大豆　李　又は栗。

破午　小角豆　杏又は摩　棗　松　橡　小豆　小麥。

五味香。茅香　甘松　薫陸　龍腦　白檀云云。有人云く、茅香は茅の根に似たり、唐物なり、此の國になし。白膠香　沈香。

(一)盞　盞の字か

(二)梢　或はいふ梢か

藥種。白朮 人參 甘草 木蘭。

小野の樣。

	第一北辰	第二本命星	第三羅星
錢	○	○	○
洗米	○	○	○
菓	○	○	○
茶	○	○	○
燈	○	○	○
若は飯			
花	○	○	○
塗	○	○	○
閼	○	○	○
◯			

洗米の時は閼・塗・花等を用ふ、若し五穀の粥の時は閼伽等を用ひず、只だ臍燭三本を粥上に立つ云云

若し中に北辰位に置く時は、即ち是を第一となし、右端は星位二

勸修寺

當年星

錢 燈 洗米 菓 茶 花 塗 閼 燒

七星	本命星	生日
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃
〃	〃	〃

翠火爐

阿闍梨 初夜星出づる時之を供す。

瀧水 塗香

星宿 九曜の中、日月當年屬星は中尊に之を勸請し、中央の座に居らしむ云云。

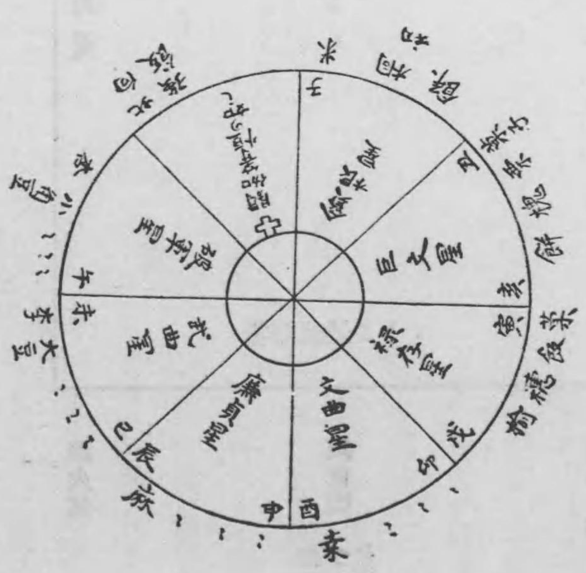
國譯七卷鈔七

二十八宿は生日當さに歲を知らず、惣眞言を用ふ、七星・九曜も亦た此の如し、錢は一連に十なり、十歲には十連宛、三所に各の十連なり。凡そ十歲の人を祈るには三十連なり。或る說に、十二を一連と爲すと云云

星の種子は吽字なり

三昧耶形は星なり。

想ふべし、境中に月



輪あり、月輪の中に引字あり、變じて寶劍と成る、劍變じて文殊師利菩薩と成る、金色にして百千の相好を具足す、執持乘物は本敎の如し、御口より五色の光を出すに、光變じて左右の眼と成り日曜・月曜と成る、身の毛孔より一一の光を出すに、一切の星宿と成る云云故に一切の星宿皆な文殊の所變たり云云

持大(二)景

資大(三)束

不隣子

微惠子

祿會子

貞父子

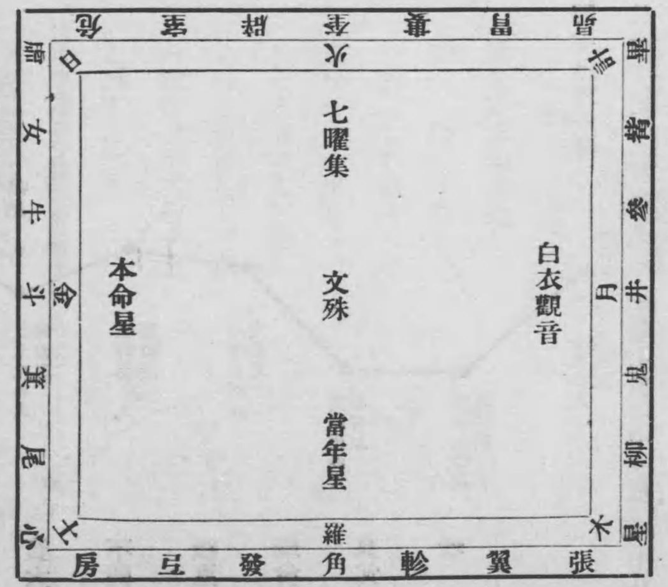
希　子

(二)景に作る。一本に曇

(三)束に作る。一本に來

野寺忠尹の傳

凡そ本命に三種あり。生年七星の中一星北斗なり生月十二宮の中一星　生日曜宿二星



三二四

七曜
廿八宿

二　本命宿　一　本命元神北斗星

三　當年屬星。又た云く　本命坐　北斗坐　屬星坐。

本に云く　已上七帖は僧正御房始め永久五年四月廿二日より八月七日に迄るまで一百三ヶ日、池上の塔下東御房、令長齋の間に於て之を撰集す、時に末葉覺任、座下に祖候し、勘文を引いて定句して了る、仍て之を記す。

寫本に云く　建久二年正月十六日、書寫交點の功を終るなり。申し出る所、法印御房の御本なり。

末葉　行守。

建永元年八月二十一日、太夫僧都御房の御本書を以て交共し了る。

文政八年乙酉春、牛嶋長壽寺本を以て、他をして之を書寫し了る。　謂肝

右七卷抄は豐山能滿院平岡和尙珍什の御書を拜覽して國譯し了る。（編者）

玄證

國譯七卷鈔七　終

國譯澤見抄 第一

○阿閦　○寶生　○阿彌陀　○釋迦　○藥師　○佛眼　○大佛頂　○金輪　○
尊勝　○光明眞言

◎阿閦

○惡屈芻毗耶（アキシュビヤ）、薩怛他蘗多（サタタギヤタ）　○不動金剛（秘なり）　○大圓鏡智阿閦尊　金剛部中諸尊屬

○吽　○五股

(二)壇中に八葉の蓮花あり、蓮花上に哦（ギャ）字あり、變じて白象となる、象の上に尠（アク）字あり、變じて淨月輪となる、月輪の中に紇哩（キリク）字あり、八葉の蓮花となる、花臺に吽字あり變じて五古金剛杵となる、杵變じて阿閦佛となる、觸地（ソク）の印に住し身不動なることを得、頂より青色の光を放ち諸魔を摧伏し、乃至四親近の菩薩及び金剛部の諸尊、各の本憚（ウシ）を持して前後に於て圍繞す。

○鈴　○次に大日　○本尊根本印（四處を加持すること羯磨會の如し、撰眞實經に云く、是れを能滅毗那夜加諸惡魔鬼神印と名く。）

◎寶生

○囉怛曩三婆縛薩多他蘗多（ラタンナウサンハンバサタタギヤタ）　○平等金剛（秘なり）　○(二)平等性智寶生尊　寶部内證諸眷屬。　○怛洛　○如意寶

(三)壇中に娑（サ）字あり馬座となる、座の上に尠（アク）字あり滿月輪となる、月輪の中に紇哩（キリク）字あり、八葉の蓮花となる、花臺に怛洛（タラク）字あり變じて如意寶珠となる、寶珠變じて寶生如來となる、頂より金色の光を放ち如意寶珠を雨ふらして、悉く一切衆生をして所求を滿足せしむ、及び四親近の菩薩寶部の諸尊恭敬し圍繞す。

○太尊根本印（右の羽を施願にす、羯磨會の如し、唵囉怛曩三婆縛怛洛）　○正念誦（大日、本尊、上言）　○又の印（外縛して火を寶形になすなり）　唵嚩日囉（ザラキ）惹嚩（シャナム）怛洛（タラク）　○寶菩薩（唵縛日囉嚩怛曩唵軍、一）　○護摩　○本尊段

召、遣、第二印言
芥子、第一言

（一）原本梵字、對譯文字は花藏院集所載の阿閦佛陀羅尼に依る。

（二）壇中云云　道場觀。

（三）平等云云　以下之に準ず。

（三）壇中云云　道場觀。

（一）唵阿嘌（シンアキシュビヤ）芻二合毘夜二合（ムヤ）吽　○正念誦（大日本尊）　○又印（止觀金剛縛して全く惡願を申ぶ、無動如來大身印と名く。）　唵縛（バ）曰囉（ザラキ）惹嚩（シャナム）怛吽　○散念誦（佛眼、大日、四親近の菩薩、三世本尊、第一言、一字）　○護摩　○本尊段　召、遣、第二印言。芥子、第一言用。

澤見抄は保壽院の元祖、平等房永嚴法印の撰、覺成僧正の作なり、元と別々の折紙なるを喜多院御室守覺親王類聚して六卷となす。

∞阿彌陀

○阿利野彌陀婆野薩怛他蘗多　○清淨金剛大悲金剛壽命金剛　○極樂教主彌陀尊　觀音勢至諸薩埵。○紇哩　○八葉赤蓮花獨古を以て莖となす。　○敬愛に付て之を行ず。

(一)壇上云云　道場觀。

(二)壇中に鋡字あり孔雀の座となる、座の上に阿字あり淨月輪となる、其の上に紇哩字あり紅蓮花となる、花の上に又た紇哩字あり、八葉の赤蓮花となる、獨古を莖となす、變じて本尊となる、卽ち身色紅顏梨にして大光明を放てり、相好圓滿して奢摩他の印に住す、無量の聖衆圍繞す云云。

○鈴　○次に大日智拳印言常の如し　○本尊定印小呪　○二菩薩印言觀音、八葉印、唵阿嚕力迦娑縛賀。勢至、未敷蓮、唵縛々紫娑縛賀。

○八供四攝等蓮合して火を開く　○禮佛　○次に入我我入　具さに儀軌の文の如し。△略觀

○本尊　大日所變の彌陀　○行者　彌陀所變の觀音

○本印外縛して中指を立つ　大呪七反又た小呪一反軌說なり。

曩謨、囉怛曩怛囉夜耶、娜莫阿哩野旗跢婆耶、怛他蘗跢夜、囉曷帝、三藐三沒駄耶、怛儞也他唵、阿蜜喋帝阿蜜喋姤納婆吠阿蜜　喋多、三婆吠、阿蜜喋多　藥陛、阿蜜喋多、悉弟阿蜜喋多帝際阿蜜喋多、尾訖磔帝、阿蜜喋多、尾訖磔多、誐旗寧、阿蜜喋多誐誐曩吉底迦嚕、阿蜜喋多、嬭拏娜邲婆耶、薩縛羅他婆駄寧薩縛羯磨、訖禮捨乞灑孕迦隸娑嚩賀

○又の印左の手を相捻し、空の端を環勢の如くす、右又た此の如くし、左仰げ右覆ひて兩手の甲を合せよ。　○小呪　師云く此の印言に依て本尊と行者と同體不二なり。大金剛輪印言之を用ひよ。　○正念誦大日、本尊、小呪　○定印

大呪一反　○又た外縛印　○小呪一反(朱)帝際とは光の義なり。　○散念誦(朱)○或也　佛眼　大日　本尊大小決定往生或は光明言　正親(教)馬頭一字　○護摩　○本尊段外縛の印を以てし小呪一切之を用ふ　○御加持大呪七反許伴僧同

○禮佛梵號　南無阿梨耶旗陛波耶薩他多迦多三反

○或は多印を用ふる事。△觀音二頭指を蓮にし二大を並べ立てよ　唵縛曰羅達磨紇哩　△決定往生內縛して火風空各の開き立てよ、阿蜜喋姤納婆吠吽　△六八印內縛して、說法、縛して大小各の開き立せ合せ惠の大指を掌に入れ、餘の九指は搖動せよ、觀ずるに口決あり　△三三品往生惣印定手を仰け惠の手を覆

裏書に云く　引字變じて月輪となる、ソトバ變じて大日如來となる、首に五佛の寶冠を戴けり、妙沙穀の天衣を垂れて智拳印を持し師子座に處す、此れ大日如來妙觀察智門趣、彌陀定印に住して諸の衆生を敎化す云云行者は彌陀所變の觀音なり　△入我我入　十二光佛　八供四攝等

師云く十二光佛種子の事。　阿彌陀小呪と同種子と並に二菩薩の種子と合して十二字之を用ふべし。

○又た別して祕說　定印を以て上品三生となす　大呪三反

○又た中指を屈するを中品三生となす　大呪三反

○又た無名指を屈するを下品三生となす　大呪三反　已上九品畢る。

○九品の佛は九界佛性なり　九體中尊の事人界佛性　十廿露眞言の中本尊は小呪なり。（朱）已上裏書

◎釋迦

○殺迦冒地（セイキヤボウヂ）、薩怛多（サツタ）、誐多（ゼヤタ）　○寂靜金剛　○一代教主釋迦尊　十方分身諸如來　本尊聖者釋迦如來　十方分身諸佛善逝。○婆（バク）　○鉢

（二）墳中に高妙の座あり、四方均等（クヰントウ）にして其の上に紇哩字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺の上に阿字あり淨月輪となる、月輪の中に婆字あり寶鉢となる、寶鉢變じて釋迦如來となる、身色黃金にして三十二相八十種好を具足す、敎法を流布して衆生を化度せんがために說法の相に住せり、及び普賢・文殊・觀音・彌勒等の諸大菩薩、乃至舍利弗、須菩提等の諸の賢聖衆前後に圍繞す云云。

○本尊印　定惠各の五輪を舒べ空火を相捻して左を心前に仰けよ、右は左の上に覆せ柱着くる勿れ　後僧正之を用ふ。

○（一）曩莫（ナウマクサンマンタ）三曼多沒駄引（ボーダ）喃引（ナム）、婆薩縛吃哩二合（バクサラハキリ）捨（シヤ）、濕索娜曩（ダリソタナウ）、薩縛達麼（サラバタラマ）、縛始多鉢羅二合（ハシタハラ）鉢多誐誐曩（ナウサマ）、三摩三摩娑嚩二合（ソハカ）軌井に次第中にあり。

○又の印　右手外に向へ之を立て眉と等しくす云云　香隆寺用　唵阿謨伽悉帝惡（オンアボキヤシツテイナク）。　○正念誦　大日本尊　歸命婆

○又の印　二大中小の六指を各の堅て双べ相柱へ、二食指を以て內に向へ相叉へ、右、左を押せ、無名指亦た然り、跪を開くこと四寸　集經に說く（二）唵一薩婆悉底二合雞二毘輸陀羅上音（クイヒシユタラン）泥三泥（テイ）莎訶

○散念誦　佛眼、大日、普賢、三世、一字、本尊大小　○護摩　○本尊段　召遣、鉢印、小呪芥子、第三呪用　○禮佛句　釋迦牟尼薩怛他誐多。

◎藥師

○鞞殺社（バイセイジヤ）、窶嚕薛瑠利耶薩咀陀（クロバイナヨリヤサダタ）揭多（ゼヤタ）。　○密號之を尋ぬべし　○十二（三）上願薄伽梵　日光月

（一）墳中云云　道場觀。要

（一）原本梵字、對譯文字は胎梵本軌に依る。

（二）原本梵字、對譯文字は集經第二所載に依る。

（三）上　又は淨の字に作る。

光諸薩埵　本尊聖者　十二淨願　醫王善逝　醫王薄伽　日光月光　十二神將　兩部界會云云

○堂莊嚴の事。　但し大御室は堂莊嚴を用ひしめず、只だ息災に御修せしむ。○行法（金剛界に依る。）　增益若しは息災　隨時なるべし。　○あ　高隆寺傳或は斡　○壺アカタ藥なり、口決十二角に十二大願を配するなり。

○初日　○ヲ月

（二）壇上に斡字あり蓮花臺となる、臺上に刃字あり月輪となる、輪の上にあ字あり轉じて十二角の藥壺となる、壺變じて本尊藥師如來となる、七佛八供四攝日光月光八大菩薩、乃至十二大將等前後左右に圍繞す。

金剛王の次に勸請、內縛して印はコロコロの明を用ふるなり。

○振鈴　○大日　○本尊（根本印、有觀法界定印　有說）○大呪なり。○日光（二風二空頭相柱へて間に合せて餘の六指を散し舒べて旋轉せよ。）

唵嚕（ロホニユタ）嚢儞庾多ソハカ　○月光（右手空風相捻して花を持す如くし餘の三指を立て、少し開き外に向へ、上に擧げ左は拳に作り腰に安せよ。）　歸命戰（セン）

拏羅鉢羅婆野（ダラハラバヤ）ソハカ　○十二神將（右を拳に作り頭指を鉤せよ。唵俱吠ラソハカ　之を以て惣印となす。）　○四攝八供等（常の如し）

○本尊加持（內縛の印、口傳あり、頂上に散じ小呪を用ひよ。陀羅尼集經に出づ。）　○正念誦（大日本章小）　○又の印（法界定、前の如く大呪七反せよ）

○散念誦（佛眼　大日　一字　本章大小　數令）　○印（內縛して中指を申べ立て双べ相柱へ右に旋すこと三遍して結界せよ。唵俱吠嚕　娑縛訶。口決あり。）

○護摩爐底の藥壺に之を書く、或は種字を以て三度二菩薩に之を供し、別言之を用ひよ。　火　本（召請等、內縛印、小呪并子、同供物、大呪之を用ふ。）　諸尊（三十七尊に二菩薩を加へよ、例へば大小の杓を供し了て、小杓

後火（十二神將に之を供せよ印言は上の如し。）　世天

○御加持（大呪　伴僧同）

○或は云ふ禮佛句（梵號なり云云　但し漢語吉なり。）

○結願神呪の事　集經に是れ十二神將の呪なり。

○（二）十二神將の種子　乞（キ金）（朱）亥神　唅（カン和）（朱）戌神　紇哩（キリク縛）酉神　縛（安）（朱）申神　摩（マ摩）（朱）未神　怛覽（タラン素）（朱）午神　賀（カ因）（朱）巳神　摩（マ婆）　覽（ラム摩）（朱）辰神　覽（ラム）（朱）卯神　阿（ア眞）（朱）寅神　吽（ム照）（朱）丑神　婆吒（バ）（朱）子神

○八大菩薩（迦才の淨土論に出づ。）　尙　彌勒　文殊　觀音　勢至　寶檀花　無盡意　藥王　藥

此の八菩薩は勸修寺流には護摩の時諸尊段に之を供す。

○中堂根本藥師像は立像なり。（左は與願の手、但し無名指を屈して壺を持せざるなり、右は施無畏にして無名指を屈するか。）　裏書に云く

根本印　第一呪を用ふ、（顯に云く藥師瑠璃光如來眞言と。）　左手を以て開いて臍下に置き、右の手を以て其の上に重ねて二大指の頭相ひ柱へ、想へ其の中に十二妙藥壺ありと。（是れ秘中の最秘なり、眞言七反）

（一）壇上云云　道場觀なり。

（二）十二神將云云　已下種子は梵字なるも對譯語とせり。

(一)南謨敬禮薄伽伐帝世尊鞞殺社窶嚕薜瑠璃鉢剌婆光曷羅闍也王呾他如揭多 也耶阿羅嘓帝麽三(二)藐正三等勃陀也耶。已上歸敬分。呾姪他所謂唵鞞殺逝藥鞞殺逝鞞殺社窶三沒揭帝上勝莎訶

三藥を擧ぐるは、謂く理智教の三藥を以て衆生の業病鬼病四大病の三を除くなり、善根藥を以ては業病を治し、呪藥を以ては鬼病を治し、醫藥を以ては四大病を治す、又た三身藥を以ては三毒の病を治すること之を知るべし。

○藥師瑠璃光佛呪 (三)唵呼盧呼盧、戰馱(去音)利、三摩橙祇四莎訶

○心呪 唵鞞殺社、窶嚕薜瑠利耶薩呾陀揭多

(朱)裏書に曰く、根本印ノ口傳なり

風指以下の四指は三度之を動せ、十二度するは是れ十二大願を成ずるを表し、鉢より七佛妙藥を出すなり。最上は藥壺を觀ずるなり、七佛藥を入るる是れ小野僧正の大御室に授け奉る様なり云云如何

小野傳に云く、七佛藥師 一阿 二囉 三縛 四奢羅 五駄 六阿 七鞞

日阿 月捨

(一)原本梵字、對譯文字は藥師瑠璃光七佛本願功德經下卷(義淨譯)所出に依る。因みに本文中敬禮等の漢字は原本挿入に依る。

(二)獲 藐か。

(三)原本梵字、對譯文字は陀羅尼集經第二所出に依る。

○十二神將 一宮毗羅 二伐折羅 三迷企羅 四阿儞羅 五嚩底羅 六珊底羅 七因達羅 八波夷羅 九摩虎羅 十眞達羅 十一招杜羅 十二毗羯羅

○種子 吽子 阿去 覽戌 滿酉 訶申 怛覽未 摩午 奢巳 紇哩辰 髯卯 枳寅 賀丑 巳上

○經此の十二藥叉大將一一に各の七千の藥叉ありて眷屬となす文合して八萬四千の藥叉なり、是れ卽ち八萬の塵勞を對治するか。

◎佛眼

○沒馱(朱)佛路引左(朱)眼寧 ○殊勝金剛 ○金剛吉祥佛眼(二尊 八大菩薩諸眷屬

本尊聖者 (三)金剛吉祥 佛眼佛母 諸大眷屬

○行法金剛界に依て之を修すべし。息災 ○三カ偈より一字金に至るまで、伴僧本尊呪を誦すべし大呪當の如し

○佛頂眼 ○或は金剛眼 謂く一古の左右に眉並に目あるなり

(四)月輪の中に紇哩字あり、三層八葉の蓮花と作る、花臺に於て欠字あり、等虛空不

(四)月輪云云 道場觀なり。

(一)原本梵字、對譯文字は穢蹟光軌による。

(二)尊 朱書に母に作るを師說とす

(三)金剛吉祥 朱書に師之を除くといふ。

可得門なり、白色の光明を放ち變じて獨古金剛杵となる、法界の體にして邊際あるこ
となし、一切如來杵の內に在て間隙なし、杵變じて佛眼如來となる、兩目徹咬して定印
に住せり、身色素月の如し、寶冠師子冠寶衣・天帶首を飾り衆寶珠瓔珞五色の花鬘索をも
て微妙嚴身せり、光明熾盛にして一切の支分より十恒河沙俱胝の佛を出生す、內院の
八葉の前の葉に一字頂輪王あり、右に旋て七𠀋の使者あり、第二の八葉に金剛手等の
八大菩薩理趣經の如し、第三の八葉に右に旋て八大明王あり、又た花院外四方に於て、八供養
四攝の菩薩あり、是の如くの諸尊各の師子冠を戴けり、又た外四方に八大護天・廿八
宿等恭敬し圍繞す云云

○振鈴　○次に大日金(朱)合　○本尊印、常の如し、大呪

○金輪內縛して二中を立て鈗形の如くし二風を屈し、歸命敎嚕　○八大菩薩金合、(朱)合二卷大安樂
二中指の上節を拉して二大を並べ立てよ。上節に云く、
不空印言なり、
謂く諸菩薩眞言　歸命迦、薩縛他尾麼底、尾枳羅停達麼駄睹涅佐多、參參訶 ソハカ(朱)梵本仁海
抄中に
あり。　○八大明王　金剛部印の如し。(朱)同次第上に云く、一切持金剛菩薩印言なり、梵本は七卷抄の中にあり。　曩莫三曼多嚩曰羅赦吽吽
吽發吒々々髯々娑縛賀　○七曜惣印呪合掌して二風。二空を開けよ。　唵、蘖羅醯、入縛里耶々々々
常の
如し　○(二)八供四攝等云云

(一)八供云云　朱書して或は不動無能勝是れ師說なりといふ。

○次に大日印言金　○根本印二手虛心合掌して、二頭指を屈して二中指の上節に附け、眼咬形の如く開いて赤た眼咬形の如くす、是を根本と名く、(朱)五處を印す、眞言大呪常の如し。

○又の印金合し並べて、二風の甲を屈し、合せて大指を並べ竪て各の風を押す　○正念大日ふ、大呪を用ふ、或は說く　唵敎駄嚕捨尼娑縛賀
(合)本尊(大呪)或は金剛薩埵　頂輪王　吉祥明八大菩薩惣
呪　八大明王惣呪　破障　不動　三世　成就明　或は北斗

能く一切の願を(二)除き　一切の不祥を除く　常に此の明を持する(二)王は　身
金剛山の如く　壽命長久なること　千萬俱胝なり。

○又た云く　金剛薩埵　及び諸菩薩　常隨し衛護し　急難の中　日の空に
昇るが如し。

○禮佛　南無　敎駄嚕左儞三反

○吉祥の明に曰く。(三)唵、嚩曰羅、二合室哩、二摩賀引室哩二(朱)日阿濕事逸二(朱)
索引摩室哩二(朱)火阿儞羅迦室哩、二合(朱)水沒駄室哩二(朱)木沒羅二賀娑慶二合底室哩、二(朱)金
戍訖羅二合室哩二(朱)土捨禰始者二合曜、始制二合帝室哩、二摩賀三摩耶室哩二合娑嚩二合賀

○破障の明に曰く　唵、薩嚩怛嚩三摩耶、室哩二合曳、娑嚩賀

(二)除　諸の字か
(二)王　者の字か

(三)原本梵字、對照文字は瑜祇經所出に依る。

○成就の明に曰く　唵吒吒吒烏置智置智、吒烏吒烏吒烏吒烏、縛曰羅薩怛縛、嚩吽縛解紇哩解吽泮吒吽

○護摩　覽常の如し　欠一尊に之を供ず、印常の如し、眞言は小教嚩中、金輪七八八率請し率送し大佛召召の言を誦して部類を請じ、印一眞言二、各の請句四字の明を加へよ。供物には敎嚩言を用ふ、滅惡趣常の如し。呪を用ひよ。次に齣嚩印を結び先づ敎嚩言を誦す、次に齣嚩とするなり、中、頂輪王北斗七星を施る、奉請には召北斗印言、奉送同じ、供物眞言は常に北斗呪なり　含常の如し　已上了る。

此の尊に二あり。○一大日變大日經普通眞言藏品に見ゆ　○二金剛薩埵變廣經縛曰羅皆利摩訶悉地品に見ゆ觀行作法は檜尾の口決あり

佛眼次第に云く大師云く大日變じて金剛薩埵と成り、薩埵變じて佛眼となる云云

○曼荼羅の事　中央佛眼　前金輪　右に旋て日・月・火・水・木・金・土・　次に金剛手　文殊　虛藏　彌勒　觀音　虛空庫　金剛拳　摧一切魔　次に步擲三世　大菩薩　大咲　大輪　馬頭　無能　不動　次に八供・四攝等なり。

裏書に云く、餘尊の呪訖りて一字明を念ずる時、餘尊皆な隱沒するも實體失せず、但し威勢を失ふこと譬へば日光現ずれば星光沒するが如し、若し一字の後に佛眼呪を念ずる時、彼の隱沒の尊の威光出現して、必ず本の如く成就すと文り

弘法大師の御說　諸尊念誦の最後に佛眼の明を誦する意いかん、一字眞言遍數須らく佛眼尊の部母に付屬すべし、故に諸呪を授受す、乃至成佛の時散失せしめざる故に早く成就す。

瑜祇經に云く　又た說く一切佛眼大金剛吉祥一切佛母心、一切法を出生し一切の明を成就し、能く一切の願を滿し一切の不吉祥を除いて一切の福を生じ、一切の罪を滅し、一切の有情をして皆歡喜することを見せしむと文り

香隆寺御抄物に云く　心眞言　(二)沒駄路引左寧

若し此の法を作さんと欲はゞ、心宿・柳宿・鼻宿・牛宿・日月吉凶を簡ばず云云此の宿直日十五日・一日食せずして一千八十反を滿せば、所有る心願、時に應じて便ち遂げ大悉地を獲得し佛母心を現せん、若し人有て常に明を持する者は、身は金剛山の如く、金剛杵の如く金剛如來の如く、金剛薩埵の如く、乃至一切佛刹利羅の如く、佛の出言の如く所出の言語は卽ち眞言となり、支節擧動すれば便ち手印となり、身の觸るゝ所は便ち大契とならん云云(朱)已上裏書

(二)原本梵字、對譯文字は熾盛光軌に依る。

※大佛頂攝一切佛頂輪王法と
は卽ち是れなり。

○一字金輪轉輪王　三十七尊諸聖衆　本尊聖者　一字金輪　兩部界會　○
敎嚩吽　(朱)八輻　○金輪

○金剛界行法息災に付て之を行ず。　想へ壇の上に𑖀字あり、法界に遍くして大蓮花となる、蓮花の上に𑖀字あり七寶の宮殿となる、殿中に七の獅子座あり、其の上に白蓮花あり、其の上に敎(ホロム)嚩吽字あり變じて金輪となる、輪變じて攝佛頂輪王身(卽ち大日なり)となる、如來の形紫金色にして大丈夫の相なり、法界定印に住せり、其の上に八輻の花輪(クエ)を持せり、右に佛身を旋りて光聚佛頂・發生佛頂・白傘蓋佛頂・勝佛頂・除障佛頂・黃色佛頂・最勝佛頂・無邊聲佛頂あり、此の外に七寶圍繞して八恒河沙俱胝の諸佛如來圍繞す。

○鈴　○次に三十七尊常の如し○或は大日　○本尊　○八佛頂印言之を用ひよ。○本尊加持　智拳　祕說(朱)大師の御傳なり。小呪を用ひよ經の終の呪なり。

怛儞也(二合)他、唵、引阿曩(ノウ)引阿曩(ノウ)、尾舍耶(ヒシヤ)、尾舍耶滿馱(ボム)滿馱滿馱儞滿馱儞吠(イ)引囉嚩曰羅二(ハツタ)播捉泮吒(タ)、吽、引沒林(ボロム)、二合泮吒、娑婆二合訶

○正念誦　唵摩訶縛曰羅陰瑟捉瀉口傳あり吽怛洛紇哩噁吽　或は小呪を用ふ。　○又の印　智拳

上言唵摩訶々々々なり　○散念誦佛眼　大日金、大陀羅尼一反不動　總勝　無能　忿怒　一字　○護摩

○本尊段一尊に之を供す。召請發遣并子等の印言、智拳歸命沒嚩吽　○諸尊段三十七尊の如し　或は中に大日、廻りに八佛頂を安し之を供せよ。普通佛頂印言之を用ひよ。(二)手虛合にし稍〻深く交へ、中節に至り花の掌中に在るが如くせよ。

唵斫(シヤヤ)羅(ラ)縛(バリ)哩底(チ)唵(オム)吽。

○讀四智敎令　次に不動　○禮佛本尊、八佛頂梵字之を用ふ。　○後加持前の怛嚩也他の呪を用ふるなり。

此の法相應物は衆多なり、然して師說之を用ひず、只だ普通息災の法なり、但し大壇護摩壇を並べ之を行ずべし、小壇を用ひず伴僧八口若しは廿口、然して大陁羅尼を誦すべし、但し啓請を讀まざるなり一時に七反、七反、振鈴の次に後に之を誦す。

爐第二緣　八輻輪八枚に之を書く。　外緣常の如し　爐底の輪中に種子之を書く。

裏書に云く　本尊の事十佛頂圍繞すといふ事、八大佛頂に佛眼・大日を加ふるなり。　大佛頂曼荼羅を用ふるなり、中尊は大日金輪、後は釋迦金輪、七寶を廻す、左右に竹草ある曼荼羅是れなり、師說に云く大佛頂卽ち大日金輪なり、謂く七師子を以て座とせり、寶冠を着し智拳印に住するなり、釋迦金輪は螺形にして須彌山を以て座とせり、是れ天等の主なり定印の上に輪を(二)並ぶ　此の大佛頂曼荼羅は一字金輪法に共通するなり、但し金輪曼荼羅之を用ふべからず。　大佛頂とは大日金輪なり最勝佛頂とは一字金輪に名く、金輪を大佛頂と名くるなり。　一字金輪を以て本尊と

(二)佛に云く　裏書各中節外縛なりと。

(二)並に作る。一本に置

爲す大師の御傳なり。　白傘蓋佛頂を以て本尊と爲す後入唐の傳なり、則ち小野は之を祕す。

兜樓波香を用ふる事は宛も法花法の如し。是れ小野の祕　或は又た鏡等を用ひて之を行ず云云

或は云く大勝金剛法を以て大佛頂法となすといふは如何(朱)巳上裏書

◎金輪

○翳迦一訖沙羅宇烏瑟尼頂斫羯羅嚫底轉輪　○一字金輪遍照尊　八大佛頂諸轉輪

○增益に付て之を修すべきの時、處る方は面を東にすと文り　但し普通には息災に付く師說なり

○行法常の如し　但し三力偈の後、佛眼眞言、振鈴の後、後鈴に至るまで本尊呪、一字金を打たざるなり。廣澤流。

(二)壇中に噁字あり變じて七寶の宮殿樓閣となる、樓閣の中に七師子の座あり、座上に紇哩字あり、八葉の白蓮花臺となる、臺上に日輪あり、輪の中に教嚕吽字あり變じて八輻の金輪となる、輪變じて金輪王遍照如來となる、形ち素月の如し、一切の相好を

(二)壇中云云　道場觀。

以て用ひて法身を莊嚴す、金剛の寶冠を戴き輪鬘を首飾とせり、衆寶莊嚴の具をもて種種に身を絞飾して拳印を持す、輪王の前の葉上に佛眼を觀じ、餘の七葉の上に右に旋りて七寶を布列し、眷屬圍繞す。

○鈴　○次に大日　○本尊勝身唵僕欠　○無能勝眞言に說あり、內縛竪古の印、二雙指を竪て以て之を招く　○阿閦等獨古印

唵縛日羅　枳嚩曩吽

○印　○大日金なり。智拳印　同言金　○正念誦金大本尊　○次に智拳印　○教嚕吽　勝身三摩耶金合して竪て、中指を合せて青蓮の如くし、頭指を以つて各の中指の背の上節に安し四處を印せよ。唵僕欠　○散念誦大日金　佛眼　輪　孔(卷數を入れず)し卷數を入れず。不無教令　慈護師說は台大を用ふ、但

○護摩壇の內輪の中心に種子を書くべし。覽(ラン)常の如し　敎嚕(ボロン)吽一切智拳印　緩前の如し　欠(ケン)七供を通すなり、例の如く大小約一小約を雙て七度するなり。

含(カン)前の如し　奉請・發遣・佛眼印言、印同なるを以てなり。惣呪を加ふ、

○後加持一字　○本尊聖者　○一字金輪　○八大佛頂最勝　諸大轉輪　○功能集經に云く

若し能く心を至し　隨て一反を誦せしむ　一たび耳に經れば　七沙の衆罪

若しは輕若しは重　悉く皆な消滅して　速かに當

さに成佛すべし。　願の果さゞることなく

惣呪の傍に北斗呪と書す。

○禮佛　南無一字金輪三反　南無諸大轉輪一反

○敎嚕吽。末法經に云く、三世諸佛に於て是れ最上祕密の心呪と云ひ又た云く我が滅度の後舍利を分布し已て當さに諸の相好を隱す實身此の呪となす。裏書に云く　一字　若し人ありて諸の毒藥を食せば、孔雀の尾を取て呪十萬反を誦す、禁毒及び諸の惡病皆な除差することを得云云

○尊勝

○尾枳羅拏隣瑟抳灑　○除魔金剛　○尊勝佛頂轉輪王　八大佛頂諸轉論　○行法息災に付く　○曼荼羅を觀ずべし。

(二)壇の上に大圓明の輪あり、三胎を以て界道となし、實瓶を以て分齊となす、其の中の圓明に噁字あり法界率都波となる、變じて大日如來となる、五佛の冠を戴いて瓔珞をもて嚴身せり、智拳印に住す、七師子の上に於て結跏趺坐す、左の圓明の中に濫字あり變じて白傘蓋佛頂となる、右の圓に悉字あり變じて輪となる、輪變じて最勝佛頂となる、中の圓の前に訶啉あり變じて鉤となる、鉤變じて尊勝佛頂

(朱)或は遍照尊

(一)朱書して云く者疏云踈して捨頂といふ煩惱を棄捨する義なり。
(二)壇の上云云　道場觀。

となる、兩手を齊の下に當て、禪定に入るが如くし、掌中に蓮花を承く、花の上に金剛鉤あり五智冠を戴けり、蓮花臺に於て結跏趺坐す、中の圓の後の圓に怛嚕吽あり變じて佛頂印となる、印變じて光聚となる、光聚の右の圓に吽あり變じて廣生佛頂となる、光聚の左の圓に輪嚕吽變じて蓮花となる、變じて發生となる、光聚の右の圓に吽商佉となる、變じて無邊聲となる、下の左邊の半月輪中に吽あり變じて五胎となり、降三世となる、右邊の三角の赤色の光中に憾あり變じて鉤となる、鉤變じて不動となり、像の上に六ケの飛天あり、是の如く之を觀想すべし。

師說に云く　中臺大日の種子嚕變じて金剛鉤となる、鉤變じて法界體性智尊勝となる。智拳印にして七師子座に住す。

此の時智印を用ふ（有が說かく、風を屈して鉤の如くせよと文り　眞言　合言、後僧正說か）、

○鈴　○次に大日　○次に本尊　○次に八佛頂　三世　不動（眞言　合言、後僧正口傳なり）　八供四攝等

○或は三十七尊（常の如し）　○印智三拳（合印言、左端用なり）　右の風を鉤す　後僧正口傳なり　合言　又た二風を屈して掌內に入れ、二大を以て上を掩へ、陁羅尼を用ふ、　遍照寺の傳

（二）六字文字は皆な朱書なること知るべし。

○正念誦　合言、當說を用ふるなり、(朱)小呪、阿密利多帝惹縛底娑婆訶。尊勝陀羅尼經疏に出づるが故に軌に出さず。

○次に鈎印言　○散念誦　佛眼二明王　大日金八字　一字一呪　○護摩　○本尊段一尊に供するは常說、(朱)又た九尊に供するは祕說、鈎印、合言、并子、訶咄半祖鳴瑟尼瀉娑縛訶。勝佛頂軌に出づ。　○諸尊段九佛二尊常說、(朱)但し三十七尊、百八乳木を供すべし　○後火天段　○禮佛　南無尊勝佛頂三反　南無諸大轉輪　○後加持陁羅尼七返許りを用ひよ。　○功能軌の文　尊勝佛頂　能く一切の　煩惱業障を除くと文り

一切有情の　決定して受くべきの業を轉ず。

○陀羅尼の事　壽命を增長し　倍福祐を加へん。　大阿闍梨一時に三十六反

伴僧六口各の五十反　已上一日千反なり。

問ふ、八菩薩圍繞の曼荼羅何れの尊を以て本尊となすべしや。答ふ、師說は中臺の前の尊を以て本尊とせり、尊勝佛頂なり云云

中臺大日法界體性尊勝　除障佛頂妙觀察智尊勝此れ師說なり。

○訶嚩　大日除障の體なり。　文に云く

一切佛頂心は最も勝となすが故に、一切佛頂の中の尊勝佛頂能く一切煩惱の業障を除くが故に、號して尊勝佛頂心となす、亦た除佛頂と名くと文り

不空軌樣八葉を用ふ云云　又た陀羅尼を用ゆ　善無畏軌五佛を用ふるなり。又た智拳印を用ふ、　又た鈎の印を用ゆ。一卷尊勝軌に云く　若し息災法を作す沈水香を燒け　增益白檀　降伏安悉　敬愛蘇合

裏書に云く

無畏軌の圖

○一切佛頂輪王印言　唵怛嚩吽吽泮吒

內縛して二中指頭を合す。加持護身加持所有物壇地招二諸供養等に之を用ふ。

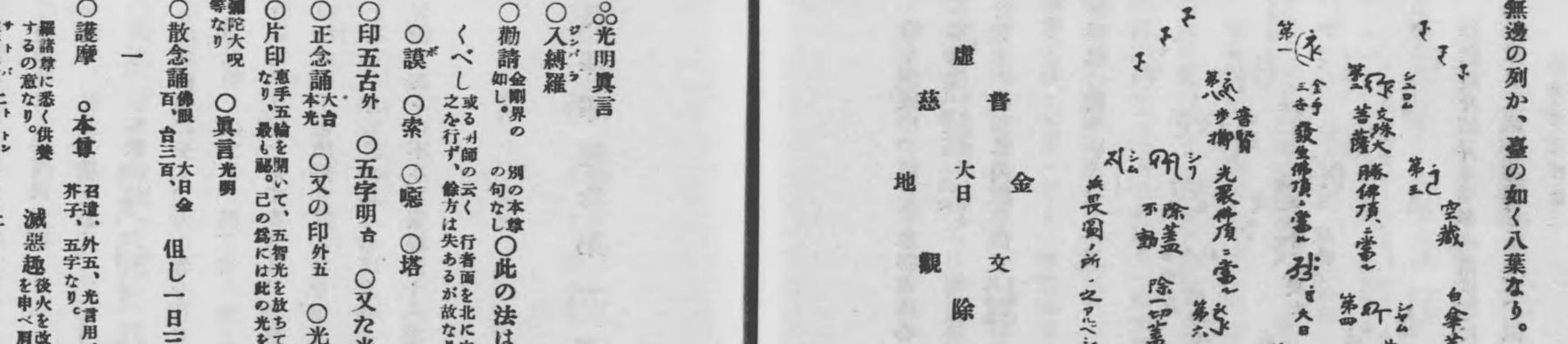
○難勝忿怒王印言　唵(二)微枳羅拏度那度那吽　前印に准ず、唯だ右の中指を改めて、上節を屈して左の中指の上指を柱ふ。

辟除護身結界壇場奉送請供等に之を用ふ。

八大佛頂次第師說同じからず、但し般若寺僧正口傳に云く、若しは是れ光衆白拿最勝

(一)招の下字脫するか。　(二)微云云左に梵字を朱書す、今は略せり。

無邊の列か、臺の如く八葉なり。



普賢 光聚佛頂ニ當ル
金 剋
大日 慈 除一切業障佛頂ニ當ル
文 除
觀 地

白傘蓋 勝佛頂 最勝佛頂
高佛頂 摧碎佛頂 已上五佛頂

大轉輪佛頂 光聚佛頂 無邊聲佛頂 已上三佛頂なり。

(朱)或は密印に云く 金剛合し中を以て蓮となし二羽を以て各の中の背に副ふるなり。已上真言

◎◎光明眞言

○入縛羅(ニンバラ)

○勸請 金剛界の如し。 別の本尊の句なし ○此の法は息災に付て之を行ず。 ○本尊口傳 ○胎曼荼羅を懸くべし 或る阿師の云く 行者面を北に向へ之を行ず、餘方は失あるが故なり。

○謨(ボ) ○索 ○嚩 ○塔

○印五古外 ○五字明合 ○又た光明

○正念誦 大合 本光 ○又の印外五 ○光明

○片印 惠手五輪を開いて、五智光を放ちて五道の衆生を照すと想へ、放光印と名く云云(朱)是れ則ち五古の印なり、最も祕。己の爲には此の光を、及び其の人の上を觀ずるなり、又た土沙加持の事、光言並に阿彌陀大呪等なり ○眞言光明

○散念誦 佛眼 大日金 百、百三、 但し一日三時 千反を滿すも宜し。 光千 或はアミタ ○或は滅惡趣 不數 八

一

○護摩 ○本尊 召遣、外五、光言用、 ○諸尊 八葉九尊を請す、大鉤召印言を用ひよ。例の如く大小芥子、五字なり。 羅諸尊に悉く供養するの意なり。 滅惡趣 後火を改むるなり。右の掌の五指を申べ肩の上に仰け打つ勢にす。 約を供し了り、又た小約を以て三度之に供せよ、曼荼 (二)特(トボム)二(シナンアヒユ)合娑難阿毘庾(シャタラシダ)、二合達擺抳

(一)原本梵字、對譯文字は胎玄法軌に出づ。

(朱)此の眞言は名號毘盧遮那頂光誠惡惡なる故に名となすなり。

○後加持光　伴僧同じ。

小野　金曼荼羅を懸く。　○壇　○塔　○智印能誠衆罪大光明卽光明と名く、

○護摩　○本尊召、遣、五指を申べて風を以て之を招け。光言

(朱)裏書御傳に云く、左の拳を腰に安し、右の五輪を展べて頂に等して想へ、手指より五智光明を出すと。眞言常の如し。

若し此の眞言を持する者は、十惡五逆の重罪を消滅して更に惡道に墮せず、若し病者のために手を加持し其の身を摩り捫づれば、病患悉く除こる。又た淨衣を加持して之を着し、若し己の爲ならば土砂を加持し尸骸の上に散ずるに、重罪を除き必ず光明身を得、具さに不空羂索經二十八卷に出でたり。已上香隆御記

國譯澤見抄第一　終

國譯澤見抄第二　經部

○仁王經　○法華經　○理趣經　○六字經

○仁王經

○惹曩囉惹蘇怛覽(ジャナウブランジャソタラン)　○三世佛母般若尊　五大力等諸薩埵　本尊界會般若菩薩(佛母)

五大力等諸大薩埵　○中心般若○或は𑖦𑖽𑖨𑖿𑖪𑖽𑖨𑖿𑖪𑖽𑖨𑖿𑖪

○鈴　○大日　○本尊般若(一)印言　或は五大力　印言之を用ふ。　○金剛波羅蜜　○印言師說。轉法輪菩薩　小金剛輪或は說く大金剛、儀軌並に疏說　○金剛薩埵　○金剛寶　○金剛利　○金剛牙　已上羯磨會の如し。

本尊三摩地に云く。　心月輪上に地字あり變じて般若梵夾(クヤウ)となる、梵夾漸く舒(ノ)び大に擧體梵夾となる、梵夾變じて般若菩薩となる、其の菩薩の像は結跏趺坐す、白蓮花上に身黃金色にして衆寶瓔珞をもて遍身莊嚴す、首には寶冠を戴く、冠に繫くる白繒兩邊に垂れ下す、左手を心(ムネ)に當て般若梵夾を持す、右手を乳に當て說法印を作る、菩薩頂より足身に至る諸の毛孔より光明を流出し種種の色を作し法界に遍滿す、一一の光中に無量の佛を化し、虛空界の諸の世界中に遍滿して、普く衆生のために當根に般若波羅蜜多の甚深なることを宣說するに、皆な悟解して三摩地に住す云云

○印　兩手背け相(アヒ)付け二頭・二小を收め掌中に屈し、大母指を以て想へ梵隱に八萬の各の二頭・二小指を押し、餘の四指を直く立てよ師說なり。　法藏を置くなりと　唵地引(チシリ)室利引二合(シュ)輸嚕二合(ロシヤナ)多尾悉曳(ヒシヤナイ)娑縛賀

○正念誦心呪を用ふ　怛儞也他(タニヤタ)阿羅孃迦羅孃阿羅孳迦羅孃摩賀鉢羅枳孃二合(ハラ)帝(テイア)羅(テイキヤラ)二合帝(テイア)羅(テイア)娑縛賀

○又の印金剛縛して二風を申べて針の如くし四處を印せよ　第一言を用ふ。

○散念誦佛五大力　大本第一言不三一

○護摩　○本尊段一尊に之を供す、般若菩薩なり。召請、發遣、鉤召印、第一言、芥子に用ふ。　○諸尊段五大力菩薩種子三形上の如し、或は四大力供、鉤印言を以て之を請し、五菩薩の言を以て之を供せよ。

○後火天段四天王供物印呪　○讀經　上下番之を用ひよ。　○後加持　第一言伴僧之を用ふ。

大阿闍梨或は心呪之を持念す。

○堂莊嚴息災に付く　大小壇等あり但し蓋幡之を用ひず。　○支度別にあり最も本說に四香を用ふ　私に云く、沉東白檀南薰陸西蘇合北

○敷曼荼羅は金剛波羅蜜を以て本尊と爲すの時に之を用ふ。

金剛波羅蜜即ち般若菩薩と心得べきなり。金剛波羅蜜は轉法輪菩薩といふ事、儀軌の文明かなり。

隨五大力祕釋に云く、金剛波羅蜜亦た轉法輪菩薩と名くと文り。

小野流に云く、五大尊を以て本尊となす、中央は不動索手持輪せしむるなり、或はいふ、但し未だ本說を見ず。持輪不動は是れ金剛波羅蜜なり　右大師の圖、此の像を以て金剛到岸と名く、是れ則ち御筆の銘なり。實冠形云云　件の像北院の御經藏に在り云云

若し此の義に依らば、此の像は金剛波羅蜜の忿怒を現ずるか、說所に之を尋ね決す

(一) 般若の下、一本に菩薩の二字あり。

(二) 訶に作る。一本に蜜

べし。四波羅蜜の金剛波羅ならば忿怒形いかん

裏書に云く。　五大力菩薩は五智如來忿怒の形體なり、百部鬼王は是れ往古の諸佛法身大士忿怒形なり。

或師云く。　(朱)下摩三摩地所なり。金剛波羅蜜を以て本尊となす。後に般若菩薩三摩地に入る云云。

○五大力印言

一金剛吼菩薩軌に金剛手菩薩といふ。　○印、內五古

○唵嚩日囉二合幡捉嚩羅二合薩埵嚩吽　又た印に云く、左拳を腰に安し、右拳を心に安して、杵を抽擲する勢を作す。

○眞言　唵嚩日羅二合薩怛嚩阿入　○印、二拳の拳面相ひ合せて進力を舒べて賓形の如くして

二龍王吼菩薩軌に金剛賓菩薩といふ　○印、左拳を心に當てゝ想へ、花を持する右拳を右股

心に當てよ。○眞言　唵嚩日囉二合囉怛那二合唵

三無畏十力吼菩薩軌に金剛利菩薩といふ　○印、忿怒拳にして口邊の左右に當て牙にせよ。○眞言

の上に安し劒を想ふと。○眞言　唵嚩日羅二合底乞瑟拏淡

四雷電吼菩薩軌に金剛藥叉菩薩といふ。　○印、

唵嚩日羅藥乞叉吽

五無畏吼菩薩軌に金剛波羅蜜菩薩といふ　○印、左を拳に作り臍に安き、右の五輪を舒べ掌を以て右の膝の上に覆せ以て地となせ。○眞言　唵薩怛嚩二合噜曰里二合吽

已上の印眞言は金剛界の中に出づる耳。

○醍醐方抄物中　仁王經曼荼羅　中央般若菩薩四角　左右不動三世

第二重　內四供　第三重　外四供　是れ宇治大相國の時海僧正、佛師助照を以て之を圖せしめらる。

小野の方、　蓋幡を用ふ八色　堂莊嚴は天蓋幡等を用ふる事本說の如し、最も然るべきなり。

但し二十四流の幡の色に付き不審あり、若し瞿醯經に准ずべくんば八色幡なるか、又た五大尊を用ふる條、儀軌の文に依るか、但し件の文の意は五大力菩薩の內證威德を顯さんがために、敎令輪身を說くなり、此れ即ち鎭護の大士なり、更に本尊を用ふべからず、今仁王般若法を修する時、所護法を修すべし、豈に法花法を修するの時、十羅刹を以て本尊と爲さんや如何。

又た是れ曼荼羅中尊は不動なる故か、若し然らば件の圖は不動の像なること其の理なきか。軌の文に云く、中方輪四方杵寶劒牙此の上の五事即ち是れ五方菩薩所持の契なり、全く五大尊の持物に見えず、文意に依れば中方輪は金剛波羅蜜之を持すべし、其の菩薩は即ち是れ轉法輪菩薩と、是れ師說なり本說なり、今は本文圖繪曼荼羅に背けり、祕法を安立すること不審なり。

般若菩薩を以て本尊となす、是れ所護般若の體の故に能護は是れ五大力なり。

○本尊段(毀否菩薩言裏書なり。)　○(二)鉤印なり　○諸尊段(五大力)　(二)鉤印を結びて五菩薩の言を用ふ。　○後火天段(四天王供惣呪別呪意に任す)　(朱)已上

◎◎法華

○斫羯羅(シャクヤラ)冒地(ボーディ)多他誐多(タターガタ)　○寂靜金剛。

○(三)大恩敎主釋迦尊　證明一乘多寶佛

阿逸多等八大士　十方分身諸如來

舍利弗等諸內證　多門持國十羅刹

(一)鈎に作る。一本に鉤に作る。　(二)鉤に作る。一本に鉤に作る。　(三)大恩云云　勸請の句。

○釋迦　○不　○鉢　○智拳　○歸命婆

○多寶　○剎　○塔

法界
○定印　曩莫薩縛怛他(ナウマクサラバタタ)蘖帝毗庚尾濕縛目契毗藥薩縛他(キャティビ ユビ ジュバ ホーケイビ ヤクサラバタ)、阿阿暗惡(アアアムアク)ソハカ。

(朱)裏書　此の眞言は無量壽イ決定如來の呪なり。

(二)妙高山の上に百寶莊嚴の大蓮花臺あり、花臺の上に高妙の塔婆あり七寶の所成なり、其の中に師子座あり、座上に𑖀字あり變じて八葉の蓮花となる、其の上に𑖦字あり淨月輪となる、月輪の中に𑖀字あり變じて釋迦如來となる、光明赫奕として說法の相に住す、傍に𑖦字あり多寶世尊となる、久遠の願力に依て座を並べ、共に妙法蓮花經を演說す、八葉の上右に旋りて普賢・文殊・觀音・彌勒・藥王・妙音・常精進・無盡意等の諸大菩薩あり、又た舍利弗・目連・迦葉・須菩提等の諸大聲聞及び內外八供四攝(三)廿天・四大明王・外金剛部・護法天等、前後に圍遶し雲海を供養して虛空に充滿す。已上普通次第此の如し。

(一)朱書に云く、又た口傳、無所……眞言○……𑖦……四字なりといふ。　(二)妙高山云云　道場觀。　(三)廿天　一本にサ士に作る、薩埵の略字なり。

廣澤秘傳　曼荼羅を觀ずべし　金界大日直に本尊と想ふなり。

○多○𑖦○塔　○釋○𑖀○塔

平等性智寶　成所作智釋

迦法性塔婆內に住す。二佛同座

○印　無所（朱）平等大會思なり。（朱）口傳あり　開戸なり。　○歸命　縛曰羅馱覩鑁

○正念誦大日金本尊軌に言く　曩莫三曼多沒馱南婆薩嚩吃里捨涅索娜曩薩嚩達摩嚩始多鉢羅

鉢多誐誐曩三摩三摩莎哥

○又の印　智拳　歸命者　○散念誦　佛　大（金）本（軌言）　多前にあり　經（壽量品、三世、一字、）（朱）讀經の前に智印を

結び、十方佛土中の四句を誦するなり。

○護摩　召遣、智拳印、芥子、歸命者、　○後加持多寶言　伴僧讀經を斷せず上下番を相ひ分つ孔雀經等

の法の如し。是れ大師の御傳なり。　已上廣澤流。

或る師云く、（朱）菩賢印を結び、普賢三摩に住するなり。　經を誦する時先づ觀念すべし、舌端に於て八葉の蓮

花あり、花の上に佛あり結跏趺坐す、猶し定にあるが如し、想へ妙法蓮花經の一一の

文字佛の口より出でゝ、皆な金色と作て光明を具して遍く虛空を照す、想へ一一の文字

皆な變じて佛身となる、虛空に遍滿して持經の者を圍繞す。誦し了て重ねて普賢印を

結び眞言を誦すべし。

經中の妙義を思惟せよとは　壽量品の偈なり　常に靈鷲山にあるなり。

此の法は必ず寶山の印を用ふべし云云　道場の前に之を用ひよ。　二手內に叉へ拯めて深からしめ二肘を着け腕を開くなり

唵阿遮羅畔（アシャラム）

（朱）此の印を結ぶ加持力に由て、即ち此の寶山其の壇中に於て轉じて鷲峰山となる、

頗利を地となし寶樹行烈す。

多寶（左理）　釋迦（右智）　大壇の中心に法花經一部を安置し奉れ。○本尊法花

○勸請　一乘教主釋迦尊　多寶分身諸如來　普賢文殊諸薩埵　身子迦葉諸聲聞　梵

釋多聞十羅刹　靈山會中諸聖衆

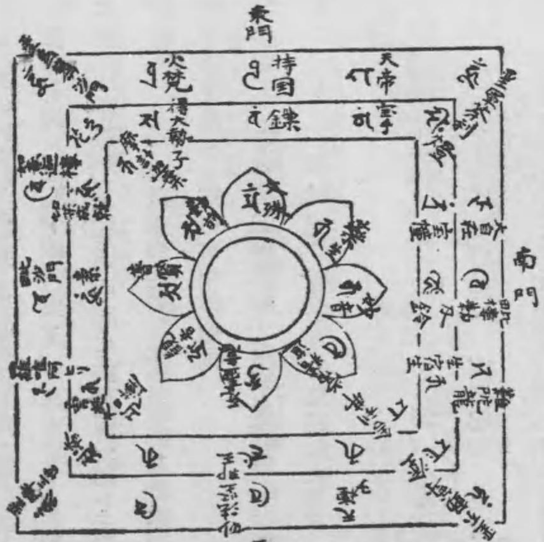
○禮佛　南無釋迦牟尼佛　南無多寶佛　南無妙法蓮花經。　是れ師說なり。

又た云く　多寶（法身）　無量壽命決定如來（報身）　釋迦如來（化身）　是れ即ち釋迦の三身なり。

小野曼荼羅の中の塔は是れ法界宮中の一大塔なり云云究竟して祕說なり　○殘○八葉赤台大と思ふなり　深祕の本尊とするなり八大菩薩卽ち八葉九尊なり云云中臺之を加ふ　○法界定印　（二）胃地阿（朱）開因　遮梨耶阿（朱）示　三胃地（朱）悟　暗儞利茶（朱）入行　暗噁（朱）佛の智見證　方便具足

○正念大台、本小呪、南謨三曼多勃馱南婆　大日經說　○又印外五阿毘羅吽欠　○散念常の如し　但し三世を改めて不動を用ふるなり。無量壽決定如

（二）胃地云云　原本梵字なるも此に對譯文字とせり。



此の萬タラは高隆寺の寄傳なり。指南とすべし、指南とすべし。

師云く　此の法トロハ香を祕事となす或は…香沈水香と文り蘇油を之に入れよ。　鉢に煎じ入れ中瓶の後に

(二)並べよ結願了て之を服す云云如何大佛頂法の如し。

來の眞言之を加へ誦すべし。

○護摩　○本尊段　二佛並べ供す　勤請供養多寶印明用、无所不至　阿阿闍噁芥子用ゝ　○諸尊段　八菩薩　台諸菩薩印言金合唵乞又多多嚩焰欠娑縛賀　○世天段　持國十羅刹を加へ供すなり、大鉤召印言之を用ふること常の如し

曼荼羅西方に向へ增益に依るべきか、但し行者の願求に依て息災等又た咎なし、餘法皆以て此の如し。

(一)並に作る。一本に置

(一)羅以下種子は原本は梵字なるも此に對譯字となす。

(二)原文、已下吽欠まで朱書す。

(三)原本梵字、對譯文字は聖觀音軌による。

讀經の者、先づ不動の呪を誦し了て而して後に法花を誦すべし云云、十羅刹中黑子は即ち不動なり。

○十羅刹眞言　唵阿帝伊利野娑縛賀

(一)羅藍　縛毘　訶羅黑　訐花　斛曲

多多　曦兎　地持　鉤畢　吒棄

(二)師口に云く小野　塔法身多寶應身釋迦化身　是れ三身卽一の義なり。本尊加持八葉印を用ふ

(朱小野)釋迦多寶を以て觀ずる樣。

釋迦は台大、多寶は金大なりと、然れば則ち兩界行ト觀念爪ルナリ。

鳥羽境所に於て之を受く。

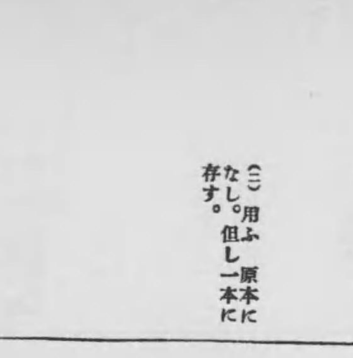
木幡(キハタ)流　○発○八葉　○法界定印　○歸命阿、阿、闇

(三)惡引唲囉吽引欠

阿ア示　唵三身如來　阿ア開　噁入　暗悟　勤修寺傳

嚩、

儀軌の意は兩界を兼ぬ仍て多分印言
通じて之を用ふ、但し此の說は吉か。
本尊は曼荼羅之を(二)用ふべし。召請、
撥遣の時は五古印を用ふべし、自餘の
法皆な此の如し。
後加持は不動眞言を用ふべきなり慈救
必ず寶山印を用ふべし云云
無量壽命決定如來眞言。(三)曩謨、引阿
跛哩旗跢引欲、枳嬢二合引曩尾顚室者二合也囉逝
引捺羅二合也、但他引藥跢引也、唵、引薩縛僧去塞迦二合引囉跛哩秣の反駄達麼鼻音帝摩賀引曩也、
跛哩縛引嚕引娑縛二合賀引
此の眞言七遍を誦すれば、能く壽命を延ばし能く決定天壽の惡業を滅して身心輕安な
ることを獲得す、諸の眠沉及以び懈怠を離れ此の妙法蓮花經を受持せば、速かに成就



(一)圖中の大字は原本に梵字、又た細字朱書なり。
(二)用ふ 原本になし。但し一本に存す。
(三)原本梵字、對譯文字は法花軌による。

すること を得。

◎◎理趣經

○第一段　金剛手　左拳を腰に安し右を乳に當て、三度上下せよ吽引(朱)或は二拳を左右の腰に
安せよ。唵縛日羅吽娑縛賀

○第二段　大日　智拳印　但し如來拳印なり、此れは智拳印といふ。　惡平聲重呼引

○第三段　降三世　五胎印　內外共に之を用ふ、但し外云云　吽短聲

○第四段　觀自在　二手金剛拳にして右の小指を以て左拳の小指より之を開き、
開くに隨つて一一紇唎引合を誦す。紇唎

○第五段　虛空藏　外縛して二風相ひ合せて寶形の如くし頂上に安せよ。怛覽

○第六段　金剛拳　二手金剛拳にして右を以て左の上に安せよ。嚩

○第七段　文殊　左拳を左の膝の上に安し梵夾を持するが如くし、右拳を以て右
膝の上に立て、劒を持する如くせよ。菴

○第八段　轉法輪　小金剛輪印　但し小指を鉤せず　吽

○第九段　虛空庫　左右劒印にして左は內に、右は外にして互に胸を抱く如くし、胸前にして一たび舞ひ亦た交へて頂に安せよ。唵

○第十段　摧一切魔　左右の空を以て左右の水火の甲を押せ、二小・二風を曲め立てゝ口に當て、左右を牙形の如くし三たび來去せよ。郝

○第十一段　普賢　金剛合掌。吽

○第十二段　外金剛部　外五古印。怛嚩

○第十三段　七母　外縛して右の風を三たび來去せよ、毗欲

○第十四段　未度迦羅　金剛合掌。娑嚩

○第十五段　四姉妹女　金剛合掌。唅

○第十六段　無量無邊の段（圖に五部具會といふは、金剛界曼荼羅を行ずるか。）　無印言（或師の說かく、印言あり、謂く吽の明を用ふ、金剛夜叉の印云云）

○第十七段　五祕密　五種印あり。言は皆な重の吽字を用ふ。吽　一は初段印

二は蓮花合掌して二小・二大を開き立てよ。　三は左手の大を以て水の甲を押せ、右は腰に安け（月天の印に似たり）　四は梵夾印（左手を仰けて右手を覆へ）　五は外縛印、總印外五胡印（或は三昧耶會の金剛薩埵印、謂く二中を立て合せ二空・二地を開け）吽　次に大樂眞言　唵摩訶蘇佉縛曰羅薩佗夜薩嚩薩怛嚩毗欲弱

吽鍐解

○法息災に付て之を行ず。（勸請（禮佛）本尊句なし。）　只だ金剛界なり。　○吽　○五古（忍願を立てゝ針の如くし大小を開いて而も立てよ）　唵縛日羅薩怛縛噁　佛眼、大日、本尊、三世、一字。

◎六字

○（二）娑吒阿吃灑羅素怛覽　○大聖慈悲六字尊　蓮花部中諸聖衆　○調伏に付て之を修す（名香　沈　丁子　麝香）

○行法常の如し、此の法は觀宿と明撰との兩傳あり但し成就院の樣都合にて之を用ふ。　三力の偈の後　六口伴侶讀經す、口別に一時に六卷、都合三時に百八卷なり、一字金を打たず、又た佛眼本尊等の呪を誦せざるなり。

○娑（サ）廣澤流、但し（一）古　同流或は蓮花を用ふるは息災の時なり、但し祕傳あり。

○尊像（正觀音但し說あり。）

（二）觀想せよ字八功德水となる、廣く法界に遍して、涯際あることなし、其の中心の欠（クム）字變じて寶山となる、四寶の所成なり、其の上に大樓閣あり、高うして中邊なし、諸の大妙寶王種種に嚴飾せり、其の中に𑖀字あり變じて蓮花座となる、座上に𑖀字あり

（二）娑吒云云　原本梵字なるも今對譯文字となす。

（二）觀想云云　道場觀。

轉じて獨貼杵となる、杵轉じて觀自在菩薩となる、蓮花部の聖衆乃至天龍八部等前後に圍繞す(朱)但しまた用ひ樣あり。

○鈴　○次に本尊内三、せあり。(朱)慈怒なり。眞言　常の如し。(朱)慈怒常の如し。

○不動刀　○大威德佛印其の中に三字　○八供四攝等或は之を用ひず。　○本尊加持内三四處を印す、眞言常の如し。

○正念誦大日、本尊常の如し

○(二)又の印　二手各の大指を以て(二)中指頭を捻せよ。而して左手掌を仰け、右手をもて掌を覆ひ、右の頭指を以て左の大指(三)中指の間に入れよ、又た左の小指を以て右の大指・中指の間に入れ、右の小指を四處を加持す、(朱)是を輪印といふなり、朱は口決を付くるなり。

○眞言常の如し。　○散念誦、　佛眼、　大日、　正觀　六字　八字　大威德時別に一卷若しは三卷　一字本尊、時別に五百反結線す、百反に一結、三時に十五結なり、但し結願の時八結、仍て七ケ日に百八結となる、糸の長さ三尺五寸

○護摩常の如し。(朱)師云く此の念誦は正觀音法を用ふべし云云　○本尊段印は内三結、眞言常の如し　(五)百八乳木一三類形之を燒く長さ三寸、形木を以て之を擂れ、件の次第を師は人天地と說く。　次に(六)微妙物を以て芥子に和し燒け。已上大威德の呪を以て之を燒く。

○諸尊段中央金輪、廻り六觀音、不動、大威德或は(七)阿六觀音は小野說をいふか六觀音觀置する樣二說　觀宿は逆置、明詮は順置　智拳印を以て穆字を誦し、請句四字明を加へよ常の如し護摩し畢て鈴杵を取り置き、後六方を結す有が說かく、東南西北上下に六字呪を用ふ　(朱)師云く六方陣

(一)又の印　觀宿傳なり。(二)(三)中指の傍に朱書して無明といふ。(四)無名の傍に朱書して中の字あり　(五)百八の傍の朱書に、長さ四寸八指、皆儘の筯、と。十二の乳木同じく生氣方を取ると。(六)微妙物の傍に朱書して一生盡なり　(七)阿一本に除く　(八)吽泮吒の下、一本に加ふの字あり。(二)貝一本に具に作る。　(二)合一本に人に作る。　(三)觀一本に現の字に作る。　(四)一字云云の傍に朱書して云く、正觀音同體の義と

難を作す諸鬼神怨家等之を射去れ、只だ思へ方々爐底六度之を射るに七矢の一殘るは意あるなり、或は說く世天段に之を射る云云小野說

○禮佛句　南無六字章句觀世音三反　○御加持本尊呪　○伴僧　○別經三卷或は眞言二千反か

○結願の時　弓を射ての後、壇迦の弓箭七(二)貝並に脇机弓箭皆取て爐火に燒き畢れ。結願の時には護摩了て未だ物具を取り置かざる前に之を燒く、爐の中に土器を置いて其の上に於て之を燒き、彼の灰を取て相具し結糸して施主の許に送るなり、糸は之を帶持せよ。但し生氣方に埋むは吉灰は湯を以て之を服せよ云云但し近代は用ひず、

○三類形の事本說は天地人なり、師云く、若し人有て呪咀せば先づ人形を燒け、自餘は之に准ず。或る抄物に云く、此の法に三類形は本說なしと云云

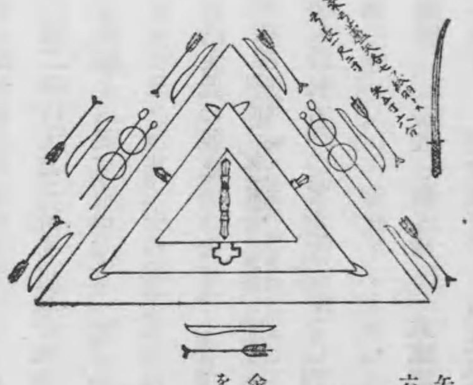
○經の事(朱)或る師云く、百八乳木了て(二)合怨家を鉤召し之を燒く、五大無碍觀を成ず云云　本說には護摩の阿闍梨一字呪の前に讀む。

然して先づ讀む、是れ又た師の說なり　壇は之を忍び難きが故か。結線も本法は經の次なり。

○觀行の事　是れ彼の身を損し其の命根を斷せんと欲するには非ず、其の惡作の心を燒滅し、三毒の煩惱を消除せんがためなり、外には降伏の相を(三)觀じ、內には慈悲心を發す、然らずんば自を損し他を損す。

○本尊の事三傳　一正觀音本流なり　二曼荼羅小野は但し此の方を用ふ。曼荼羅行時、(四)一字金輪を以て本尊となす、三明王小野黑佛なり　以て本尊となす云云。曼荼羅に付て行ずる時、聖觀音を六觀音皆なり。

又た云く、六觀音を本尊となす。　聖觀音一體を以てす。　又た五大尊を懸け用ふ
又た種子曼荼羅有り。　又た六字明王中央に曼荼羅有り。
此等の中、六字明王とは(一)式法なり、通用せず、六觀音を以て本尊とするを吉とす
るなり、種子は前に同じ。
或人云く、此の法は觀宿僧正の時始めて之を行じ出す。
裏書に云く。　○道場觀（曼荼羅に付く　兩說取意私に之を記す）心の前に阿字あり字變じて七寶莊嚴の宮殿
樓閣となる、樓閣の中に七大月輪あり、月輪毎に各の蓮花座あり、中央の蓮花の上
に敎嚕吽（ホロム）字あり、字變じて金輪となる、金輪變じて一字頂輪王身となる、法界定印
に住す、微妙の莊嚴を以て其の佛身を飾る、前月輪の中に薩字あり轉じて獨古杵と
なる、杵轉じて聖觀自在菩薩（觀音即ち本尊の字）となる、右に遶り蓮花座あり、上に各の蓮花あ
り、變じて准胝（千手馬頭、十一、如意輪）諸觀音となる、敎令輪の不動・大威德の二尊侍衞合掌し、
天子飛天等前後にあり、及び蓮花部の聖衆乃至天龍八部等圍繞す（七處加持、眞言は常の如し）云云用否
如何ん。
槪並びに鳥居(二)斷矢（或說に無尻矢云云　小野



例へば槪、鳥居木、並べ立て結び付く、或は直く立つ云云　大弓一張、本說には張る（或は張らず小野の說か）
矢十二隻內ソヤ六隻、槪料四、　金剛盤下編（アム）之を置く
鳥居料二、　餘は赤羽なり
カリマタ六隻　此の弓矢
射料佛右立　本說に射料なり、近來
脇札のを用　脇机桑弓一張
ふるなり　葦の矢の六射の料之を置く、結糸紙裏之を置く、
經一卷あり
糸は七筋を一隻となし十四筋を以て合すなり。

○六字經略次第　觀想せよ、心の前に引字あり、字變じて七寶莊嚴の宮殿樓閣となる、
樓閣中に七大月輪あり、月輪毎に各の蓮花座あり、中央の蓮花上に敎嚕吽（ホロン）字あり、字
變じて金輪となる、金輪變じて一字佛頂輪王の身となる、法界定印に住せり、微妙莊

(一)式の字に作る。一本に或

(二)斷に作る。一本に新

嚴を以て其の佛身を飾れり、餘の六蓮花の座の上に各の蓮花あり、蓮花變じて六觀音となる、前後左右に圍繞す、其の聖觀音の前に當て一蓮花座あり、座上に紇唎字あり、變じて大刀（タウ）となる、刀變じて六觀音の身となる、頂に猿冠を戴き、形色青黒にして六臂を具足せり、左右の第一の兩手、俱に三古印を作り、左の第二手に三戟叉を(一)作る、右の第二手に大刀を持す、左の次手に月輪を持し、右の次手に日輪を持す、怨家を調伏し萬願を成就する形なり、敎令輪不動・大威德の二尊侍衞合掌し、天子飛天等前後にあり、及び蓮花(二)中の聖衆皆な壇上にあり、乃至天龍八部等前後左右に圍繞す。

已上此の觀を吉となす但し種子は改むべきか。

○明　撰樣明仙は天台二會の講師、餘處の師なり。明詮は元興寺法相宗三會已講、元と律師、次に僧都、隱者なり、但し共に眞言の師にあらざるはいかん。

○娑　○獨古　○尊形正觀音但し口決　○印○三古言常の如し　○鈴の次に　○本尊　○不動　○大威德

○護摩　○火　○本　○諸　大威德、　施　護摩畢りて脇机の弓箭を以て六方を(三)並す　後加持本呪　已上は廣澤流の大旨。

○觀宿樣　東寺眞言宗、聖寶灌頂の弟子なり。

(一)作に作る。一本に持

(二)花の下の部に一字脫するか。

(三)井の字に作る。一本に結

○誡　○塔　○尊形黒佛弓刀　六臂にて黒色の像なり、或は赤肉色。　○輪印　○或は三古印、護摩に用ふ。

○鈴の次に　○大日　○正觀　○本尊

○護摩　三類形、降三世の呪を以て之を燒く積薪の次第東西北南　○火　大威德部主段と雙す　○本○諸

○後火或は之を用ひず。護摩了て六方結六字呪畔殘吒を加へ用ふべし。

○後加持本呪　○尺鏡を用ふるあり獨鈷法之れあり。

已上小野流　結糸の事は伴僧の役云云護摩始め程に結首するなり。

○散念誦　佛眼　大日　正觀音　六字　馬頭　八字　不動　大威德

一字。

(朱)先づ鏡面を洗ひて施主の影を移し紙を以て之を裏み送らるべきなり已上畢る。

○六字　正觀音なり、正觀音は即ち六觀音、六觀音は即ち六字、故に六字といふか。　天台(二)六字は即ち之れ六觀音と經文に出づるなり云云

六字大明陁羅尼に曰く莊嚴寶王經に出づ　唵引摩抳鉢納銘二合叶引

諸魔障を作す者、悉く皆な怖れ散じて馳走す云云

國譯澤見抄第二　終

(一)台の下一本に云く〇字あり。

國譯澤見抄 第三

○聖觀音　○千手　○馬頭　○十一面　○准胝　○如意輪　○不空羂索　○白衣
○葉衣　○大勢至

○聖觀音

○阿里也縛路吉帝(アリヤバローキテイシヴダラ)人縛羅正法金剛又は本淨金剛　○(一)大慈大悲觀世音　蓮花部中諸聖衆　○行儀二様一は觀行軌に依る　別行なり。一は念誦儀軌に依る　大法なり。　○息災に之を行ず。○(二)娑(ス)　○(三)未敷蓮赤師說は獨鈷を以て蓮となす。　○(四)壇中に娑字あり、八葉の蓮花となる、寶髻(スイ)を具せり、其の上に阿字あり淨月輪となる、月輪の中に娑字あり、黃金色にして無量の光明を具せり、其の字變じて未敷蓮獨古を蓮となす　となる、變じて觀自在菩薩となる、身色黃金にして光明赫奕たり、輕穀衣を被り、赤色の裙(クロモ)を着す、左手は臍(サイ)に當て未敷蓮を執り、右手は胸に當て開花の勢を作す、頭冠瓔珞ありて、首に無量壽佛を戴き、及び蓮花部の聖衆前後に圍繞す。

(一) 大慈大悲　勸請。
(二) 娑　種子梵字なり。
(三) 未敷蓮　三形未敷蓮の傍の朱書に少しき火開くなりとあり。
(四) 壇中云云　道場觀。

○印(内縛して立て、右の大を(朱)左の大に入れよ)　(一)唵(アロリキヤ)阿盧力迦娑婆賀、正念誦並に芥子御加持等に之を用ふ。已上觀行儀軌に付て別行を說くと雖、今は金剛界の大法に依て之を行ずべし、念誦儀軌の意なり。

○又た紇哩(リク)喇　○八葉蓮花　外縛して二頭を蓮形にして二大を並べ立てよ。　是れ三昧耶(サマヤ)　(二)唵嚩曰羅達摩紇哩ソハカ。已上念誦儀軌文

○鈴の次に(三)○大日○本尊ニ八供・四攝等　○入我我入の所欲印を用ふべし(四)儀軌にあり眞言口決

云云　即ち觀せよ自心中に八葉の蓮花あり、中に於て阿字を想へ、金色の光を放ちて印と相應す、彼の阿字を想ひ了んぬれば、一切の法本來不生なり、即ち眞言を誦して曰く、(朱)娜莫三滿多母馱南惡尾羅吽欠。眞言八反を誦して次に印をもて身の五處を加持せよ。(朱)印は前にあり○正念誦(前にあり)　(朱)

卷數に入れず　本尊ニ(朱)卷數には一なり。或は延命　八字或は大威　馬頭　一字。

○護摩　○本尊段初の印言を以て一切に之を用ひよ。　○諸尊段三十七尊、或は六觀音　○後加持初言　○伴僧同じ。

○功能　經に云く　但し其の心を淨めて一萬遍を誦すれば、一切の業障皆な清淨なることを得て、所求の意願皆な滿足することを得。　○禮佛淺說

(一) 原本梵字あり　今は省略す。
(二) 原本梵字あり　今は省略す。
(三) 傍の朱書に云く、今は前記に付之を加へ用ふと。
(四) 傍の朱書に云く大日なり小野は之を以て祕と爲すと。

(一)原本梵字、今は小野眞言集所載の對譯文字より抜出す。(二)千手云云　勸請。(三)朱書に云く、台圖眞言の終、或は(朱)ノリ意珠。(四)妙(朱)ヨシ山云云　道場觀。

(五)原本梵字あれ共、之を省略す　(六)原本に註して云く、散念誦に無量壽並に多聞亦た之を用ひず但し小野珠に之を用ふるなりと。

❀千手

○(一)娑賀(サカ)薩羅(サラ)二(ホ)合(シャ)歩惹阿去(リヤ)引哩耶去嚩(ハロ)路引吉帝(キティ)引濕拂(シュハ)二(ラク)合羅　○(二)千手千眼觀世音　蓮花部

中諸聖衆　○息災に之を行ず(小野は敬愛に之を行ず)　○名香安息(療治病經に見ゆ。)　○行法本軌に依れば金剛界に付く仍て大師(御次第等此の如し。)　○紇哩(三)　○紅蓮花但し師說に云く、所求の物に依る云云　此の法は三形を用ひず口決。

○紅蓮花を想へ、蓮花の上に於て八大金剛柱(ヌウ)あり、寶樓閣を成ず、(四)妙高山の頂に八葉の大蓮花を想へ、字より大光明を流出して遍く十方世界を照す、所有の蓮花臺の中に紇哩の字を想へ、字より大光明を流出して遍く十方世界を照す、所有の衆苦の衆生此の光に照觸して皆な解脫を得、又た大光明の中より紅色の蓮花(朱)或は如意珠を涌出す、蓮花變じて千手千眼の觀自在菩薩となる、相好圓滿して威儀具足せり、十波羅蜜及び八供等の菩薩各の本位に住せり、又た樓閣の四隅に於て白衣・大白衣・多羅・毗俱胝(ビクテ)等の四菩薩あり、各の無量の蓮花部の聖衆と前後に圍繞す云云

○鈴　○次に大日　○本尊　○阿閦　○八供・四攝等　○印二手金合して忍願を蓮合し禮慧禪智を拆し、之を開きて各の直く竪(直)唵縛(バザラ)曰羅達磨(キャク)嚩哩つ　○正念誦大日本尊　○又印八葉祕印となす(朱)千光眼呪　○小呪を誦す前の如し　(朱)タラ(テ)小呪　(六)○散念誦　佛眼　大日　無量壽(朱)小野之を用ふ　正觀音　白衣　本尊大小

馬頭　八字　大井大威德　多聞(朱)小野之を用ふ　一字

○護摩　○本尊段初の印言を以て一切に之を用ふ　○後火天段多聞天に之を供す　印、內に叉へ、二水を立て合せ二風を鉤の如くして之を招け、小呪は常の如し。

○後加持陀羅尼　伴僧同じ　○禮佛漢號　○功能　執に云く　此の陀羅尼を誦すれば　能く四種成就の事を作す　所有の希望　世間の果報皆な圓滿することを得と文り。

又た云く　敎に依て修習すれば　久しからずして當さに　廣大成就することを得べしと(朱)文り

小野　○祕印虛合して大小を開き立て、二中の端を少しく開いて未敷蓮の如くするなり。　○眞言、染愛王明の末に(二)縛曰羅達麼嚩哩を加ふるなり。　○部主愛染王なり。

裏書に云く　二十五有とは、地獄　畜生　餓鬼　阿修羅四惡趣　東勝身州　西牛貨州　北上勝州　南贍部州　四天王天　忉利天　夜摩天　兜率天　化樂天　他化自在天六欲天　已上欲界の十四有

初禪　梵王　二禪　三禪　四禪四靜慮　無想天　淨居阿那含　已上色界の七有

空處　識處　無所有處　悲想非非想處　已上無色界の四有

(一)原本梵字、對譯文字は前文の儘引用す。

上の大悲所現の二十五有の菩薩の如く、各の十一面四十手を具し、二十五の三昧を得て二十五有を斷ず。（一は當配あり、四十を合して千手千眼となす。）

千手經に云く　一宿五遍とは　諸人意解の中に一宿者は行法に六時の宿あり、晝夜に各の三なり、此の六時に於て各の五遍を誦すれば、惣じて三十返となる、是の故に三十種の勝利あり、謂く十五惡死を除いて十五善生を得るなり、晝三時に十五返を滿するが故に十五善生を得、夜三時に十五返を滿するが故に十五惡死を除くなり、晝は陽にして生に屬し、夜は陰にして死に屬す、是の故に死を治し益を生ず、故に晝夜定時の宿に誦持を勸む云云。

此の法　腹病を療すといふ事。　鉢を以て三形と爲せ、但し香水を盛る事等之れあり云云。　或抄に云く、　千光眼觀音　多聞天の身を現ずと。

※馬頭

○(一)阿里也賀耶(アリヤカヤ)傑哩縛(キリバ)迅疾金剛又　○(二)大聖馬頭觀世音　蓮花部中諸聖衆　○行法常の如し

○息災に之を行ず。　小野の說は調伏に之を行ず　○哈(カン)合掌の呪の初、　○白馬(バク)の頭(カシラ)　小野の說、黑馬の頭を用ふ。

(一)阿里也賀耶傑哩縛の對譯文字は八字文殊軌に出づ。(二)大聖云云　勸請。

(二)壇中云云　道場觀。

(二)壇中に發字あり、變じて蓮花座となる、座の上に𑖦(カ)字あり、字變じて白馬頭となる、變じて賀耶(カヤ)紇哩縛(キリバ)明王となる、其の身は黃に非ず赤に非ず、日の初めて出づる色の如し、白蓮花を以て瓔珞となし其の身を莊嚴せり、光焰猛威赫奕として鬘(マン)の如し、指甲(シコウ)長利にして雙牙(グ)上さまに出でたり、師子の項(ウナジ)の毛の如し、極孔(ク)怒の狀を作す、此れは是れ蓮花部忿怒持明王なり、猶ほ轉輪王の寶馬の如く四州を巡履し、一切の時、一切の處に於て其の心息まず、諸の菩薩の大精進力も亦た復た是の如し、所以(ゆえ)に是の如くの威猛の勢を得、生死重障の中に於て身命を顧みず、摧伏せらるゝ者多し、正しく白淨大悲たる心の故に白蓮花を用ひて而も其の身を嚴るなり、乃至蓮花部の聖衆前後に圍繞す云云。

○鈴　○大日　○本尊　印呪の二は下に說くが如し　○阿閦　○八供四攝等　○根本印　虛合にして二風・二水を屈して各の背け合せ、二大微しく屈して相ひ去れ(朱　馬口形。師說に、二大を屈して二風の端を、二空の甲と少し許り相離せよ(朱)法王御傳)

○同呪　歸命(カンム)含吽(キャク)佉那野(ハムシャクソハタヤ)、半惹薩巨吒耶、莎訶　○正念誦　大日本尊　心呪を誦ず。

○又印　外縛して二大を立つ。(朱)心印と名く　受壇法呪　秘印となす。

○心呪　唵阿密利都納(アミリトトハ)嚩吽發吒、莎訶　○散念誦　佛眼　大日　本尊　心呪或は二

白衣　八字　大威敎　一字

○護摩　○本尊段心印呪を以て一切に用ふ。小野說、呂は息災に塗る文　○調伏に行ずるなり。　○後加持根本呪

伴僧同じ　○功能　二卷の軌に云く　是れ修行者所住の處、四十里の內、魔事あることなし。

又た云く　諸の障難を離れて威德自在にして其の人大威怒王の身と等同なり。

○禮佛梵號

裏書に云く　須彌山の上に寶樓閣を觀ぜよ、中に蓮花臺あり、上に紇哩字あり大光明を放てり、光明の中より馬頭威怒王の身を涌出す、四面有りて皆忿怒し、虎牙上み下もに出現す、八臂各の器杖を執れり、寶盤石上の蓮花の座に安坐す、彼れ中面上碧にして馬頭髮螺(オーツ)焰の如し、身色赫奕として恰も日輪の如し、遍身の火焰劫火の威に逾(こえ)たり、無量の眷屬と四方に圍繞し曼荼羅會を成ず(朱)之を用ふべし。

○十一面

○阿里也(アリヤ)斛迦娜奢母佉(シャボキャ)變異金剛　○(二)大慈大悲十一面　蓮花部中諸聖衆　○行法常の如し

○息災之を修す。○名香沈、薰陸、檀香等儀軌に見ゆ　○迦　○軍持

(二)大海の中に須彌山あり四寶の所成なり、山上に寶樓閣あり、其の中に曼荼羅壇場あり、壇中に八葉の蓮花あり、其の上に淨月輪あり、月輪の上に迦字あり、變じて軍持となる、變じて十一面觀自在菩薩の身となる、四臂を具足せり、右の第一の手に念珠を把り、第二の手には施無畏を結び、第二の手には蓮花を持し、第四の手には軍持を執る、十一面とは當前の三面は寂靜の相、右邊の三面は威怒(ヌ)の相、左邊の三面は利牙(グ)出現の相、後(ウシロ)の一面は笑怒(ヤウヌ)の容、最(カタナ)上の一面は如來の相、頭冠は各の化佛有り、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴せり、蓮花部の聖衆及び護世威德天等悉く圍繞す。

○印合掌して印を以て頂に置け卽ち成ず(朱)口傳あり卽ち本尊の身と成ると文り師云く深く文ふるは秘說　香隆寺說　○小呪　(二)唵摩(マカ)訶迦盧尼伽娑婆賀(キャロニキャ)

○正念誦　大日本尊　上の呪　○又の印八葉尤も秘となす。花藏院僧都の口傳なり。　(三)唵嚕鷄(ロケイジムバラキリク)入縛羅紇哩(定れ世間流布の小呪なり、未だ本說を見ず、智證唐に於て書かしめ傳ふ云云

正觀　白衣　或は延命　八字　馬頂(或は炎魔天)　伴僧同じ

○護摩　○本尊段初印呪を以て一切に用ふ。　○後加持　伴僧同じ

(四)但儞也他唵那羅那羅地哩地哩度嚕度嚕壹(ナ)嚩智(レイ)喬鑠者鑠鉢(バラ)羅者鑠鉢羅者鑠、矩蘇銘(クソメイ)

(一)大悲云云　勸請。

(一)大海云云　道場觀。

(二)原本に梵字あり、今は略す。

(三)原本に梵字あり今は略す。

(四)原本に梵字あり今は略す。

矩蘇摩嚩爍壹里抳里止里止致惹羅摩跛曩也、跛羅摩秫蛄、薩怛嚩摩訶迦嚕尼迦娑嚩訶。

○功能　軌に出づ。我が心密語　若しは誦し若しは持すれば　一切の意願皆な滿足することを得。

又た云く　一切有情を　利益し安樂にし　能く疾病を除き　及び非命を制す

又た云く　一切の　惡夢不祥を遠離し　吉祥を獲得し　皆な除愈を得。

と文り。

○禮佛　漢號、若しは梵號

○准胝

○阿利耶沒馱婆伽縛底最勝金剛　○(一)准胝佛母大薩埵　如來部中諸聖衆　○行法常の如し　○息災に之を行ず。　但し行者は東に向へよ。　○(二)母　○(三)賢瓶

(四)大海の中に蓮花あり、難陁・跋難陀の二龍王共に蓮花莖を扶く、花臺の上に阿字あり、淨月輪となる、輪の中に母字あり變じて賢瓶となる、賢瓶變じて准提佛母となる、身黃白色にして種種に莊嚴せり、輕穀衣を着し白螺を釧となす、面に三目あり身に十八臂を具す、上の二手は說法の相を作る、右の第二の手は施無畏、第三の手には劒を把り、第四の手に數珠を把り、第五の手は微若布羅迦漢に子滿果、不空の本には俱緣菓といふ。此の間になく西國にありを把り、第六の手は鉞斧を把り、第七の手は劒を把り、第八の手は跋折羅を把り、第九の手は寶鬘を把る、左の第二の手は如意寶幢を把り、第三の手は蓮花を把り、第四の手は澡罐を把り、第五の手は索を把り、第六の手は輪を把り、第七の手は螺を把り、第八の手は賢瓶を把り、第九の手は般若波羅蜜夾を把り、恰愍の眼を作して行者を看る、威儀具足し相好圓滿せり、乃至八供四攝等の菩薩恭敬し圍繞す。

○迎請印言(朱)但し二風を中の背に付けよ。　唵左欒祖欒准泥翳醯嚕嘓縛誐縛底娑縛賀

○避除印言左右大指を以て地・水・風の甲を押し火の端を立て合せ即ち成ず、二風を以て身を旋すこと三遍、　唵俱嚕憚那訖惹

○鈴　○次に大日　○本尊(朱)後倣正。)但し師說は二空を開いて風の側に著け、二風を以て二火に付く是を身印と名く、小呪用には初に(二)怛姪他を加ふるなり。○正觀音內縛して右の大を立つ唵阿嚕力迦娑縛賀　○八供四攝等　○前供養以下常の如し。○字輪觀常の如し(朱)布字同じ

○本印言前身印、並に(三)怛姪他を加ふ。　○正念誦大日本尊大呪小呪用には　○又の印外縛して二風を並べ蓮形にし、(朱)師說は內縛二空並べ立つ根本護身と名く。　○心

(一)准胝云云　勸請。
(二)母　種子梵字
(三)賢瓶　三昧耶形。
(四)大海云云　道場觀。

(一)怛姪他　原本梵字、今の對譯文字は准胝軌による。
(二)字輪觀は原本梵字なるも之を略せり。
(三)怛姪他　原本梵字

眞言　唵迦摩黎尾摩黎准胝ソハカ。　○散念誦　佛眼　大日　本尊小呪　正觀

白衣　八字　馬頭　炎魔　大金剛　一字

○護摩　○本尊段前身の印、並に小呪を以て用ふ。　○諸尊段　三十七尊　佛部の時　六觀音　觀音の時鉤印し各各の一度　○後火天段或は北斗之を行ず　召北斗の印　但し小野の說なり　眞言は字を加ふ。　天段炎魔天、約三度を加ふ。眞言は常の如し　（朱）牧嚕昨娑沛吒婆の言なり。　○世

○後加持大呪　伴僧同じ。

娜慕颯哆南、三藐三勃陀俱胝南怛姪他唵左隸祖隸准泥莎嚩訶

天人丈夫觀世音　令我人中受安樂　不空の軌に云く　滅罪轉除　災害疾病

五星凌逼　逼皆除滅と文り

○禮佛漢號

裏書　白衣觀音要記に云く　准泥を以て佛母の義とするは、五部中の衆多の諸佛を生長する義に約するが故に、佛母といふ義なり云云。

獨行法に云く　若し大旱せば中夜に於て安悉香

（一）玄　或はいふ昔の字か。

（備考）圖中の漢字は悉！朱書す。種子は梵字なるも今は略す。

を燒いて印を結んで五方の龍に勅し、速かに降雨せしむべし、若し三日雨降らずんば卽ち沉香を須ひて五箇の龍を兌せ、各の長さ九寸、隨方の五色を各の壇上に安して一七日法に依て念誦せば、卽ち雨を降すことを得、若し晴れしむ須くんば卽ち面を仰けて天に向ひ、陀羅尼八十遍を誦すれば卽ち晴る。

獨部法に云く、三歲口傳に云く　若し茲蔚・茲蔚尼・童男・童女有て、命終盡きんと欲するに、宿殃の大橫小橫を問はず、但し去命盡して三七日、此の法に遇ふことを得ば、閻羅王に勅し幽冥所に命じて更に延命を與へ、終れるの命をして却て增長することを得しめむ云云。

○○如意輪

○阿里也（アリヤ）眞陀摩尼（シンタマニ）持寶金剛　○大聖云云　勸請。

○行法常の如し　○息災に付く。○紇哩恒洛（朱）或る師恒洛　○金剛寶菩薩紅蓮上の寶なり。（朱）或る師は輪。口には寶　○心前云云　道場。

（二）心前に刻字あり、變じて七寶の宮殿樓閣となる、其の道場の中に衆字あり變じて紅蓮花となる、花臺の上に刻字あり變じて滿月輪となる、上に紇哩字あり左右に恒洛、

○（二）大聖如意輪觀世音　蓮花部中諸聖衆

怛洛の字、三字變じて金剛寶と爲る、金剛寶變じて如意輪觀音となる、身色黃金にして六臂を具足す、冠中に自在王あり、說法の相に住せり、千の光明を流出して六道四生を照せり、右の第一の手の思惟は有情を愍念する相なり、第二手に如意寶を持するは一切の願を滿せんとするなり、第三に念珠を持する、傍生の苦を度せんと爲す、左の第一手は光明山を按す、傾動なきことを成就す、第二は蓮花を持す、能く諸の非法を淨す、第三手は輪を持す、能く無上の法を轉ず、六臂廣博の體にして、能く六道に遊んで、大悲方便を以て諸の有情の苦を斷ず、八大觀音及び蓮花部の無量の聖衆前後に圍繞せり云云。

○召請印言 內縛して右の大指を以て之を招け　唵阿嚕力迦翳醯枳娑賀　○辟除　馬頭の印言を用ふ（嘗の如し）

○鈴　○次に大日　○本尊 三ながら之を用ふ　○八供四攝等　已下常の如し

○金剛藏 金剛部三古の印なり（朱）法皇の御傳　大呪　曩謨羅怛曩怛羅夜也、曩莫唵縛曰羅都納縛夜娑婆賀

○根本印言 掌を平にして心に當て忍・願・を薄業の如くし、進・力・を摩尼形として餘度盡く檢の如くせよ。　阿哩夜嚩路枳帝濕嚩囉也冒地薩怛嚩也摩訶薩埵縛也摩訶迦嚩捉迦也怛儞也他唵斫迦囉鉢哩怛振多摩捉摩訶鉢頭迷嚕嚕底瑟姹入縛攞阿迦哩灑也吽泮吒薩嚩訶

○心印 前印に准ず、地・水を結し縛す。　同呪　唵鉢娜摩震多摩尼入縛羅吽　○心中心印 前印に准ず、二火縛して二水を立て合せ、一（一）唵婆囉駄鉢娜迷吽（朱）小野之を紀す　○又印 心中心印の言之を用ひよ。　○散念誦　佛眼大日或は寶生　本尊 三或は十一面　八字（二）寶菩薩　馬頭　金剛藏　一字

○護摩　（朱）裏書に云く、南方忿怒金剛藏王なり、是れ寶部軍荼利なる故に、軍荼利は虛空菩薩忿怒なり云云。　○本尊段 心中心印の言を以て一切に用ふ　○後加持大呪　伴僧同じ　○功能　金軌に云く　六臂廣博の體にして　能く六道に遊んで　大悲方便を以て　有情の苦を斷除す。

又た云く　卽ち此の如意の法　能く諸の意願を成ず。　○禮佛漢號

裏書　小野の說　○怛洛　菩薩 羯磨會なり、本尊 不動 古祥 大金剛輪 一字　○ 一山　○中印言　○正念 中言　○散念 佛 大 寶生 寶

○二臂像の事 除災敎令法に出づ　左寶　右與願なり　印一 中印なり　言二 中下　光明山と　は　白花山なり 補陀洛山是れなり　如意輪　觀自在 正なり　得大勢　多羅尊 （朱）是は眼の義なり　毗俱胝　八大觀音とは　白處尊　一髻羅刹　馬頭　已上衆僧正の說

（一）傍に朱書して云く、身の五處を加持すれば煩惱業障を除く乃至六道を淨め抜苦與樂すと。

（二）寶の字の上に一本に或の字あり

○○不空羂索

○阿里也(アリヤ)慕(キヤ)伽波奢(キヤシヤ)等引金剛　○不空羂索大聖尊　蓮花部中諸聖衆　本尊聖者

大聖大悲　不空羂索　○行法(常の如し)　○慕(ボ)　○羂索三形(師說最祕と爲す)　○尊像(八臂の像を用ふ。)

(一)樓閣の中に八葉の大蓮花臺あり、花臺の上に月輪あり月輪の中に慕(ボ)字あり、變じて羂索(クエンサク)となる、羂索變じて不空羂索觀世音菩薩となる、首に花冠を戴く、冠中に阿彌陀佛あり、三面四臂にして通身肉色なり、右の手には念珠を持し、次の手には寶瓶を持し、左手は蓮花を持し、次の手は羂索を持す、鹿皮を以て袈裟となし、七寶を以て衣服となす、珠瓔珞環釧をもて種種に莊嚴し、赤蓮花に坐し大光明を放つ、及び蓮花部の諸尊乃至無量の仙衆前後に圍繞す。

○根本印　二手を蓮合し、進・力・禪・智を金剛拳にして縛し右手の禪度を左手の虎口の中に入る、口傳あり、(朱)索の如し　唵(アボキヤ)阿謨伽(アボキヤハムトマハシヤクロタ)、跛娜麼播捨(ハトマハシヤ)、矩喚駄(クヤラシヤヤハラ)羯羅灑野鉢羅吠捨野(ハラハイシヤヤマカハシユハ)、麼賀鉢輪跛(マカハラハンタラ)底野麼嚩嚕拏(チエムマハロタク)矩吠囉沒囉憾麼(ハイラボーラカンマ)吠灑駄羅跛娜摩矩攞(マエンムハイシヤタラハトマタラナム)三摩琰吽吽

此の印明は千手儀軌四攝明に出づと雖も、惠果傳の中に此の印明之を用ふ、仍て規模となすべき者。遍照寺流に之を用ふ。

○正念誦(大日本尊)　(一)唵、二阿暮伽(アボキヤ)毘(ビシヤ)闍耶(ウムハツタ)汗吒　○又の印　二手金合し二中指を並べ立て、二頭指を屈して中指の第二節に當てゝ相ひ附けず、二大指を並べて掌中に入れよ、根本印と名く、卅卷第三卷に出づ。

念誦　佛眼　大日　○眞言　前の小呪を用ひよ(隨作事業成就の明と名く、心呪經に出づ)　○散無量壽　本尊二　八字　馬頭(教)　一字

○護摩　○本尊段(小呪印明を用ふ。)　○伴僧同じ　○後加持(祕密心眞言を用ひよ。)　(二)唵一鉢頭(ハントマタラ)二摩陀囉(合)、二阿暮伽惹野泥(アボキヤシヤテイ)、三主嚕(シユロ)主嚕、四娑縛訶(ソハカ)五　二卷儀軌並に千手法に出づ　或る說に大を用ふ云云

○功能　儀軌　此の法號名は世間最勝成就の法なり、此の法を修する者は壽命長遠なり。經に云く　我れ則ち羂索勝鉤を執持す鉤を挽すれば、一切の厄難より脫出す。　○禮佛(淡號)

○○白衣

○(三)半拏囉(ハンタラ)、嚩引悉儞(シニ)　離垢金剛　○半拏羅縛悉儞大薩埵　蓮花部衆諸聖衆　○行法　○半　○鉢曇摩花又は白蓮花。常の如し

(四)墳の中に阿字あり變じて月輪となる、月輪の中に紇哩字あり變じて蓮花臺となる、

(一)樓閣云云　道場觀。

(一)原本梵字、對譯文字は不空羂索自在王呪經上卷に依る。

(二)原本梵字、對譯文字は不空羂索神變眞言經第三(或は二か)に依る。

(三)原本梵字、對譯文字は十一面軌下卷所載の眞言によ。

(四)壇の中云云　道場觀。

花臺の上に半字(ハム)あり變じて鉢曇摩(ハトマ)花となる師說に曰く白衣觀自在菩薩となる、首に天冠を戴き身には(二)素衣を着す、左手に念珠を執り右手は印文を持す、足には白蓮花を踏み光明赫奕たり、乃至無量の聖衆前後に圍繞す。

○根本印言 二手二頭指を內縛す。唵濕吠(シーティ)帝、惹致(シャチ)儞半拏(ハンタ)羅縛悉儞(シャタ)麼(マ)怛(タ)哩(タリ)捉(ニ)ソハカ 十一面軌に出づ。

○正念誦 大日本尊 唵濕吠帝半拏羅縛悉儞惹致儞半拏羅縛悉儞惹吒麼怛哩捉ソハカ 十一面軌の下卷に出づ ○又の印 惠の羽を仰け、施願にして、定の羽を拳に作り、進・禪・峰を合す。

○心眞言 唵鉢羅(ハラダ)拏捨縛里叶發吒 ○散念誦 佛眼 大日 無量壽 本尊中呪 八字 馬頭 一字。

○護摩 ○本尊段 召遣、根本印、中呪を用ふ、芥子、第三呪を用ふ ○後加持 心眞言 ○伴僧同じ ○禮佛 如說

裏書 白衣觀音要記に云く

白衣觀音は是れ蓮花部中の部母の菩薩卽ち是れなり。故に十一面儀軌に云く、次に部母白衣觀音菩薩印を結ぶ云云

又た攝無礙經に云く 伴陁羅(ハンタラ)縛(ハシニ)子尼是れ白衣觀世音菩薩なり、此れを母となす云云。

白衣觀音を以て母とする義は、且く蓮花部中の諸尊に約して根本の生長の義門となす故に、母の義を立つるなり。

問ふ、何が故ぞ白衣觀音を以て蓮花部中の部母尊とするや。答ふ、今私に曰く、白色は是れ衆色の根本たるが故に。白衣相を以て此の尊を表するは、蓮花中根本部母の義なり、母は是れ子が與に根源物たるが故なり、今私に案じて云く、白衣觀音を以て諸の星宿に於て祖母とするの義あるなり、故に是れ星供常途の儀式に於て、白衣觀音を以て祈禱が助成因緣とするなり、其の所以は諸の星宿の根本とするを以て、生母の義なる故なり。

是れ諸の星宿中に於て觀音を以て本主とするなり、而して諸觀音の中に於ては、白衣觀音を以て部母とするなり、故に諸星に供する時、白衣觀音を以て助成本尊と爲すことは此の處(コトハリ)あるなり。

北辰菩薩所說經に云く、我れ北辰菩薩を名けて妙見といふ、妙見菩薩とは是れ觀自在菩薩の異名なり、觀自在菩薩には妙見の義あるなり、妙觀察智は是れ妙見の義なり、と(を)略す白衣觀音は是れ胎藏界蓮花部中の白處尊に相ひ當るなり、大白衣とは蓮花部中の大明白身觀音に相ひ當るなり云云委しくは彼の記を見るべし

◎◎葉衣

○阿里也(一)鉢羅拏捨縛哩異行金剛　○葉衣觀音大薩埵　蓮花部中諸聖衆　○娑　○米

敷蓮已上普通又は吉祥菓或はいふ調伏に用ふるか。　○㕹摧破の義なり、鉞する時四臂の像なり、二臂の時は鉞斧を用ふべからず、持物に付て三形を用ふべきなり。　○鉞斧　○二臂四臂不同なり但し鉞す

(二)壇中に𑖀字あり變じて八葉の蓮花となる、其の上に𑖀字あり月輪となる、月輪の中に種子あり變じて三形となる、三形變じて本尊葉衣觀自在菩薩となる、形天女の如し、首に寶冠を戴けり、冠中に無量壽如來有ます、瓔珞環釧をもて其の身を莊嚴す、身に圓光あり、光焰圍繞す、像に四臂あり、右の第一の手を心に當て吉祥菓を持す、第二の手は施願に作る、左の第一の手は鉞斧を持し、第二の手は絹索を持し、紅蓮花上に坐す、蓮花部の聖衆及び二十八大藥叉將並に諸の眷屬各の本位に住し恭敬し圍繞す。

○次次常の如し　○車輅　次に召請印右の手前んで左手の腕を把り、頂上に於て左手の四指もて來去せよ　曩謨吠室羅末拏薩埵也麼地以、悉捺羅薩埵也悉他波嚩親婆、多莎訶

此の契及び眞言七返を誦すれば、天王眷屬と壇會に降臨す。口に云く、天王慈悲あつて座に就き小供養を受けたまへと取意乃至諸の夜叉・羅刹・諸佛菩薩・金剛力士等、道場に降臨し我がために證明したまへと文り。

(一)明　名の字か

(二)原本梵字、對譯文字は冊帖本による。

(三)夜　梵字なるも今は略す。

○四天王結界印二手の小指を掌中に屈し入れ、右、左を押し、二中指・二無(二)明指を竪て相離すこと一寸、二頭を柱へ、二大指を並べ屈して掌中に入れよ。　唵婆帝也、畔駄畔駄唅吽旃莎訶　兩印言は毗沙門別行軌に出づ。

此の契は再三結界して印を上下して各の三返すれば、一切の諸惡魔悉く散し遠かる、然して後ち契を舉げ、四方に東南西北を周りて而して後ち始めよ、契を作り眞言を誦して加持せよ、魔障皆走りて敢て近づかず、道場に於て再三四に結界し、法の如く方さに乃ち天王を啓請せば、成就の力を得て即ち無畏を得。

○根本印八葉○心眞言　(三)唵一鉢囉二合拏捨嚩哩吽引發吒　○正念誦大日本尊　上の言　○又の印金合　○眞言は上に同じ　○散念誦　佛眼　大日　聖觀　本尊大陀羅尼毎日七反

心眞言七ケ日、冊萬返を滿せ

○護摩　○本尊段八葉印心眞言を以て一切に用ふ。　馬頭數　不動　八方天伴僧共に滿す　八字　一字

伴僧念誦の事　先づ佛眼　金以後一字なり。

各一天の明を念誦す　鈴の後ち本尊小呪　口別に各の五千返・　燒供以後八方天

○小壇藥叉に供す(朱)藥衣を以て中尊と爲して惠風を鈞せよ云云　○眞言廿八大藥叉各別の言　別にあり、或は台の諸藥叉の言之を用ふ。　○三形必ずしも用ひず　○根本印台の諸藥叉印を用ふ　文に云く內縛　○讃諸天の讃　別にあり、　○念誦佛、大、藥、夜叉等、慈護

(一)鉢囉拏捨嚩哩冊帖本により對譯す。

(二)壇中云云　道場觀。

(三)夜又は吽